雅言集覧

毛の部

巻之六十

六

和書門
類 二二八四二 號 一〇一 函 一四 架 二〇 冊

内閣文庫
和書 類 二二八四二 號 二〇 冊 二〇八 函 一二 架

内閣文庫
番號	和 22842	
冊數	20	（20）
函號	208	34

国立公文書館
National Archives of Japan

雅言集覧巻之六十六

石川雅望著

毛の部

も　裳の字の心ことぞ云へり（褐なども）

伊勢モ　卌四段　あるじの男うたよみて裳のこしにゆひつけさす　出てゆく君がためにとぬぎつれば我さへもなくなりぬべきかな○万五ノ十七　たまきはるうちのかぎりはたひらけくやすくもあらんを事もなく裳無母阿良牟遠与の中のうきくるしきことに云ふ　川その川のせにこそあれやをけくをりくりやまかせ　毛素久由可牟登由吉能安末能○

万十四 廿五 振ゆへて明くもありこゝろまことにこゝろしまとひ
し紐ハとけぬものゆへか

裳

夕良 十三 たらちねの母のもとにおもひ入るかりすそに裳
○碁 六 秋入りてわかのかたの袖みちのくのたもとなりすく
かゝる地の色ハきゝまよひて

喪

新勅 雑三 皇嘉門院 一のくるまにまかりて後
表宮室院の法をたて一條のみかへりて後 云云
もろた草
夫七 師光 [illegible]のうちにこゝろの山のもろた草かな

ハこゝろしの志かくしみてこゝろ ○ 未 廿七 同じくあり 君
のことゝもみちのくもさめたる 云云 君のとこよに大内
山ハおしかこと ○ 桐 十二 ちりかゝるにはくてまかきの
かはさゝ 云云 ○ 帚 三 ところひとまさるともゝ
をとこゆかりのみしてそ ○ 夕良 十九 そのこゝろあけ
なひてさかるとのみこえつゝしかふ ○ 後撰 春上 行明
親王 かれの比へこゝろはしてもかへるもゝひさしき
とふたに花をつゝしむ
もろをゝ王戸
宇治拾 十 六条坊門万里小路にありける家
かへるさまりとて中へおもへんとへかり

諸かつら　袖抄云粧ニ髪ヲソヘタルヲモロカツラト云リ

後撰　足引の山におふてふもろかつらもろともにこそ
いらまほしけれ○新古雑云　見しはいまは（ゝ）いは
洞るかくらし（ゝ）雛葉にてかきりのをしるしる○
ちはやふる　源太府集ヲ引テ　やまと人のもろかつらとも
いふかけりてのこあるかひはあらねとも
忘られにけ（ゝ）葵の一夜かなや

諸神（モロカミ）

千載　神祇　大嘗會悠紀方云云　諸神郷をよめる　匡房
いにしへの神の御代よりもろ神のいのるいはひは君か
代のため

諸口（モロクチ）

クニ上ノ一ノ卅　天竺に仏像祭た七ツ八ツつらなへたる男ひ
とつひたいに四まちかへをさしてさしけらん
きんを以玉を持ちてこちなきかへるとてとる
みたちみてかのもろ口にて中事をえいはれひ
ぬたはね事なれ

諸矢（モロヤ）

続古事談　後中書王殿上みてえみかひをする　思ふて
にきりかたみこなひなみなかへし川の花なしと
思ひけん○菊花殿上記　たゝいはいふ月の松のあへつきらう
そらやみに代をつけてひかなん○同　寄合ことてし

きハそろ矢のこゝろハ梓弓とうちひく白みのをわ○
或人弓いるをならふにもろやをたはさみ
て的にむかふ師のいふ初心の人二ッの矢をもつ事な
かれ

そろ矢
堀次 賭弓 ハヤ矢乙矢トモ射アテヽ二度ノヨロコヒヲナスラハ
タリ
春雨しく春のたしめ給梓弓諸矢しつ
ゐるかはりに○拾十六 康和二年東宮蔵人
なりて同じ内民部丞にて律をそへて二つひきら
こひをのへて右近衛将監にをもむきける 順
人にかしこき世のし梓弓そろうをもてきはそろ矢に
つもきを

藻
流をみてもあさも河あさ瀬のうちを
和泉式部集上 なきかはる流れにいとゝねをそめ
かきの宿のもとにをうなのてれ○夫木十八 為家
かたしろあかはる川のそもの芸そしけしる藻に
ひまいそ○同 中務 とれ一つかれ人のゐたにはうる藻
たまなるひとくのふともこもかせたれ師○新古 三
光俊 ことなしにみる流の藻の藻あけにいめかはれ
てよるとをしらぬ

そろごろ
鈴虫 十七 六条院にもかくゐるにいとさかしの○
諸々本 三 まゐるになりてるさきに人のうちなくゐ

やすらん○ヤトリキ 卅四 もろ心にあるとひかへるを
タキリトカホルト之○若菜上 卌 此もろともの浄をも
もろ人のみちるなき事を出ひて○クラ 下ノ廿七
此事なともも出給とともろ人の下をわくもほかある
ひ惣こゝもちる出よ○蓬生 四 もろ人の何事と
しめへとて餓にむすれゆきも○楚王変 四 とも
もろせしらなかれつてもつるまなき

諸声（モロコヱ）

イセモ 廿段 ミ渕にて我ぞミゆらん雄さん多谷あり
あそぶもろ声にならく○柏木 卅三 あるこそのさき
我ゝまからぬる山里ハすらきにまかせてもろ声に鳴

哀○同 二十四 ヲヘしらもろ声にかよふすゝしく
こ琴あはせて○スマ 四十六 もろ声にたしかに○
宇治 一ノ 十一 そよかつしひかるむのしもゝもろこゑ
みえらるゝ○椎 二ノ九 木の声にあはれくゝなき
あけゝるすゝしくゝあり――――― ○多武峯物語
あはれ也けるなつかしひてわすれあはれもろ声にこそ
なくなるともは

もろ恋

六ノ四 片恋ノ歌 こゝもろの歌を也其歌ハまゝ
うらこひそ諸声にたま
もろ思ひし

和泉式部集上 庭中にすゝきのおりけるをきゝて人のおもと
つきぬかに庭にしけりたるをきゝてこの人の衣
きりのはこしのもとにをちけれ ○古今恋五 素性法師
きりのはもふみわけかたくなりにけりかならず思ひねそと
とけりける ○後拾二十七 大江にしき何りし女
のこゝろみにすかれてたゝしのうゝに
何かかゝ詠て何かの処のかなくん何りしかゝ 左補
時しへのとこゝに手かそりかしきりにけしかは
さゝくこゝゆるに ○ロウノ上六ノ七 きりのこしみなかえに
中の席荒を慕とおきゝふ言云 きりのこしのように
山かたかりけるにおくさんと思ふ秋なりなくに ○

あきまのこゝて 詞 かのいぬいのうらみ吹あへんかんゆる
かなそこきすゝいふ家きさきりの此なといふと
○同四 此ちきをまちきせ 鴬のはきをまちて何すれ
つゝきこのきりのこし外はに厳にかれをつん ○
土佐 きりのこしみすゝりてうへもきしるはけ
○桐二 きりのこしみな一つてうつるのおもかみにむかし云
揚貴妃のうゝのしたり出つべく歳ゆくみ
きりのかしの奇
桐 古 庭こしてもの葉など きりのこしの奇など
さらく
絵巻三 あはれ何の紙にきりのく紙久

のはなれかたしといへることに ○夫木 主 あしひきの
山ちのあらし松をさむみちりぬれはもろき秋の木の葉
○白文 十二ノ十八 縁雲易散琉璃脆 ○朗詠 酒 王勣卿
霞紫浪脆
もろき紀　涙
秋四ノ中 十六 又 ゆくもろき紀有朋ことゝ一とせしく
もろく出ぬ ○夢 廿四 雲ハもろく風に一つきえてきたこの
たよりけみもろきなみたハ玉ぬ ○ 新古 雑下
あるし吹華か木の葉の乱るゝをみてもろく淑かく
なのみならぬに ○玉葉 秋 木枯に木の葉の落る山里
また洞さへこそもろく涙もれ ○櫻姫 十七 山おろし
のあらしね本の葉の露よりもあやなくもろき紀夏洞
なみた
万二十廿八 母呂母呂ハさけくもすそすこへ有くまて
み ○古今序 万かきつめてとを吹しめ紀いとも
もろくの事をきてかをみまゝかみ ○遠山 十二
月ハもろくみ語りてゆきしう時の紀有人ハ
もろき
六ノ三 但かなる露かしく涙もろきみるや
し花を人のとかるん
もろや
古意 ヨミ人シラス あるなる事のもろや結ある上さこゝ

人の為しきてこそしるもけれ○東ヤ三　もろやさしき
のおこりたらん事しらん心にあひたるへきあまたあら
ほとおもんのしまひつる○夕霧廿　もかくうけひかた
とかくしらふゑて○東ヤ八　もかくかねうちおれ
すくもまさらん女の形をなし○同 十七　こそかく
おいふしとて外さま人思ひおかぬかひめへ川色ハ
○竹取 十一　かくやひめかきいへてなくさむる母ら
のことつらんつらくすへしらしかふをしひそつるら
まつるきみに清らなる聞んす○カケ 三 廿　こころ
暗をそこら所を聞ふきしきて（おほつかなく）こころん聞りあんとし
こえくらう○イセモ 二十九 二十九　くらひとよさけのことなる

色なきそしらるなかにこそまたハ○夕霧 十 人の心は
うち出きぬハなかきおもへしらは誠聞んなきつらは
ひらなる様ふりて人あるへ心ひみ心ひを聞ていへ
もしく
萬葉　山路の昔ヲ松竹の十もしか思ひて偽あるまことを
あしら　奇之
五十一右　かくしひとをこひしうなれとも人の
あひさへもちひ人とは佳しなるとおもし○紙面色
もののかけるかくなり山吹の色ひしをも多てひとり川
つしまなかくなるもにかをて思ふたなとつとなくの人
うなもころ心一の人へさてしつきて気つまんとする

国立公文書館
National Archives of Japan

に侍るを書てさしいれ給ふに右近ノ　云云
ちひさき紙に書て后の方へ給ふのとこ本中
書てあるなり〇四四　いとをかしき事なり
いふ筆んとゆき侍りてとゝめ書て云云持え
書て書きてみたてまつりてあらはにそこぞ侍け
て御らん源中将つけよみけるいふ〇六四　書て
しかるになれこゝろへあら給ふ云云　暑かなくこゝい
かくへつくへ八かうんとおもひまへつひ給ふ云云　云と
はかるさかなて恥すかへてある事にとま
あつかしてうちそとうちきて〇一ノ七　むかしのこゝろ
かつるの浦のゆゑにし男をもふかく思ふたゝかり

歌ノ上ノ句ヲ本
下句ヲ末ト云リ

まくらの草の末をつよむとや事なりとかきのへける
をかんゆましくめてさまかひけりとて云云〇古
今の草紙を机にかけおきて事よりの本
ことを作りみて歌の末ハ本になと作るなり
本より許
後撰四十三きみの御ことをありいにしへを思ひもつる
〇同四十八少納言のもとに祝んとのかきて奉りけ
るかし〇未摘二　以前のことをさしていひてゆきしか
らふ
ことゝ　故
六六ノ上　重家の津まてうつる葉の花にいつきの庵

ときは山にみとりあらん〇拾遺 順 紫のふち咲く松

の梢にはもとのみとりもみえすそありける〇もとゝ

して作りなしたるをもとゝいへる中にきこえて

云云 さうらふ〇桐 卅一 うちにはもとのなきそもとゝ

を御さかしみて〇白文 十一ノ十一 改換旧容質

〇同 同 城上山如故

もとみて

万葉 下ノ五十七 小侍従 詞 物おもひけるか作る

ある女をもとみて一つ狩衣のもとにかよひて待んこ

ろなゆくんなかつんなき明らひさまこゝは御へさま

かみへきにけ方の覚しとや覚されけのし

もとおもひ

万葉 下ノ九十九 不動尊おはしますもとのくらひその日数

をかそへまゐらするまゐりなへて云云 このたひしまゐる

師説 本紙ノ十之

もとのこゝろ

逢 二十 昔をも我こそとはましか逢ふはなくてふきよりも

あのもとの心を〇イセモ 八十五段 むかし君にわらはよりつかうまつ

りて何事 云云 されともとのこゝろうしなは

てまうてけるになむありける〇古 十七ノ六 いにしへ

の野中の清水ぬるけれともとの心をしる人そ

くむ〇古 十七 石上ふるのゝもとかしはもとの

こゝろ見ることもなしに

もとの妻（め）

拾遺五 女のもとにまかりけるをもとのめの去

りしに侍りけれは

もとした

宇四十六云 聖ハもとハ心ありて悪人にて○華

六 又もとハやんてなきぬきたるなれよとふ

みつかきあへぬくとりつかひて覚ねたる

へ妙えた

もとの藤

梛之 もとつ藤なハあやうき所にまうらぬかふ

さもあれは

もとの此方

梵檮冊ハ 松のもとつのきるのかたなと云

もとくも

古哥上 さくらの花のちるを見て云○きつと 二十九

御もとのもとにみなもと上さま歌つかいてなかも

あらしみえハおもか○華 四十 さうしのもと

ハ 出もとに見て

もとに見て

アカ之 四十之 身なら紀ハもとに見てまうなきけれ

湖見えた

もどろく

左京大夫顕輔集 前左京大夫基俊の許へ又哥合せへし

歌を判しける人に給へてける返事に そらおほ

しのゝ中つもりの事ともある事は思ひさしためれとも

覚えけれは 哥は何事に心ありともへらる事にかは

とて 風をかたふみてまよはんも船の事ともろきは君

まかれこそ もとろふかなし ○景行紀 十二丁 男女

並椎結文身（モトロケ） ○ きゝをかゝて出の飾りて時雨して

雲の袖をもとろかしける

そとろかりす

為師何 かゝて汝は吾大将なりしの娘のみとて女のみ

をもとそてすゝけてくるま 鞆をもとかゝしめんとてそゝ

ろかしもかたみはあるを涙や○ もとゝろくとゆかしき 枕かなし

の錦もり そとゝろかりしもきる衣

もとは葉

新六 秋の思 知家 思ふとちゐては来てさらん秋のさき

のもとは葉のもみち葉ちりしかもかは

もとほり

雄略紀 五 相羊（モトホリ）手藪澤 ○万 三ノ十三 うちそゝたち

もとほりなし ○同 十九ノ廿一 大とのゝこのもとほりの

雪照らさそ ○ △メクルト云 古書之集中

田ノ字ヲカケリ

もとゝして

乙女上 才をもとゝしてこそ大和魂の世に

用ひらるゝ方もつようは侍らめ○ウキ上廿 おもとの

もとの才まさりて侍れはこそ万の事を

おきて侍るもたらぬ所なり○落葉上九十七 志川

やうなるをもとゝして人をもとゝせよ○トリカヘ二ノ廿

思ひ出おほし なとなれなる事のもとなるにや

かへりてうつし所きをもとゝさ思ふみこそよ思ふ

もとゝす

神代記上二十六 左ノ髻(モトヽリ)○宇治十二ノ四 冠ぬけみ

もとゝりもゆふし

もとゝりまたもみたれ スクナキ白髪サハキタル之

七 むかしの翁のもとゝりなからおはしけるに

○大鏡三 太政大臣實頼 云 冬のみこゝの東お

もてまいりて所もとゝ一まい所なりてつかさまいらせ

よろつの事きこえ給ふ所なりの物のあたりの名なりしけむ

は所給所なんすなんとゆかりてかなめけれてゆそ

んとみえまいらせてゆうしくしくすまいらせ

かのつゝまうしこゝろなる折は所袖をかへする

まかもしてたかとなきしさまもまかりぬ

本柏(モトカシハ) 根本ノ心之

狭上二ノ八 大きおとゝの北方ハ 太政大臣ノ娘 堀川殿ノ北方 中のこの

かこみて 北方多キ中ニ中デハ第一ト云心之 これこうしきを本おハしたれとかく
なあるかひくさきをちうちかたなたふや云々 ○古
難工ヨミ人シラス いつのうちおかきのあとかしい
このんいハをなしてうちやうにか ○続古今四 定家 契
まゆきし木のそうのこなたうしをなしてや志
らしくしをその霧の色
さとうし かうきの雨之
こゝろあらしおもひ
続や石ね 念珠をかくとあらしおもひてあかしくに
袈裟に玉清たり涙のたのきて 慈恵大僧正

もとよりは
業ツム七 あはれひのすゑしをも渡りてこなたくもと
のかりそめ云ことわれかやまとをしといへてある男あり
もとれ ○源氏四十一 こしたるやとらうかる尼とふ
らひおかくしなし ○同文ニノ十四 由来（モトヨリ） ○桐五 液
源氏のこゝろのほかさうひてかくなき来のさうら
しをほうみうつらきおひて ○第十七 こゝに
女のありしこちゝろかりひいしくさうかる
事みや いてかいら人のあみへし云々 ○六
条 秋の月の名ころしやこゝつハこゝろ
その名あへうち ○同 同 もとよりの色み

はなれて葉のたむけえんハついものかなしかて
たちきる
蓬生廿 前栽の花もいろいろちりはてしかは
としにて ○手習卅 ふたつ川の橋のもとに立よる
ねしたも色みしん八まそんて敷ぞする
たえつゝ
蜻蛉十三 たえしつゝ待見るきよのみ袖ふるには萩や
え脚ね秋あきて下葉さん
さらつへ
宿木卅五 たえてかけ脚る人とらへんを寄せて秋か
つうみ生ける思ひハおもひて流く夢きさ ○アカシ初

総角たつふるき山をたちはなれて跡なきさえ路中ゝ
賢木五十 ○万十廿一 たちの人かくして文をやめつゝ
しらぬやなかくる松つきもれハ
まくむ 求
薄雲九 人のめにとめて秋きをしのびしかと
○早蕨卅五 大空の深き色をしのびこそ物ときめ
なきらきみひそ ○末摘 外の国あるか見えぬこつる
めぐみしかやうのこのめも秋きくみなし花
としめしやおもかる ○早 四十八 ちかり川の霧なく
わたりきて ○同廿 おもはしたさらなりたにたむ
とこしなみもしのかれたれも渡して ○宇治十七

なこめさとゝきこえしと云書くもさきの村ゟ
とゝめさせもとて あまつかせは○ イセ八段 すまゝ家
なこむとて
なにはめくりあひ
十ノ七 云云 此海をのこさんとてよしところ
をこなたにゆくとて天川といふ所にいたりぬ○
イセモ 八十二段 渚をなきてきて○ 家本七 こゝろ
うにもなこそめのふねよりの○ 常十二 きこし
をくものうつりあかんたまあふりこそにこそめ
くれしし○同 二十九 中将ハ外にくみて夜の庭
あるまし 柳しやかせてなこめふるへと柳すへる

なくくふち 腐ニアラス
六六ノ下 百八 もゝくつらち清き月もみなきゝすこや
みをんと思ひしやしの橋○ 六一下 百十七 雑上 さく
のよみふむつむ雪の末をゝなくくらしゆく春
さくら咲きて吉
なのか
はなく さくらきの処之
なこのやう
宇舟 五十七 いふてハなこゝのやうみしそ
なにあくのさくらん
夫木四 好忠集 二月中 秋宵のなこうあくの桜さへ
なくゝて何をのみてこしへ数なし○同 庭花

信実朝臣　萩ちらしもとあらの桜庭ひとすみかに
見ぬ千河なやこらん
もとあらの薄
夫木 十一　資季　旅人の分みしむのへの秋風にもとあ
らの薄こゑもしく
もとあらの一本にて
夫木 十五　家長　植てみるもとあらの一本て萩葉を
をしらぬ知らぬ咲に咲さそむ
もとあらの萩
夫木 廿七　仲正　野宮に萩のもとあらおちまるかも
まくらにゆきまとふかいて　おのつから

もとあら
古今 恋四　宮城野のもとあらの小萩露をおもみ風を
待ごと君をこそまて　○好忠集　宮城野のやけふの
萩の錦たちかへりもとあらのみさかんたかふかそ
都のふ　○同　秋霜のもとあらの桜たちもちさく
をうけてこそ見ゆあらしなきもの
もとあらの一むら
新六 六 知家　おもひをいふにあまた新山のもとあ
らの一むら一かたかけそあかし
かりとさそふ
廿九 百一　よるのしもにあさのけしきもとてさそふ

さらへなみこえてそらつまなきなし

もしほ

夫木 廿六 信綱 汲くしほりもこそもとしほに

はおしやみにそて志ほるかをもしけなる△此句不審

ふりくさる例なし信実を用ひらるへき理なし

書捨なや

もしくさ ○囲

ワカナ 下ノ八十六 恵の山ちはるゝてせしき清水や

まれなり○ヤドリキ 五十九 恵の人なきぬれの花もかな

人のもしほかすゝしく作者を知らる庭もしくお

なし出る也

もしほき

弘安 四十四 きさ明き人ぬれきにゆくりとなとくき

おひなん

もしほき時

指三 八雲ノコヲ人 同 指まへにしふ清水に清ひ

をしかひて吹こうくれつましく春つき花を

やの雨にものいうもて吹きうてなるやいもしく

このきなきいてと云

もしほきをおひ

夕キリ 三十四ノ 此ノ外にも有さ明くて人のもしきを

おひにをへ起きとうへいも菊の事ならある

秘〻 宮よりかきる云
なとゝ一のまきし
ト云カケテ うらやまれもしたるを思ひつゝるさ中なりと
のいとゝこのしき下なるくうとしゝう紀をわか
いわれ心なれるかれ
をとゝきいみ
初上十九 中まき 御なんつしたる思ひわきにをれこな
覚しきさしつかえをとこきおかふ事あるへし
な
をとき
後カケ上 七歳なる成事 父かこまうしとふ あつ家この

七とせになる子 父をとゝもとゝきて 宮藤人とふこゝを
つくわつうたし 父の元ハ○初上十九 あなさやうなる覚
をとゝきあらん事ハ 心えし 覚きよし 覚しきよし
わきし 御あしなしてん○同 同廿五 ものをゆきかね
中将にかしこう知ても合なしてすさきなさう
ましとうしうらわた○手習七よりうつくしう物を庭入
まことまうらひうなうに出来なんとすると思とくる
あり○紅葉 二十六 中将ハ此男のかうしくもめくうる
さうしてノ御なとも紀わかが給いとをもを○賛三
よのひとゝき思ひわかへきゝて名りなとうけしき
あしくもなる○ヤトリキ 五十九 世の人に似ぬ心の程

国立公文書館
National Archives of Japan

かはらぬ人をしのひかねしや何ゆゑにかは ○ 椰 八 人をもは
人ハ例なきことゝきゝつれとかはもらすさまし
みゆへし御事を人をとことゝききかひとへにいとはしき
いふ座をはなるゝ ○ 塩 次 君房 ことゝかはしく 七夕 かな
やまおもはんかはかね筆ふきたりつとへるかな ○ 六六上
ますかゝみすては見えたえたゝしけるを虫の心さへかゝりとて
ゆふこゝろをこきいゝたらん ○ 拾七 ヒトモトキク あさこなれかし
人をとときくるゝものにしてそ花のあかさを追ふて
みゆる ○ 同 恋二 我かのかきをとそこゝろへき人
りはる思ふ程人ハ心みゆる歎しき文 ○ 千載 恋四 人のう
へいとおもふはりしかことしかも心ゝなるをいと[illegible]

こゝろみる人を
わかとうし
持給 三十 カホル 宮 君ノコヲミテ [illegible]
うらみきのつかは[illegible]いつかたもあり恋しきみ御心 式アノ
尋ねし我みや[illegible]
かなきもおもとふかへをとみる[illegible]
[illegible]
つら人を利[illegible] ○ 枕 二ノ下
三十七 大将 女ヨ ホノメカス 人をこゝろみる[illegible]
[illegible]
と我[illegible] ○ 枕 九ノ三十七

たひらけなる事みさらそくてまうろくてこそのこと
ろんいはるとかし ○ 老后菅の紀
さまなるをこそかしこうてうすしゝをまたて八
逢ことなりかめしとそ識 ○ 榮 四 年 伴周かる
おもひ明るとさとあへき事とてこゝに覚しお
きこ人のききぬたら下のかけの人志あおも心き
ゆたなる御命とかくしてきたる歌みて出合
は翁のかとはにてさまめへかしとこまらう
てゆへ思ふ人なるへし ○ 竹河 ここにし竹河
うくしや何のところみみ事なかし思ひてとこうし
きこ所にし ○ 早良五 居まさなをなとしらつる

ーまち緒に竹寺きのもり ○ 若葉 か 年八 人のいへにある
てとにまとうのしく明思ひしなる人のさうしらに
○ 嘗 二 書 人のいへにてまたきこのしき葉なか
かれとつ見なく明らへてそこのしかひける
也ちる
文選東都賦 斯乃伏羲子之所以基皇統也 ○神
皇正統紀 天祖をしめて基をひらき ○若菜下 七十四
明そて御きは女のこゝには明和かし羅婦ときこそる
をうし
うとゆひ
契沖云 頭注ことむらさき頭は色濃紫之けこそこらとう

よりてもとゆひはむらさきの糸をそよりける　今按

太神宮御装束注文ニ髻結紫絲八條長五尺ト云リ

○万葉十二　うちはへのひもひとつにもとゆひをむすび

トモ　よりけり　○古今四　君ことに霜やおきつらむこもりゆきさ

紐そかりしもとゆひの霜ハおくらむ　○桐　むすびひいる

乃いかにやふかきこもとゆひの　○拾　秋　兼盛　はそでゆく

秋のなごりみれは物ハまなこもとゆひの霜おそへき

△世ハのこをやりてもとゆひをしやりけるもとゆひかたち

もしゆひあけてかみをもいはゝもとゆひ　同前よりける

○和名抄　髻　毛度由比以組束髪也

といふ事

今さらに末の枯葉やおちそめてもとゆひの色かはりける

芦の形△祇注云　末を落そめて本の方のみやどり形ぞ

葉斗のこるをいふなり　貞徳云　さハなけれと元ト

シゲカリシ処ノ葉ハカリ残ルト云フコカ篠ニハアルヘカラス

もとすゝき　哥ノ上句下句ニ

床夏　六帖　哥　かみをおろしてこゝろのひつきしく

くてのこゝろ物をはなちまうすへをとゝめくるゝ南

みたちすぐるは　○同八　もとゆひあかぬ哥

くちすくなきもちものも

といふ

宇治十ノ五　すちかといふ者居所をもとをむすびて一髪

をまりもせ　せきりせきりれ
をちゆ　刑
書紀一云永為汝俳優者云云初潮漬足時則足
占云云至腰則腰 捫腰
をち　至
イセモ九十六段　をちかへる月のをちかへりなむ
いはるハ女子みなさひとつふしける東ふかなり
をちふ　持夫
古本狭衣　たいひのをちふをも秋にすなるひかり
いまをも心にくくいかにすらゆかしかしふ△重荷をこし人
夫ヲイフ○　あはのをちふ　清輔集四位後　○拾玉四ノ二十七
あふさかのきこゆる人をせきとめちやかにそ　持夫ふ
ゆふさらん
をちしかハ　望潮
新六一　夫木十三　家隆内大臣　すみの東宮ゆく月のをち
しほのみちふなかく人に難波江の浦
をちひ　餅
類字七ニ　今夜さりおのこのをちなまいらせ
をちかう
をちひかみ
夫木卅二　鏡部元日鳥　仲正　多代までにかくる鏡並べて
あひそんとかくはつきのをちひさしからん○

須磨四　大将なとさへすゝみてつゝもてなし
ひとへを事すれ〇夫木　堀川二　夏　兄日　後拾
世にふるは秋をこそちひのすゝろに鳴かきつけを
稲しては　つくる

用ひ

宿木　廿五　さることにはきこえ党は、ほ　よきまうち
いりよ人はすくなくこそあらめ〇桃　四十七ノ初
任の表事の心をたゝさむ事を　用ひさせ給
給へきものてかへさひきこえて〇同　四十七　人ゝの
めやすく安子をもちひては〇筆　十六　安　なき
ありけはしき　老人さへ〇トリカヘ　一ノ廿四〇　篠原

経衡集　宿なにも知らぬ世に経るをつかせ
かたきをこそもちひけれ〇君か代をもちひのすゝ
ましきにいかなる人の心に祝はん〇紫日記
下ノ十六ウ　又あとを見つけてさるまもひさしいけ
萬きなけきをたのめてものはかな心にたるたら
ひてもちひん事のはかなき歎へし〇同廿四
ウ　もちひらるゝの条に　餅に用ひを云カケタル哥ア
リ〇　二アハセトル　八ニ

もり　森

万十八　木の間くゝりて鶯のなきてわたらん
く森に木の間も〇蓬生　すき　杜に

ゟ家のたゝ出ちなしくそらのやうにかたをさしきなふ
と見ゆ浅
花ノ上二四 此心のうちなりけんてたゝゆゑそこなりけん
○桐 二十五 さらなるをもかへし給のいふかしき
こゝちする ○榊 半上 さらなるをおぼしける事を
らしけり ○総角 雑三 つきさせずしみと
こそあはれきし侍るゆかしき女のこそをみつかさ
なる ○同 宮二 九案とおり女御なとみをおけし出
さするにいま筆おのつからとあるうれへをきこえ ○
○サマく二 このくやんてさはきあこゝろさ海をおもひ
つかうらゆりゆらんも ○椎 すゞむし 四ノ下 五十四 三云 よ覚え

川よそ御あわき おかうく志のひつくさきれみひつなき
こゝろにまいさせかみひめる ○若紫 廿 いかしけ
こゝはいへに志のひかくまきをよしこそうあきの
○宿木 五 いとこひのわりなみ内なく 人のいとへ
きこうんみ○帚 廿五 さうへしのみなりこかくある
まれ
まうれ
もみね
サカキ このうひの浅きめしみを見 かさく ○
桐 廿 おのつからてをひとりかけしてよろさきさけ

祢らし〇若紫 四 いつかしらぬ、なそひかめさるゝの
ことゝ人なれは、をゐゆんはむるらん〇夕霧 式 限なり
さきみ顔ひとむかしなる、時々や猶ゝはゝくまもりて
〇帚木 五 そのうちをとり出んこそ ひみこのはは
まもりまし きゝはゝれうるゝ

守モル

後撰 四 誰しもて そちりもまひかゝる人の部にいかなくを
まもりあらんとまもらん〇古 秋下 ヨミ人シラス かりやも
ゆくなね山田をもるとも藤原のかなの高ふをしむ物をしは
なりし〇後撰 秋上 人もなくひかはさしてもりつゝ秋そなかり
わかへきゝそつめちゝ人もやつはもる〇同 恋 六 ヨミ人シラス

まもるらんのこゝろこゝにゆきたつるさ山さとをしはらく
さしてゆくへきし△ まちまちまもるへき の歌あけゝり 新勅 式
新葉 上 人もこそゆるせとも、もるとも まもるの行はしるを
うつゝならるまゝに入りけり

漏雨守

拾類 賀 藤原長能朝臣 雨ふりてまもる人もなきいてゝ
宿を洩らぬるまゝの雨もる

まる 盛

万 二十 家に ありぬる つまふるみちを 草枕 旅に
しあれは 椎の葉にもる〇イセモ 八十七段 その ことゝそ
かつきてしたるを とらへて出しつる〇同

廿二段　いとひさしくてけふのうつほものにまいれる
をさなくて
まかりけ
ウツ樓上　一のみやの御かたのあさましうなりたまへ
かくて思ひとめて出られし○ウカナ下ノ廿七　このみけるあ
おとしのかしこまりの女のにほひともいとゆかしくまへ
けなかりつる
とかく
常にをとめ蔵上　おかしき姫のこゝちのことのをみな
くるしきを○ツレ〳〵草　二十八段　徒然のとしとをり前
かうしてはあるへし　倚廬の御所のさまなとを板敷をさけ

けなしの御簾（幕）をかけて布のかたひらあらはしくして
○桃二ノ八　いまはへるとよせけるをとりなしてきて
さらにもいはすなほしいてたるをいたくかしこまり御
すなはちしうちして○桃　こゝちのこともかたりのあけける鉤
くキ八やうの日のもすゝめになる○ウツホ　桜上上ノ一　四十九
こゝちのこともかたりみつ大きんのかしきをきすなと
みかた○紫日記　四十八　たゝしものそくしもかけさる
何事かはらをいはてあらしかきき
もくさし
左經記　三月廿一日記云　近曽以来上下之道俗男女
年七八以下者多病脳称裳瘡○本ノ奈てたらい

もかさといふものおこりてわつらひけるとそ云々　世人
今はこれをもかさといひて覚えぬはなし○和名抄
二　唐韻之皰面瘡也○類聚国史　仁寿二年
皰瘡流行人民疫死　云皰瘡 蒙瘡 世間　○続紀　十二ノ七　天
平七年閏四月十一月　云天下患豌豆　俗曰蒙瘡　○續
古事談五　もかさといふ病は新羅国よりおこりつる病也
のへ人をうひけるよりおこりてこの国にはつたへそめけり
うつりやすくてきこゆるものなりとそ○本朝世紀二　使病
者山居猶有喪也故曰喪瘡○大月類聚方二　一
児患之則一村流行也　猶蒙之曳下故名焉
もかさ

夫木二十一　関　俊成　よる中はまつもあきなくさわくなり
のもちれにそめるかなこゝろかな
さよのまに
漂漂九　末の垣根よりもくる人のもよ
のなかにも○漂寄宗二　ゆくへき男とやはけ
ひかくもふかうさらに○寄　四十二　大かな
のえみよみておもひておくらんけき○
若紫十八　吹まよふ深山おろしに夢さめて
滝の音もあり○桐壺　風のおとすゝしく吹て
虫の音もいとなきおりの…たかなく
くさむらもとなり　弄哀ヲモヨホス之○宿木　卅一　中ノ君ノモトヘ

叢ノ東川玉ハ此処ニ　いはく　やうよりも　ものゝけみ恋しくか
なしく思ひ候へとも心なれは心ならすしも　よそなれ共さへ
て物をいはんもなき也　○スマ二帖　いはれにおもへるもなれは
なくさむかたへも河ハ物思ひのたよりなりけるに　とき
なれ共　○若ツム四　あはれに思ひてをくりて一帖
てよりも候へよ　○スマ　津にかはる所にてあらはれて
あはれ候ひの人ハ京都若しの絆みつかさねてあら
きみかくの涙の声の限りそこそよそにさはりて　○若葉
上七　みむかひとつとひとのかかへきよしを
より中の人　○宇治四ノ　土佐　かの後の御後の
いはれあし事も　○業　三子ノ月十八　あをのあかき　仏云

あらのかいはむあひてへしかいさへいかかあらし
又候し　あれ　○山家集　さらぬだに秋ハものゝ
かなしきを　涸候ほとかきらしるかの声　○同　ひとり
藤の袖をめのかのをとらかにも涸ひよるるときり
秋をまかな　○新葉　君傷　その後にあらはれとも
見へハさらなる涸候をしそのあかて　○土佐　舟
とくこけわかのよきかしとよれ事ハ
かよわれ
玉本ノ　物候いはてや右しゝかおとろくまた
セクタフラレル心カ
ツヽナカス心カ
おこなひのもうへさらもうちめ候さかして俳
おりみなるる　○若菜　下云　これを女共そをいさを

につけても物思ひのもよほしになりぬれんとおもひの末に思ひ
なしぬべけき節あるよしのへんなるへし ○桐 さらハ出さす
の詞ハうらみなるをあはれをそひらけしなきよすかさま
かなひたるハさる覚しヘリ ○盛衰キ 二十 依敵には
傍ハ富のこともあるなるハもよほしなりと見えてもよほしけり
出仕時 ○元十七 屏風人々山さしのそこにる行幸き
ハせうてきしと山さしのの跡をたちやめてもよほさ
れける ○ク二下十二 女二の宮二條にむかへ奉ら
料などといふ 是ハ行にてた殿の御心と覚しけるに
つる所もよほしける ○同 中十六 出さる詞 さるかたにもよ
ほしやて さまさまにのたまハせつゝさこそ物をやさて

ことハいまた年つきとのみ入たハ ○カケ四 思ひ出やハ
もよほし所とも中けになる殿にともよそとも待出来ませ
ハそれ衣ハのかなつ世しなき下ゆくと物を待ちなき
物そあはれなきなん人まちまちて思ひん
もよほしぐさ
スマ 廿五 所つきをおほえつゝおもく三河ハ物思ひ
のもよほしくさなり
もよほし
夕霧 四十二 哀人の所をへ身の上を以ためしにたてつ
ゝてはくわうき事ともの催しに物語する
もよほし給ふ

桃土ノ主 出くることて 以前て抱くらふと云 廿川
あてくるや おそまりしたる抱とりて こゝ所のこ
て かへりけれハ つゐにすゑつて 清き後ハ 甚み
あゑひつきを 抱きのハ なよりなりとこゝ所
かしみやうちて 二條 ゑともにしの 二三人なりける
し抱こ所さむしりハ [illegible] のさかなあるて
見ゑつるに 所のこし 以前の こと云也 ○ 宇治 廿
六しに雑をふる所 [illegible] さしける
男くハしくいひて 抱しつる時に 壯量 [illegible]
かくて あそも 勿体なき こと所とうや 所を
つゝみ あしして あさしらん [illegible] ハ 云 ○ 盛衰 卅六

廿二 帯剣 とハ ひらきて おほくやらく 抱せさするてい
まつるに 以前し 女房のこ所しまて 事のいま あかき
また才の 比こう所る 時の てらあり
なしれ
十七 黒貂 ひとりハあまた 職男といへりけり 以前き
男そゝりる 古きず のけことうみちへの きぬをあ
らひて と云 ○ 末摘 廿八 抱に 火出て 衣のうれ
以前て 袖くゝしなかれて ○ 紅葉賀 十一 まゝ
このくおもしけに 花き人 をこゝろ 先に所
なくりく所し
拾遺集 以まてうハむ恋を この意て なしけり

くらしきし物を思はん
と語へり
サカキ 五 榊葉にいかなる折てとめつらんとし
のもとて
もつぐ
饗 卅六 一わしらせけりのへらみ○ウツ蝉 七
鬚がちにつけたるに○宇治 るみつらかゝれひく
うらにはたきけて粥をすゝらすれは○同 二ノ十五
世の人のいふ執鼻ともいふらむおりしきさあと
うちぬるをつけみなまゐりらめ○椎 二ノ六 火桶の
たしみ足をさんへをつけて○同 二ノ八 やり戸

ゆとおくるをゆゝみくし すこしきこしなるみなみ
て明るいちりやいでたる○同 二ノ九 風もゆとみ
くるしきねのしらにおとなくあなきてそのまくる
やりみすみき○見送 見送りのべて覚して伝
木丁 ひきやりつらめいゆのしてまくまてみえわたり
へたり○椎 二ノ上 卅九 木の下掛の風の音ゆるしろみ
しむ女あ所るみうしろめてけてみえわたりまも
きたる
もぐ油
蓬々未二 ゆめて豊みむくひきもつとまうへ人へて
○盛衰 卅九ノ四 よしゆうりゐる御使の所とてもぐ

へだつる

玉川 持

名寄 十二 さらしゝ口をさらしゝ川と名付けて
川と云ふる人あり○須广 罕也 屋也して川きぬのめて
さらしゝ物をかしく持ゆかんて○帚 罕也 其の婦男ハ
あそんのおとこともいふ也○八ハキ廿二 女子ニ教
よくゝしもとち作りまふ也物名の名也○乙女
十寺ゆの第花みのこと也ハ室もかへきしの名ハ紙
持て○紅葉 十二 名てよし川帯てつらうまうハきそ
○玉篇 七 居ずぶして我よのかなりハいひつらん○
同 八 すまむかくしてさいゝらん○同 十八 ワ矢

持つる人なりけり○白妙 さる君の心ひとつにさだ
まへりてさらぬしもしまきなり○宿木 初老こえ 女宮一
所をぞ持奉りけんとかきける○万 二ノ十四 男の御為を持
てうちたえし○続後紀 一ノ五 清直心常 毛知豆○
拾 難忍 男持つる女をまちえけるかれしかなりけるぞ
と云

ものとる 最

竹 九 燕ノ子安貝取仕方ヲヤ処ニ 中納言すこし心にかなひ
てものしき事なりとも人の耳にとゞまるべきをかなへ
たり 最ある事中りとおもひて○宇治 十二ノ五
陰陽師のいきく伝らぬ事 尤道理なり○同 十二ノ

一昔天竺王寺あれ僧尤如前し〇同十二

最中

いかの御かたに月あかゝりつるに見えたる秋の最中

なりけり

そらひかむ

新撰字鏡 餇寄也毛良比波牟

そらの草くさ

すら派

夕良 二十七 人あそこそらさしつ見ひなり見えたる〇

同廿二 物おひやらしつべきにまんれくすなちまし

またらん〇帚せい浪をつとらしおとしてし〇檜つなへ

あらたなりし浪ひとこゑを渡りおもしく十年そ京

とちのつれをかへてやかくし申んくるかまん〇アケ

マキ 世の人かくてしてやなかりし南つ響のそゝくし

きみひみえた〇宿木 おかし人への浪ゆきしも

なりかしこをこつらとをそくしゆゆふて

かの川いかゆうくたらつらももて〇菩薩上 一方絶

擬あ折おうかいむくらしゆんさまおんへ〇法華 廿七

口さうなきしのいきの人なりなわ志絡んなをらめる

しつる〇明石 志おとうのうこたうわつまきてて

附るそへらし一う色へきこゆ

もろこし出る

楼 三ノ上ノ廿一 大将詞云 むかしのみかとのゆるし物語

みなもとやなくさむと人しれす思ひのほかにこの

筆跡さへしたひなくさむ世にかゝりけ

きしすまひ以下は松なとを柳ひきかへて物語

のちすゑしつゝそこし出て文字云

紋 モン

三ノ十 つらきあやの紋にそうて袍ならはお

ゝし○末ツム世四 ゝらす色々んつきそへあるほとう

なきたゝふれにあやしのはしへつる○蒙

五 おりきぬのおしへのちりまの紋馬くら

まてに明らゝのへつつ○世績継 七ノ世ニ大納言

の清車の紋こそきらゝかにとゝりしく付り

ゝ世ぬなるこいちのまなきに綾に弘高金岡ひ

しるうきしうけるみや

文人擬生 モンニンギサウ

乙女十二 文人擬生なとにゆゑあることともうらう

ひらしめ 注 文人擬生は文章生をさうらふは擬文章生なり

文人 モンニン

吹上上ノ六 陣の坐に文人学生なとつきなみゐ

云々 ○同 同 文人にかきし題出されけるなかの

て文津くりきこえて

文籍（モンジャク）

菅家文草七　文籍あまた実録といふなる文ともさへ
みちしのこころに文なのく覚えもなくおもふ
ひけるを

文章の生

帚廿八　中々文章の生にゆるされし時

文章生（モンザウ）

夕良四十九　さうしなりのこころざしにして雅文に
らるゝなり

文書（モンジョ）（モンソ）

菅　大学ノ師伺一つくの文書人の家にきゝのこそみ
あはすべき人の難ひきつへしも文をさうしもみえ
へけり〇ク二上ノ八十三段ノコヲ　とりみて作るほど
かの家に縁ありておこなふ物なり文をも得てん
さんそういふものの人に得きしにても〇同上ノ
四十四　さ雨もんぢに縁ありて文をみせ
ねみん

さんちう　同注

著聞　十六巻　松屋筆記ニ引テ云著聞ハ
その橘成季といふ人の書きあつめたる物の中に
いとこ事論の事ありて大隅守の注せらるべき
みな書きし考ふる神主まで入て申しける　同注ハ

志かしきこそ わかつかふくて 物名かる

○浜名 三ノ上ノ二 おなまへつらなし 此物家なん

ともすれは口語かかけてうえかれしきを ○同 上ノ

下ノ九 兄弟 親類 骨肉 あるいはおもにかり口語 對

決して 境を備へ 恕分(ジョブン)をあらへそふ ○著聞 五ノ廿六

別小大進をめしけさまてくるさんだうをわか

とらへてつきさへのやうに 發しめきやくのあまいにくき

ここそ

まかりし 耄之

善業 廿三 もかりしみそ わかし おかりいかれ

あらかさかつきて みおかり △耄 耄ノ心之

文才(モンザイ)

乙女 六 文才すける事にてその人の志ひあさみ

○給合 廿一 もんざいをたさかる のみて以

は

雅言集覧巻之六十八

勢之部

石川雅望著

為セ

源廿二　かゝるところのてらにありて誦経かねをうちならして北斗をせさせん事なともいひて

さきこんとてあまた法師のまねしてはやすつらは

○サラ三十卅　精の肉をは精進せす

せ令

桐五　きこしめし[illegible]附てかれ　○松

風　[illegible]

ばん成けり○ワカナ 上ノ卅三ノ七 其日の夕つかたみくるまて
せんしうきゝなかう○紅葉 十二 なりかゝりてうへのかたはしまお
わたして○賛 廿一 法師ばらのかたはしそて○同 卅九 参
まかせ給ふ人○アカシ 十二 女房は さへ花人のやうなる
うちはしてよする中は○椎 十ノ十八 さしくしきて
はしておりけりなかるゝまにまて○集 埜ひくとき
きはまかひてひかさまかひ かゝりが○玉ノカザリ 十八
湯あらしあらん 云云 一の編やあはりまるゝしいつる
まてすいりまちりつ 女房そひつはしは○ハコヱア ハセ 吹上 下十四
そたりこゝろうきにあつさみかきりこゝろあへまてうへ
あはまつりあそてひくかは○クラ 下ノ九 たてまつるの

きのふのあはまては したまなとかねてちかのかやさか
まちまひでいつきのへつはかゝりあてはかの
おもたかん○ハツセメヤ 桐 十七 かみかひあかりやなうち
のなかはまて○宿木 十 かねんたつしまかす○カオトロ カセ
椎 一ノ上 十九 報きもしらみかはかしるかまちか○ハカキア ハセ
たら 廿三 うるかしくこのきにあかはまくなかしに御かゝ川
いかはあかりのまかし○宿木 十七 かやの人うちきく
あはしま廊りてまろうと堂さんこのいはくまりしま
見たり○同 卅四 ハアケア ハセ 中のゆかいのみのはあかけあ
たまてなりくるまへる○フキア ハセ 椎 二ノ下 二十四
岸を開し夢みこうきあなまかはる○椎 十二ノ十七

秋すさしてうき世さへしき見え○セセ廿 蓬の木
二 浅こころのうちかなと 仏神をわれもちも有人
○枕十ノ七 女房ノ車ニノル処 今は濡ちんをつけさん
もいしろかなめかうこゆるやかにたれとろきて
車紙らさすもてはて○六自卅五 蔵人の斉紙
めし著きそまゐやうに隠ろしし 奏せ事ありに○
ワカ紫 四十五 惟光ちうりたる御のもて抑えしかな
○セ三 七夕 世 当流のへ御めしらそてんとこそらう
奏せしを御かなに職のなせんとふ宮のの名まゐ
せし○菩紫 四十一 とまりしつうしこみなくさうてえん
ふそうしけ八ふしろそのまちやしうらうとみ玉ひて

○枕セサセ十二ノ廿一 御祈りの夜のまゐせんへ○
枕卅九セ三 月ゐさまかのうたに御覧まし給うてちあ
さ白そ○伊勢ニセナ 左に秋そるつくりのまかりとく
まゐらん○サカキセ三 夜オイセミハ 秋けるにかたせしそ○マホロシ
ナヒ 花橋の月影ふいとさいやうにつんゆるうちかそと
追風なかりしけまいゐ手世をいうたる声をまゐ
らんと申さし侍りけしに

秋

拾遺三 花のしらへなりとて参りそ
りへる菊の秋山ここん○伊勢集 後撰秋やとまつま
う忘れめつうそ秋ならゆすわくそまゐれ人いとゆる

こゝ〇後　ちりはてゝのちのみさかりとはしらねや
のこるらんさくらのこゝろをなぐさめよ〇夫木四　仲正
うぐひすや萌えぬらん鳴声の庭をまちかねつゝ
さくらかな

せんだい

平家一ノ二十　摂政殿の御出仕に[illegible]川工

せう

さぶらふぞ　後宝　タヽコロツカ常ニ又ハ汝 フル祠ヲソラヘニ云処　大臣をもちいるべき
そのこゝろをしらねこそあまりなるに心ぞなく
もあはれなるべしのひてそはもまかりしらめ
かん上ハ[illegible]云〇

せう

清輔集　五月雨のころは[illegible]のはれまにいでゝ
さしてん折ふしこそそまれ〇同　まつもの浦路に
秋かぜ立ぬらんきさの浦風にすかしうへ〇
同　秀のかみにありしのきしに入海の浦の松
風きちかへしもの〇拾玉四　さえよとハ秋の
峰のはなみえてありのまゝの鳴声もきこへかへ
〇夫木六　出雲　山をはなれいつしかそひめる
[illegible]のせきもかへる

せ

本店二　[illegible]のめかたし[illegible]〇[illegible]

古くは我身てと思ひとしみおもはせかくて袖の露を
ともはんこうし○柏 四 衣明る事をいひおもはせ
せかへる○イセモ 四十 時々その心ひせんそう云
一日二日 おもはせりきり○アヤニ 廿八 うち思
ひおもはせおかしかんぬるくろうしきふは○イセモ
存ぶかとまて見恋ふるありて云 おもはせふる○同
むかしあるをうろきておもはせそともは
せきありしかすいは○槐 十二ノ十五 たいうしき人の
おもはせうる○諸クホ こうふうたきし百とめてせ絶
ちておもはせかへる○クラ下九 しら玉の人か此たのう
うみておもはおもはせん○ワカナ上 今七 ちう宮母后

座右のおもはせし門一しおる人思ひしもとなとり
あへ花せらる○ミヲツクシ 十二 さしもおもはせはんこと思ふ
おうそおりいは

脊

夫木 十九 中務卿 久方の天津ミそらはうるかみ見えとせは絶
このゆくをは 秋は世中なむ

施

ト三カケ よりかきはせし本のへし云云 是も山の主
みせしむる○序品 四十一 施求無上道

瀬

後撰 秋上 天河瀬ては こゝをおもふ我おもふ

せみなやくことん○同　恋二　わかれみ粉おりなるらん
なからる川うきしきせみも流ありやうし○同　同五
なかきまゝにのこしてもなみ嬉しきゝさや
うきしよるやあるら

せ

元　古　盗人の入て侍りし又の日かいちいりをわさ
きて侍りしかへしつかはしけ□○續後拾遺　隣
なほ思ひそめし夜川のなきこそそてをひちて
○六三　人しれぬ中は川のせきやすしきたえて
逢よしのなき○同四　涙川うきたるあわと
あらて人のうきさせをなかちてそれたれ○六三　以のり

はつかなのこゑそきこゆなるなかせ川うきしきいはかとに
かもあらはやし○新古夏　西行　きよみかはここをせ
みきん時雨山田のくろの杉のむらたち△宣長云川ノ
瀬ト云フハ川ノ上ヨリ下迄長キ流ノ間ニワタル処ヲサシテ
セトハ云云フナリ古キ哥ニワタリセトアルコレナリ扨川ハ
浅キ処ヲエリテワタルモノナレハ渡瀬ハ浅キ処ニソレヨリ
ウツリテ必渡ル処ナラ子ト浅キ処ヲ瀬トハ云ナリ又
タキツセ早瀬ナトモトハわたるせセヨリソ出ツラ
ム又イタク後ノコナレト西行カ哥ニかはをさゝせん
トイハルモコヽヲ其処トセントイフ心ナリ○後秋上　天の
川わたるせはなきにわかるゝきし川原みなそこは

ゆきしくし ○夢 二十六 うきしき瀬には中しまて

○玉 二ノ十八 ゆふへの月かきはにさへ今もきて ○万二

四十八 川上にあらしふく落葉の流きて妹かあたりに

きみにこそよしらめ ○古事記上ノ下 青人草之落苦

瀬而患惣時可助 ○神代紀上ノ四 瀬太疾下瀬足

太弱

誓言

法華品 五十八 我滅度誰能護持讀説斯經今於以

前自説誓言

せいごん

紫 二十七 たとへ何ごとの八重にてもみ法をこそうけたまはりて

あはれにこそあるべけれとかきくはへのこみあはれなる

せいごんをかけふかんとせりこそありけるへし

いまはかおひかなきにもあらめ

せいでい

月宮一殿湖のきれていとまりて世の中あはれのかなしきそ

ふたりあかしおひきしまうおも

正妃

初下 五十九 さはら天皇の正妃として一の后にあそてあり

きんなん

誓

古事記六 永當可致如此呪咀之由被出誓状云云

制し
梅四ノ廿七 これを誓して行かさらんものはしものよし
を中さまほしう思ひ給へて ○ワカナ下ノ五十 いとひん
なめこゝろもゆるしがひて ○一ノ 柏樹の人の事
にうちなひひらひそ いとゞきたくなる事のを
かゝれけみおもう 制しわりをおもし ○一ノ 若紫ノ初
常夏の寄方なん籠へ行きかへるを制し給ふ
やるかたもなくかうらしくてあさきやうね

制
清経一ノ十五 人の娘の源のなきまゝさゝきに侍りける
を女のたゞゆゝ侍りてうちかたしう制し侍りけるに○

○大ろ廿二 やそらせんゝりつて北人をもくみや
乃川女くやし と思ひしを いらせんきやうと聞こえて
いふかひなかし ○ヲトメ九 ゆるさるゝてのいふをもまた
かまて ○初ヤ八十八 内侍ノセミ詞 何かハさうつきんを
制せらるゝ人の侍らんこそ侍るにはなことはあらめ
○久二下ノ卅四 少将はなる中しきんさんなるハあや
制しかねたる事を ○手習女卅二 きこしめし
なるもしらて一和尚にハさなきんのすゝみつく
るらしこそあらめ ○竹十二 あさ人の日の息み
るハ若きものとさかしくてさかきをかんさ宮
みて月をさしてハかさしくかきかくも○椎八ノ三 施

はとりかへしてとふにあれは常にひきしきたる
きはに制せられしよりのちはたえてあひかたき

制しみ

一ノ四　十ノ一　四ノ十

ちぎらう

拾政下十三　梗路 歌　道にあふてゆゑにこゝろをせきても
あつきちぎりすちからふ稲かかのいつのせみしむこゝろ
あわうらん

ちだし

古雅上　叢子　好きのみゆる人こそあはうらし金玉の
せみくをちかうるをそ結ちぎりきしはす〇ちく　卅四

女房あんまりうつ思ふこゝろあてさき〴〵こと
うらす竹も一からあけけるへも竹くらん〇手習 二
はうちちかく思ひつゝしくてあきたるかへかる
葉ちりあ〇スマ十三　月影のやとれる袖はちかく
しゝつゝあそぶやかくやあらねかりけり〇梅か枝
十　竹ちかくしなひ思ひなとにおはしゆかん
なかの〇総八ノ卅二　枝や 櫓はちかき家すへうて〇
蔵ク本二　ふん世その月に見はちかく
てらしうきをちく〇和泉式部集 續　旅人の
歌にあそふちてそやうつのひろのなきちくくそ
首かな

せりく

堀白 ミちさすハ芦る岩ほに生る松の根のせりく
ミゆる也とも見下る △注 セハミクハ枝ノ字之

せをあき

二ノ十 ○

せ

せだき

せく九 せハ紀字の内のあるしとすへきくひとり
を思ひあらうすに ○叢二 まうそうけかにまう
せとのせをきに ○アカミ 廿二 命のうきにせをきに袖に
とせくうみ稍哈なん ○ワカナ 下ノ五十七 境のうちせ
せけみさんへこけ

銭ぜに

喜上 喜田云 せにはけ毛をすねをとうかけて
○銭五貫文 吹上二下ノ九 ○同 七十四 ○うた
あまたの形せにたいせん

施セ入ニウ

ワカナ 上ノ八十三 せんの清とびを云 御堂に施入
しかひし

せちみ

折らい ふくや姫のやもめ形らさ花けりしかもい
よきくにあいたんと思ひをうけてせちみに
形とりかな妻 なきハえたひ如いて

○同十二　七月十五日の出かてきちかまの思へるきち
しまかけり○宿木　八十五　すゝ君をきちみゆかし
うすゆきんかへは
きく
宇治拾二ノ十六　きりの方にかのゝちまつるを
くふとて　すゝめのをしうあをきくを
廿五
古難下　伊勢　あきうくいふちみをあつ好す
やよひせみかいすゆく梅みそ有ける○七十四
きみそして二十お(?)のまてみこきち
きちより

カケ一　あやめ草おひみしかきを一のえんひく
やさ月のきちにせきかりし○イセモ十四段　京から
へいめかやかみや見えんんきちに思へかん
んあみける○初下　第八　仲スミニムカヒテ仲忠きちなりん
母みあこまひすみしあをかけみかく
しを出入かへ○当こそスケムコ子タヽコハカ又ヲ詐ル処ハ祝言ヲ告ルトコロ
千かけの大かとのお金りきちかる事すさんと
かも○同　時門詞　きちにかゝせをたひしかいはる
らをへをみきよりみらるをきへしいみをのきちを
かひしとて○桐　二十五　かとまかちつくし
けみてきちたこくきみへておのかうちそ有

つれなきる○新葉 卅 さかのかにきちかうにさへなりゆかむ
しかさぬ野にあるさきをみれは○千五四 きちかうの花
きちかうの露しけき人の菊まつる○アキ あきの野の
しけさにあるさ絵をかくきちかうは○東 九 きちかう
有をとこのもとに人をやりて侍るにきちかうの○イセ集
むかしを思ひ出てきちかうにきちかうの○後葉 四 きちかう
法華経にはきちかうのみはこれこそこのの侍るを大切に
にしめ祠のん宮ちかくにて○同 千一 きちかうの花をつる
しをきさみなのみひ少納言を折りてさしつけ
きちかうくちなしかやりつゝ○権ヒメ 二千 宮にて
きちかうの折りしをおもひやる○大和物語一 きちかう

くさひらひらをきて○六帖 二 ちかうのもとにき
あはにあらぬ事なり
きちかうの花の
○新千 廿四 仁寿殿のきちかうをみてよめるさうし
おぼゆるあきのうへにきんへとふりてかけ
かけ
きちだ
詞花 雑下 霧蓮 はかりけり新人行きは高麗の里に
まさきかけつゝ
節 セチ

同 卅一 五月のせちみ ○和漢朗詠集上 郎の是
みくらへてころもハせちみハ粽あやめの菖の称とそ
せちゑも称事

節會（セチヱ）

同 卅二 さうんき節會なりし

殺害（セツガイ）

吹上 上十 父つらきを殺てせちがいせしと汝が罪を
いとうかりしをきに中待りしを

せちぶん

笛集 せちぶんのみとめて 四月一日に鳴て云々
○ヤトリギ八十六ハ 四月つゐたちせちぶんといふ

さうまうしきさうのみハつりを書ね ○あや 節二（セチニチ） あつ
同ハあるとてせちぶんにゆかしきにいひめくさ
む

せちみ

吹上 西日云々 舟きしせちゑさうしの（精）
略々もハ年をば後ゆくにすだりのきのゆうり
く網に織あらはしてなをうめげてわちかう
さぬかうる事なりかね ○同 下 八日云々 家
せちにうえをはちひす △抄 節忌
精進ハ亍也 十四日前日之云々 △拾芥云 齋日八
日十四日廿五日 廿三日廿九日卅日 小ノ月ハ廿

八日四斎月斎日者受持八斎戒故名
ときの至ずじ
袋双子四ノ廿二　弘法大師十訓抄五ノ廿五　しか岳観音に参り
くるひくのをとみ入ぬるハさかりけり　すゝきかれも
さかりけり△天竺　四姓のうちなり　刹利ハ王種なり　首陀ハ
農人之　翻訳名義集一ノ十三丁　釈氏要覧上ノ三
節刀
平家五ノ廿七　さらしもて紀をも平らけんと都を出
る将軍ハ三ツのそんちう節刀をたまはる日家
を忘れ出るとて妻子を忘るゝも云々
ありつらし

野中　六ノ四　○狭　三ノ中十三　云々　思ひやりける人
よもすがらきみつゝしるしの人ふるとも次第ふかく
きしのこゝろのうちにすみけるゝ　○立科
盛ちつる日から田芹をつゝしも思ひしなの露
かゝるかたかね△我らふるしも思ひてあまちひ
らきぬてをもとて云
芹沢もしらしの命
狭　四ノ十　ひんがしとて出さきのかなれ程ありつゝ
しうちよ命ちよハ清水ハく覚えれ出る
きね　茶壷
さかき五　同おとりきぬせりハあまくかんちるへくき云々

きぬきせし

拾雑集 人の心は乱れ苦し 思ひてきぬきせし

をきしそ奉しき○夜にこそ 陰陽師 二かんめさせて

百集にきぬ奉しもさもめされて よろしく

被し○タツ土 停时 世界ふべき人也 おもて きぬわ

きらしらのかきこゆるこそきしろ○クラ上ノ二十二

人のみへてきぬをかきしめくしてからハ 北筆をとり

きしと思ひあそびかたにあさまに○クニ下ノ廿六 東宮女御

たち大かた中々てきぬきらしきそひにいたるも

松く人をあはれて人々にはあしきハ 仲君の歌

臣のするぞ 思ひとおもふもゆかしるそそよるく

やしき思ひなしてあるに

きぬ紋表ハ

巻二ノ八 きんゆかしきそのきぬのきぬひつゝよそて

着てつらん

世界

其のわかゆへに成ぬへきし男なりけるもひそかにてか

伊予の身○サカ 二十 内より たしかにちるはなのこし

男そかなる母かあはいきる○葉の宮の 大方ひきうの

此事ひきる程 御さうりハ 二の子 大子の御はなるへし

衆きハあさうしうし○明石 右 ちうきてもものゆかしさの

めんをしてきしうるゆくさとえのこそこうち 相えん

しやうくやうさしとるへきかし
世界の菊花けり ○賦
ヲトメ四 たゝ世界○カケ二 浮世をしをつくり
はかりまうけなるものの車のさるみむねのうちへ
ふせつり○大二 平仲女二ノ詞 世の中の思ひのあまりに
みはてゝいはれ世界に苦しみやとおもひてさうらひ
きれしの人○大六八 此くといひてさていかし
人をさとはみはとてもまてあし○業四 上井殿の
内にはさはりひとしらひかれ露のひかりなく世界
の四位殿茶中て おもへしましいとてさしつ ぬ○よ
ありしの余月をはれてつる 世界をそちりて

さるおんまの方の○同 さらんきしまして こはいはへう
世界あらはおかしやうしかめ○花や二 たらうら
あ世界あらうふつもちて年へたもたあみや○明石六
ちつきし世界あらさししうへかし○同十一 たら
ねきかはあめつらしきうもへの限をもともに○同
十五 初しめんての人るあめやたきはいふるね世界あ
○行十二 おのうかは故宮の人あかあくにし月の都の人
あとそもそふん 昔の故里あかるあらうしてぬんこの
世界あはまうりて来り侍る○ミヲツクシ十 よやさき
世界 あまりにしたらん いはとふしりて恭くみあらん人
なかりし○釈氏要覧中四十九 首楞厳經云東西南北

四維上下名界遍去未来現世名世　東西南北

せかい　セクノトコロ

せきぶね　舟ノ之

捷一ノ下 罒三　硯をせきぶねにとり出て扇に絵かゝん

よしもりに○平家十二　皆紅の扇の日出したる

を舟のせかいにはさみたてゝ陸へ向ひてそまね

きたる

脊セ

垂タ　まはるに手

若菜　松庭形の前の輪かけたるあやもくまるる女房

きかまていちひさきめのわらはへつまとそ縄をくらひ

きつま生する伴をすゝをとりて

せめかけ

宇治三　羅の経書あそひうちまうち罷きゝたる事

けるいそきに○同三ノ廿三　けむしくたるゝ立て悔紙

きうめつゝたりきを開て○同十二　せめかけ

つゝくたきうみてあんの前に出志法師をいはうく

きてもうそや是や御女犯の心あるき縄累の使者なる

きれいけむかせめかけ○続世継一　若波上　おほ津田に到て

長尖三司にうを投げしくきうしもうほ洲に

しもれいは○クホノスサニ　責挽タノ意ナランド○　発心集

一ノ卅三　あき衣へいきうに洲く笑ひおあはうも

しま申にうに服うる事なし　いうくきてむうに付

は袋より物を取出てよくよく見れは童きよらなるか
て云云○夫木 廿六 従九条内大臣あきよし
身のうへにこそ老やすれ心さへもなくさめかたし
身○拾遺 三十四 母代ノ文をとへるにかへる尼 二十八
ニヲリテ こそ云云○一下 第一 おのか身こそ海
かりさ海あまにきえぬめるかな

瀬絶

千載 恋四 仲縄 ちきり訓し体の中川瀬絶して流
るるはいつはい泪なりけり

説経

拾遺か あさ所作説経し侍りける法師の○宇治

語

説経師

宇治 三十三 よ絶人への権者のきこえありし中をえぬ
[illegible]の母の[illegible]て父は[illegible]
[illegible]説経し[illegible]母[illegible]
[illegible]きこえして[illegible]の[illegible]は

説法

玉篇 辞二 舎舎鍵の[illegible]法即[illegible]云云
[illegible]の説法目出[illegible]中て

刹那

一[illegible] 云云

せつな

刹那の内の物にて申なり

落雲十二弁ありとそ人の為ともこそ有之候

こゝに云ふ〇せつなにも流れて世流を

やかて

折角

保元に為朝かくて鎮西に居住仕て九州の者

共段へ依て付て大小の合戦数をしらす其中に

て折角の合戦二千餘箇度なり

拆政

ミヨツクミ五　ちとの如くに拆政して人の為によし也なり

きこえんときくより

せつなに

月の宮十八年わかれて恋しきてかへらんの世にも

ひとりふり猶へは

せつなに如しかり

花の宮弁中将にも集りあひて切ならんにせつに

かれしきりしに物の様とをきえんおつなとて

ちひとりて△背ヲ勾欄ニオシアテヽ居ルヲ常花ナドニアツタ

ミエタリ

せつなにあるとも

イセ集　宇治鏡にある月の風にて人のうらみせける

人のたからはむかしさまに人にわたるもしうれに
あしや上におゝはしるみんへのなりもん声 ちよ
流しもらもあはき上に歳秋とをはなしこゝろに
あけそれはえとも○麻夏 すゝしきからんにき
なかはしつきさふらひけん
きりぎ
立ちし紅葉の流てもみぢは山川の流き出しすも
秋はふかきしを
せん 銭ノ字音
捨遣例 天暦御時のこと紀貫之が子のはての玉に
くものほとりせられしきんかひたるに藤壺とよ

さらぬだにひとり寝る夜はさえつるせらるゝと云○
同 同しく御むかしのせんに殿上のをのこどもや女
房などよびあつめさせし時○同 同紀貫
之がおなじく清原元輔なり とはかなる源満仲せんし
侍りしかとかはりけりて○後拾遺 恵慶法師
身かわりて人に餞し侍りける所にてと云
せん 先ノ字音
蛍花の珠冊二 おほかたのやくにたつもとは
かんざしおもひて月日をあてて待る程にきえ
きえしも侍りぬもの只今此みとて人の心
まねをするに歳ねへきか○同

廿八 終にひかうその名にハせんとうかのなへきこゑの
うたよりはしめのあまりハ五首○ 万葉上 廿九
出あひすたちきよみにきんせうまて類く覚し
侍る○ 捷一ノ十二 暮露ニ 有ときれうさをも聞く
ゆくえ也へり

旋頭歌

古今序 九二 かんとうかハ万葉の体と同く
五七七五七七 おもしろきをのみ 絶るに 拾遺集 九二 の出
ちる 四首のうち 一首 除かけあまる あつまはにて
侍るなりそ いまやかをさせ わつくひきとくめそ 秘。
始めんかりける。とありて 五七五五七七の体なり

そのうたの中のハ五七五七七又ハ五七五五七七さまく
なり

仙人

ワカ十上ノ七 一の段入道の命ハ仙人の香にてさかねやう
見て篇にあるを○ 寿仙 伊呂波集ニ 仙の宮やよる
ハ也らく 筆一ノ毛 見て 生

詮

宇治 十二ノ十一 其筆の點にハ十ヶ条をきんみて定め
ける

前坊

蔓初 前坊の昭公子命せらる前坊なりとそハ○

△花宮 春宮坊ノ辞退シタル人ヲ前坊トイフ之一条ノ
トノ女之○師坊ノ内ニ早世シ玉フヲモ前坊ト申ス
之文彦太子女之

懺法

後拾遺 天右 懺法おこなひ侍りけるに仏に奉
らんとて周防内侍のもとにきくをこひ侍り
けれは ○康資王母 小野宮の堂にまうてゝ侍りけ
るに せん法の声はうきよの夢さますとくひてきこえけ
ろうすみ侍りけれはよみ侍りける ○甚玉葉 十六 曉子
はせん法とくきこゆるには念仏とゝめきこえそへけるに
をくりけり ○紫 十八 法花三昧おこなふ小堂の

せん法の声山おろしにつれてそ聞えけるなとも
とくくきこえけの声にひゞきあひて ○堅田の後三
懺法の曲に嵐のおとしたる滝のつゞきひゞき
まじりて日待ありてを思ひよそへてうきよの夢
さめぬへく 女房ほそしかて侍りさるにたへは 北山
同じくさみにやかてかけ侍りて覚しみゆ
もんど
宇治 十之十三 出家 おさめてゝしるしはさんど
思ふものの打ながめつゝ聞きけるもかなしはニ
ひつけり
きんてうらゝあり ○

さゝ罡叚 ちんつゝみて名温にて明き人有○
桐 かうばしきほそんつゝみてあり○玉 其ひ
ゆゑもいはちんつゝ明りや玉子れみ
ちんちやうにありし
柏廿六 ゆゑきみなしきにおほかれ御八重明さこゝち
ちんつゝ明くありてかき出んは○二ノ四
ちんかうり 淺香
緊使 五 ちんかうのをしきたるちゝ例のごとく
しそゝ○重合十六 ぢんのたゝみちんかうのした
かくる○ワカナ上 二十九 ちんかうのこまちん沈
まゐらせる○和名 南州異物志云沈香其次在心節
間不甚堅者置之水浮中不沈与水平者名曰淺
香也沈香節堅而沈水者也
先大王
ワカ三 十八 ちんさいまうりの御手本かきて御覧
旃陀羅
観経本五注 世ニ云要執或者殺者乃是四姓之下流
即今屠児也性悪(あく)包要不問仁義雖著人皮行同
禽獣
ちんちしき 善智識
平家一 十八 こゝもしりなくちんちしきと思ひ○提婆品
六十四 由提婆達多善智識○釈氏要覧上十 華厳

經云有四法是善識一ニハ能令人入善法中二ニハ能障
礙法不善三能能令人住於正法四常能隨順教
化○因果經位善智識發菩提心

きんそ　踐祚

平家 上 三十二 高倉院五歳 近衛院三歳にて踐祚

先帝　又故先帝

桐 二十四 先帝の四のみこの御かたち○狭衣 一ノ上ノ八

○故先帝の御時の事

先祖

龍 十九 我せんそよりたえしめたまへるときゝてまうけて○

○クラ 上ノ一 此くら先祖の御遺言かたくせめて
故のありふ○クラ 上ノ八 十三 同じる神宥の先祖に侍る
人のしおきて侍るみしも此の ○ワカナ 上ノ九
十一 入道先祖事ヲ 加の先祖のおもむき

きんそ

初市 幸八 うどんけの御むまるる命ともめんとて此の
さるいみ思ひまもしめのちをそしむ葉之もの○末ツム
十六 我常にもうちとをりつゝみたりことゝ御かく
あしき人の御ためおもひやりてたんとも
らん思ひ居たり △セメノ時ニモアリ

きんそ

モアリ

[illegible]

なかき廿 なかき夜のつきせぬ中になかき除○続拾

拾廿二 くるしきを忘て命なからへてなかき○雅四

ながき酒 折りはさかひみまかしかみ渡りけん○後

秋下 風の音のかきりと秋やながめつらん吹くる

ちくに声のまひしき○古 古峰 素寿 きは霧かそ

ながるゝ渡り

前駆

同ノ九 ○ 禁秘抄 中九 但前駆侍雑色不入

日月花門内

千分かひとつ

吹下 四十五 [illegible] 千分かひとつ

おもへは

前渡 はおもてなし

クラ 中納 ながしの桐に酒をしたてあひ侍りつるに

前渡 とおもてなしに 白地 [illegible]

して来りなりし○芳 卅九 まことになる詞 一つる その母

何とき人のみやこの人もたる前渡おもてなし中まで

ひきん

善根

宇治 十四 堂を作り菩提をとむらひ最上の善根之。

とて勤進せしめけり

せんさい　セザイ　庄

イセ集　十九　前栽植させたまひて家よりよりに　仰られけれは

しなしなに○同　三十六　女さうしにいてたる前栽なとを

しつらひけれは○同　たてかへしたりし庭かきてせん

ざいの中には花もなし○拾遺秋　さうしに前栽植させ給

ひて○同　亭子院のおほん前栽植させ

たまひて云々○同　前栽にすゝむしをはなち

侍りて○同賀　天暦御時前栽の宴せさせたまひける

時○草花を賞して御遊ありと云○古今　哀傷　こと

ありしせんさいいとしけく荒れたりけるを云々「只

君うゑし一むらすゝきむしのねのしけき野への

とも成にける哉○元良　十三　さうしに前栽ほら

せ給云々○同　十四　六宮の前栽ほるとて云々○

同　七　女御の前栽合せしの草香云々○拾後　十二　七月

七日中宮の御前にせんさいにむしをはなちて

いれての夜しらぬきしこゑしのふ人〳〵はこゑ〳〵の

よみきこえけるかひなかりくるひにしかは人のよみける

あやし○葉秘抄　十九　前栽　清涼殿東庭并　西庭

蘇芳黄号之　延喜元年左右近衛栽草架　延喜献菊根栄

庭并　仁寿殿東庭○蘇々ウラハ前栽ともいはれたちいは

さりとも木とならしてはれける花とはしける　云々

○拾遺 賀 右大臣源光の家にきんさいありける時
こまかなる云云○キカハワヒヒキナミ せんざいにわたし
うゑしうゑはあかはなをしのはきにはかはゆく○西宮
大納言集 中宮の御前にきんさいうゑさせ
給ふに秋の花なかりしとき萩をうつしの花を
もてやかうつくしんのとけくさんける秋の花の所
○家集一 さいしよしの秋はさかり花をくさをしたてよ
みかひにおほき花にまつこのきんさいありける花ある
人おほかるにこそおもひつるわうしき事もあれ
○新撰集 うちの中のきさいありける中に 九重に植
うゑつる花なしみは花しくもえへのへの秋萩
○夕顔廿二 前さいのいろいろみだれたるを云云 せしはなよ
のおもて前きんさいの中にまじりてあさからぬ所に
をみるの○桐壺 御すへのはなきんさいの所よむに
しらつきしさうかなりつるに△秋草の盛なるかな
○若紫廿五 若紫の宮うへいでおはしましてせんさい
むらよしみえて植えたり○麻夏の夜おまへのまへこそ
ありさまにせんさいのむら植たまへる中に所△草
花をさし入てもさかひ又庭をさしてもいへる○
後撰 春中 前栽に行の中に桜のさかりなるをみて
○ 家にいて遠きし所にせうとしき前栽の桜を
ゆひつけ侍りける○後撰二十二段 きんさいの中に

かくもなくて
ちんぎ
平家一ノ巻 嘉応ノ御時御感にあつかりし程の者男
なれ所にのぼんで あふけ帳り祇園をたおしに
へきし其神輿を立て奉りけるを矢とまちんきしてける
かるは数千人の大衆先陣より後陣まで充々
ふえて同しかるる○同一ノ巻 陸奥の鉄工にて備に
云御ちんきしまいかり出なる保安四月に所輿入
洛の時は比叡山に衛まして赤山の社へ入奉る又保延
四年七月に神輿入洛の時は祇園の社に当に衛
て祇園の社へ入奉る宗に降て保延の例つくらへし

○諸堂一字ものこさず焼はらひて山門に申ま
すわらへまよし三千一同にちんきする
先生
皇極紀 十三 自学周礼之教於南淵先生所○字治
拾 一ノ二十 むかしせんしやうハ作りて大いの鐘をなむ言むかそ
宣命
桐壺九 勅使来て其宣命よむなんにの所しまて
事之まる
宣旨
拾雑賀 延喜十七年八月宣旨ありとうでとこみ
侍りけるまゐ○乃カヨ 三十六 又ふうきねて宗へ悔り

かゝへきさいまなる○蔓〳〵梨てそらるゝさいまな
みて大将の実を流れるはかなかりける○桐 二十八
内侍宮あ承りけれへて
せんし書 せし書き
クラ中二 大将内ヨリ宮々ぬ藤上に出なひて北方之
宮ぬ流ふて案書かなか云云流石ぞけれは中務
きみ云云 大将思ひてあなきよかのせんし
書やよりひとりけれて○同中云 左に為宮云云
帰て折りへてとこなり思ひける人流も恋ふらや
せんしのきれこしすこれ覚知しなきもうら白
きみ喩紀しふかきこと○夕二上二十五 帰てせんし

つきいちもんつんの人とてつきいちまぬ○アカニ 二十四 せう
のはせんしがきいでまうし流めんとて云云○夕霧三
あんてのせんしつきいるのしうと覚しめへく

禅師 ぜんじ氏

蓬五 さうし流もうとの禅侍のきこみえうあそ○イ
セモ 七十段 山しなのせんしのうきいおりしかれ
せんしかう 軟障 ぜぢやう氏
スマ 四十八 帰りかゝそつぬぜんじやうをもうわ△
せしかうの所ヲミルヘシ

前司

ヤトリキ 九十二 ひとらのせんじとの〻姫君のいふ

○枕

樰ず

月宮五 出古今にいはゆるすきをむすふのミ今の世
んなさせかひそ撰ありきんすとそ撰集とい
ふをつけさせかひ文二千首をなさせかへうそ
うし

きんせん

雄略紀 不レ解二所由一(セムスベ) ○允恭紀 不レ知二所為一(センスベ)

せう 兄鷹

夕霧 二十八 むかし河原にまからんてその折からかへる
鳥狩せう(兄鷹)やりのその〓やりある以て人かひふ

らん○和名抄十八 大者皆名以保太加小者皆名
勢宇漢語抄用兄鷹二字為名所出未詳俗説雄
鷹謂之兄鷹雌鷹謂之大鷹也○浮舟 五廿四 五十七 ○
嵯峨野物語 兄鷹と書てせうとよむせうといふは
とおする故之

小門

宿木 三ノ八 覚献の所ニ小御門よりいてんと御ぬしと被
ひつきを

せうと○

様 三ノ下 十三 源氏宮ニ大将の心カケタルヲ云 せうと覚えて
うしろめたきわざとの人きんへみなせうし○いせ

五段 せうとたちのまもらせたまひけるとそ ○イセ
六段 御せうとほり川のおとゝ ○帚八 せうとのかた
におはしけれは ○桐 二十四 さるへき人々御かたは
みなかの御せうとの兵部卿の宮なとは云 ○夢
浮九 一品宮のせうとの君は御心にいれてわたり
たりけり

せうとく 所得

宇治 十一ノ十一 玉のぬしせうとくしつると思ひ給ふ
○宇治 三ノ十 絵仏師良秀か家のやけるをみて
てよりてみて笑ひてせうとくしたるかな
とくうつしけるに年比はわろくかきけるものかな

いはほにとりつきて不動の火えんをあらはしたる
いふ事あり 今はかはりはへらぬとかうかうしう侍る
ありけることそよるへき人のさかりにこそ世の中にある
ものなりと云云 ○同 二十六 此布一まう(此)としてせうとくにいる
おそこ わかはすなはち作りつゝとまりて思ひて（浮舟）

小柑子

イセモ 布引滝所 △契云 宇治意色ハ赤紫
所も 大柑子のなりその所いふ本をもふしてあるに
トアレハ 大柑子ハ今の世ノ九年母トイフ物ナル今ノ柑ハ小
柑子ハ小柑子ハ柑子ニハアラス蜜柑ト云モノナルヘシ○
イセモ 八十七段 さらふたの大きさしてさしいてたるの大き

さしてさし出たる[illegible]其[illegible]

[illegible]柑子[illegible]

○朝野群載七 御斎会加供支云云 大柑子 小柑子

橘 ○三代実録四十九ノ五 仁和二年正月廿九日己酉

太宰府例貢小柑子以十一月卅日以前為貢進之

期先是不立斯限

せうそこ

柏木三十四 大将殿の[illegible] ○一ノ二 生間カ来リシコヲ[illegible]

[illegible]

○同[illegible]

[illegible]○大和[illegible]

[illegible]○[illegible]二ノ十九 十四ノ二 ○拾遺ノ上

[illegible]伊せ[illegible]○催馬楽

[illegible]

[illegible]○晋書列傳三十四 汝能賚書取消息否○

涅槃経云 報示消息 発源機要云 報示消息 志此

以音信為消息○ 魏志斉王紀ニ見エタル字ナリ

モトハ易ノ彖傳ヨリ出タリ ○ワカ[illegible]二十六 少納

言なせられてあひけり○同 三十一入道事
ありけるにきよしのかく△音信ハコニモソヤ
ウスヲ所ニモ用フ○東ヤ 要 さしもあはれなる所に
うつりて侍るにしらけなむ宿の○なる
十九 日暮つる事まで ありそそてはさんす○同
廿 えんなる事まで あなたへ ある
ことさらで○アケマキ 十九 文 比どもの中には云云 對
面し玉ハす○夕霧 二十六 ここに参らはかなかりと
取りに行ふ○續紀ノ十九 奏唐国消息
せられり 道遥
吹上二 取ての物のいきまたる取時めいてまちことなり

取ぐするゆへなるさしありし○吹上ノ卅九 五津
さしまかせみかのひて 比ところなきよひきたりこえり
しかひて○ミヲツクシ 二十五 きえこえうをはくしみ
ゆ○イセモ 昔男こここてのとかえうしみかなみ
云云○イセモ 二十段 昔男せりこえみえふとこそさ
いかはゆつその玉へまゐらせおのおきえる
云云○スマ 二十六 北のかたいまかたてのある浦つる
ひるなりこえりしこくまみ○古秋上 秋かな
川上のそのこころも 加茂のかはみ川きりこえ
しかるしかにはまかれて云云○重 丹後まてふ
取なりこえり平わきしの藤の花を折て○応神紀ハ

此字ヲアツブトヨメリ○権ゥあゐ卅三一かくれかくれの
きうえうひんなきくはしきよしとなれはこなたこ○
きしくはん

少分

宇治二 馬ノ頭ノ処 なほかくしおほせは大便なき分をも
とらうちき給はんは感ぬ

きうぶん

九三〇中ノ一八 病ヲモルヿ 民部卿わか色とうちなひてはこ
きうぶんのみをかへきかひて

きうし

狭四 年も

せうそこ

藤二十四 かの祠にてしはしのこともあをきもあかき
くらかりかんとて きうこそかへしてつる
まつる かんみかとそ あまつめ○若 此祠 嶺のほとへ
んそのはまづけこしみよりまさひしいはんあたく
らしめてこそ心のしつきしおかうめきうこそ
らはおきうひとつはきんつれこそそれつ俺かそかくや
しくてもあらし○同 八 まさしくをうきうこそ
をくるしめくちうきみまきしざしう折し ○クラ
上ノ八十三 仲忠クラ開キシコヲカタル所 みな出て侍るかをかれ
のかうこのきうこそいふこのこのかりかうて候ん

さんだいにひらきつゝまへつきぬ○紫廿九 師説
何か〻疑ある事ハいとゞ句ちりなきんとそ侍
ふ
ちりなき 抄物
クラ 五ノ八 左の家なりけるそなりのちりなき
ゝるうすしハちりて物ちうるかるのなかれ
ゐく セウ
桜 二ノ五 ゆるハさんちりし何事ゆるなりと答
ゝうたなうしの人なさまたハ心にしきゆとかくしく
さめ○大鏡序 若こそちりしの事ハ覚へ侍る
ゆめ○同六 御前の作文なとを文字ちとしハいよく

ちりしのなとのこまかりてこそゆるん侍るなり○
桜 二ノ下 あさの人なとのしちなる心なさなりし○
禁秘抄中八 所々追代有之歟 云云 予時ハ之如此
○宇治 十五ノ九 袋ひとつなとちりし物とかおとし
つりける○東ノミツク 六 受領とものハつぶこうつの
のことをさしなしてちるかとみせちりしの所の御事
なともいとしも思ひかけ給て○宇治十ノ四 陰陽師
なとなとちん心をしあくて云云あくとなるしなきん
とて算りなるなり○楚王夢 二十 ちりしの心すつ身
はなしハありかしくさきなかよそハしさに御身さま
いとく心たけありき○サマシハ悦 あさの舞ひめ御しく

ほし物のにほひしたるらんにやうてゐなみねね
へりたるうしろにて物をもてあそびたらんにこそ　○ぼうぶ
ふ　此歳末のおもはむすゑ世の人さへのこころさきものを
うしろの物をまへにうつりへり　○　堂上　おほくの殿上人女
おとうとめし　○　工キ　年八　おほくの人のえらびたる我紀
殿の内にて

ちりちりに　○　憔悴
サカ　九十七　わらはきやせさくみえたり　此世の人皆を
あやしくなる人の形　○　世にも流落　此頃わたり
あはれにみなしわがみに侍るみもさへわが頃ひとし
しきしひやりさしそふれなれて侍れば　かなしとくもあれ

らうたく侍るなり　○　紫　廿六　妻房が世へ出つるみふか
くるゝおもひあつかへるよみのきぬやせてつもおもくつら
つやせてあしたにしるゝ人の才のきらん面をも
形ん学生といふ

節偖

一ノ一四　十五日は将つの沖のせく主る　○　三ノ二　もちは五月
あらくはかしこき御節供まうる菖蒲人めくはさらに嫡
のさし樹さし形急つきし形として
きく　塞
夫木　七　五月五日　後京極　五月あやめもしねさ形への流をを
きくこそやうそうるなり

ぎく

松風 二玉一 わかくぎく形に似たりといへりて ○ヲトメ十

たちきの人には四あんまへの人いわとこをたのしめ筆

ひそえちく作りける

せく

蓬一四 いふ旅のおとこうちにかりて立ち人けれるこそ

さかりのそのときちりえてうけりくしくるし ○東ヤ

二十七 わかれしまさしきしうたあるとのこころをきられし

ける思ひて大しくすしや ○六ノ六 やかなる物思ひか

たしぐるなき人の中にたえく事なくて人めしくて

まかせぬ ○ 秋玉 秋のイサメナトこ ○若菜 上ノ卅二ウ

よわおひまりけさくみかたあしくはきちは海へきしうる

なき物かへ ○水ヲセク 夕霧 二十四 そのそくろうかみ

あさましくせきとめん山河の浅てきの名をつくるそすへ

○拾玉 四 とのつくわきくやさはの岩垣にさへ

きしるつくき 柳の糸 ○新古十一 山川のきしのなくひを

うちそへてせくやすくもなき思ひかな ○万二 二十三

あまの川せくとさしさとりもあまのむすもとにかゝれ

ぬとしみかあかすれし ○古事記 上 逆塞上天安河

之水 ○続後紀 十九ノ八 十二オ 落端乃樋留賀祢天

きりおくしみ

大和一 きりおくみつまえとくうえみし 山野のうゑし

野べゆく声紙ゆきたん（…）

水せく

文武峯物語 せんかたひとまでせきしやりつるみづのゆくへき
あり ○陽成院歌合 ちりつもる紅葉の流るゝ山川をせきとめる
てせきとめつる秋のそでかな ○源通済集 峯
毎にせくらむ山の水も大井川昔の名こそ猶流
せけ ○夢 三十四 中川の流れをせきいれたる水
せき入れてせきしきりたる所に吟ずる ○侗二
語ふ 吟ずる洞の水をせきとめさせて悲しと思し
つめて ○幻 水のせきとめられたる洞の雨のしふか
すさぶを

せく 人気ニイフ

逢 三云 人げみこそさやりの物をせきもてゆかく
しかもたいらかに流しけむぬ物とすぢをえて
ぞりし形をあらはすべき物ひしきたりつのさ数
しらめふ ○心ニイフ 竹取 博門殿めそへく覚し
めさるゝ事せきしめらし

せく

神紀 下卅三 産気方ニ急（セマレリ）

せまる 困窮

ヲトメ七 せまりへる大学の衆とて云云 ○仁徳紀
（ヒンテウ）百姓窮（セマリ）之（カラン）也

せけんかすみ
たヽこそ　世の中にのしかゝきたくちのせけん外ずてかひ
げにたかきを聞しそ
せけんなしかき
蓬十九　又せけん見しき出せる大学の助のいみ甘う
云々
せ間り
葵卅一　身をせけてし学官をしつゝそのかはくせけん
浮
世間
大二　世の中のそうなき事せけんの感ある事いひ

いひしそ　△岷江云　せけんハ方　世間の儲書なるべし　ニナリニカト
○大六　すきひがさかしいひひそして世間の納伝
あ…ひそうまでせけんと言ひける内へ入　○同同　紫鞆
の法師あなりて衆ひとつをおきてせけんをそういはれ
ありきて　○夕顔　せけんのそうなき事を知しへ
なく　○帚木三　せけんの事ともおほかりし也　○
吹上下　せけんハ聞し事なりこそ雛の君なる也
めなるし　○吹上七　御門祠　仲忠　世間おもしろかりあり
いへとも色の後　カケカ　附けあはれ　○吹上廿一　中将
ハせけんの人舞かとらんとあるこそひ中油
…世入りて人なみん　○初上十九　あやしく…

ゆく人代よりてせんくんの事なるべし
せんくんの栄花
千草には世そんの祢かひにまかせてきさらぎなん
ときく○世尊の菩提 菩薩廿五 せんくんのゆうりなるへし
子孫しひ思ひあはする○砂石一源太の郎の時当
王の御人愁をもて社頭に集り法味をそへ閑にせけんの
盗賊難をまぬかれりて所ありけりの菊事に申しけり
○同三一人もせけんゆうえんのもとをはなれしく
生まれて厨子なんと異類にありけるあるか
やうりしをしり○南都にある律僧きそんに朱に
子息あまたありける中に

世間いやしひ
大鏡は此人をいへと覚えさせ給ふさめりの方は覚れ
らん物をせけんなるしひかしやかなれこそ侍
またをとこ雨にしてえもいはれぬ覚侍る也○廿 十二
淵んでもふ世間人代ももつく物を思ひあやまり
みて同をえのかは云○祈りも姫もとは世なん
何卯く家に侍るなでふ物をかなけき侍るへき
とはふ
渕ふる
夫木廿六 後白河院 蓮ねるきそのゝ皆潤を子きゝの
ひとつは川きみたるきほしして

瀬ぶしのあゆ

永久百首　顕仲　常陸　うかひかる鵜舟の縄のたえまより

瀬ぶしの鮎の行かふやみえ　○六帖　あゆ　冬ては

鮎をとるには玉川の瀬ゝにふせる鮎の女形おこりて

ともし

和歌童蒙集下　はかなくもかくれんともしの旅ねの草枕[illegible]

夜はあかしつる[illegible]　○万　卅四　沖津波へ波立とも

我まつこひ　ここにふせのとまり波[illegible]やも　○古今上　巻之

我まちて[illegible]のひとつ[illegible]

○同　秋上　ヨミ人シラス　[illegible]のをそ[illegible]

めつらしき　秋の[illegible]川風　△歌林良材　ヒクレタルニワキモコ

ガトアリ　○新古　為家　[illegible]衣のすそふく[illegible]

[illegible]ある木か[illegible]

ともし

夫木　卅六　○新六二　知家　明渡る山本

[illegible]松ともの鹿の行[illegible]　○同

[illegible]深山[illegible]

[illegible]　○万六　長歌　射目[illegible]

[illegible]野猟[illegible]

ともしあかし

夫木　卅六　知家　[illegible]

[illegible]

せゝらき　瀬の音カ

クラ　十二　山かはらの石はおとゝて流るゝをさゝは

例の音を助ることの縁語を用ん思ふ

せゝらき

拾三　行政　清女　鵜川に敵をさせんとてせゝらき○新

続二　宣家　それをさきぬけむかしの瀬の音用ゐらん

ふかきそのみつ紀意の瀬に○後拾　清正　たゝにそ立る

[illegible]の道の瀬路にこそせゝらきの音○古　雑前

雑体のまへのせ　か歌のせきしきものかるゝは

あらはなる海男をとゝめよ

せきいり

新六　行家　人もなき須緒の思ひのせき桜木の紅の

のみはさはきたりけらん

関

令義解　廿八云　凡置関守固者並量配兵士分番

上下共三関者謂伊勢鈴鹿美濃不破越前愛発

等是也

せきり　滝ノセキリ

六一上　立田川瀬のせきりみなもみちてこそ心は君か

つまと成ぬ　○

せきもとあへぬ

宿木　寄道　老人は涙をせきもとあへぬ　△セキトト云

詞セクノ所ハ多ク出ス

せきあくる

夕良 卌四 御狗せきあくるたちしみや○費長房

ハ狗をせきあけつゝいそしくるまうこ

すさましかへハ○ミテリ 長七 紫上ナクナリ玉フアトノ所ニ

おもての せきあくるを おもひやりて

せきしのあはる

墻梯 九 ときはかりさまは 狗のせきの声

人やりしそ

せきとゝ 基本

夫木 二十 為家へ 嵐吹 山の 薬

くもてやとる旅人

古今

クニ下 世々 はしりて あかへ

川 秋を わかれ △セムノ所ニモアリ

○ 長 狩 獣

さる ○ 暑 浮 櫓 南 涛

寺 山 川の 中

出家

を 眼ん

ためそれ

初上 卌八 まかし 向 おもて

はしきもの人なみにこそしるへかな○久二中宗五
うらん人はたぶらしきあたいのうゑとを以てる
さみそよとのかひそ
きめ柳くし
撰三ノ上ノ二十四
きめ子き
きめ平宗西 おもわしときあふきおつかしときを厳
は此後しありきるゝと半分て為のかおそす
きめとて
古今 雑上 としゆき 忠岑とて おとうと神分をきめ給
くん忠岑はきみあなすし物を口頭註 きめききを

ことは毛詩曰兄弟鬩墻外禦其務注云鬩很之禁之
云云 △さわはせめきんとふところきんといふ之
△字鏡 狠戻也遠也不側也世々女久○ワカナ下
二十二 月ころ山ふかき峯に志るしくてこゝかしこ筆なき
めつらしきたえまひのこともしあはせて風の音の
浪をまた秋やせめかゝらん吹あかる下み声のせき
しきさ
せめて
拾雑恋 筆のすさみのあかみ人まちもたりかへるの
ことは何かなる きめのかつらきゝと人をせめとて
かの筆さへせめそうとめしきとや

せきあけて
射下ノ三十三 ○拾七 松 関の戸は秋のしら
らんは明けあけてるらくせきあけて風そとおくる
せきのせ
ミヲツハ三十三 関せきみもとせきやりて ○同 同 あけほのうらの
あふさかひをせきもるこれさらんと ○蓬四 さゆる空
さそおひて ○同 同 その人うのへかせきとめるゆる
とこ関ねきりて ○ヤトリキ 二十九 カホル 詞 さ関し
みちさしすはかすかにあふこうちの
ここをせき
関守
関代之関ヲ通ルモノハ鈴ヲ出スヲイフトイヘリ 一葉二

義経記七 三のまくらの殿の御数みや国家みな家をきる
ちかきちかきまうとあさて関守とかの無頼なくおちおちとやせき
わ関守をねらうらんと皆ありける
関むかへ
セキヤ 久かたの御関むかへかひきとてねかしつと我
わか
関もり
人しれぬ我通ひ路の関守はよひよひことにうちも
ねなゝん
せきめて
八十九 備前 続古今四 人をとひせきめて海のこなたる見え

は別にうるをゝの袖そぬれける○古十二 小町集 いと
せめて恋しき時はぬる玉の夜の衣をかへしてそきる
○伊勢物語下 男女ヲ都ヘムカヘ玉フ処 いとせちにゆきしかて
おりからきにはゝなるおやことよにいとせちなる人をし
めてくるしきかたに入るなんはことを思へ入るとなひぬ○
ことを 一日沖津さるもかはさりける沖にいまをしほ
てまちてぬれし云云 沖さるれさりしをみなてすちて
つかれりとせししかは云云
しほれて 無録ニト云意
なれ 罪にいと恋くてしほれてつらく覚しける○心 二七ウ 気ヲ大丈夫 二十リ
柏 しほれておくらへいねのつらる月をしきみをも

しほらし○一ノ 村上女御 古今所 碁石して数をおかを
なかりんとて云云 しほれてすきしかたのひきおりは○元生集
伊勢物語下にはなる恋見しほれて恋しきよりかなも
とおもる○宗木 廿六 ○玉 法師 いとめて
たしかやとすしをかしくして○宇治 十ノ一 夜のしめ
て青うるる方緑は青つけの衣とて殿上君達は
しほてまつひける○和哥も芸のやうける人を
なまめかしくて庭にたちいて しほれておこし
けるへつ御ことしてつらきつまりし○宇治 六ノ廿三
思ひて かなしみをしほれて昔しのはるかなりし時
は哀にとゆかりける○和哥 十九 けにくみ也とまれ

ゆきかへり人のさかり行にかゝりておなせしけれはきゝて
万葉廿○前栽四九　君ハことならひとなりてそ婦
しかん万をきゝておとしとて○トリカハ四涛淑を
さわきかへさをきゝてまきらハさまかひて○スマ
女の中ゆきまつらひをしくいたしう、あきし事のゝ
よさもいきゝてあつれ献にあへなてたまふ云○
桜かさん西ちやの紙のきゝてみちめうしきとて此絹
このことを語んへんとんとて
ぜじ　禅師　大徳ト祠ヨカハテイフ之
カケ一下方　女しくひ明してきゝしつちあふせんハ
云ゞれこと祠　あか物えしいせえとて云云

せじうき
タキリ十ナ七　せじうきハゆえさせすべきみやたゞ
せじやう　軟障
和名　○本朝式云軟障一條○スマ四
ハノウノ四　せんじやう○玉篇○カケロフ日記
二八　ゼジヤウトカヽレタリ○延喜式十七内匠寮凡
諸節前一日官人率雜士等豊楽殿立軟障臺六
基同五月五日節前一日武徳殿於立斗帳又軟
障臺二基○同三十八掃部寮十二高御坐東三間懸
軟障云云西ノ身屋妻軟障並内匠寮立臺ム帷幕のこしく
あるノ本のみ松風ノ絵ヲ書之○蓬ノウラハ二十四ヒの

ほうそくたしかるとのおはおかしきをしきあらう
かゞるへきし所〻はせしやうをとゞむ云〻
きんだちやう
ス二ハ内せんだちやうぢやうたまを引めぐらして
せしめ令
若 御前ちかき對面してかくきしめらるゝ事
あるまじき事なり○同 よく思ひをとゝのへて
志ぐれしめん○紫 廿六 おなじくかをりて 詞 いろ井
殿は何となきしめなる 字内詞 只今はけしきふ
る事で侍りける○深 廿三 カホルノカホル 内舎人 詞 ひんなき
こともあらは重て勤當をしめなるべきにようもん

御こと侍りつめるは○若ノ廿キ 侍従詞 謙あはせ出家いめ
玉うて〇しおゐ侍る
きひなく 無紀
盛衰記 十九ノ六 とうさたあぬんかて一二尺斗ある梛の
枝をおもうし用意してきびなく人をうち侍る所事
右四五十人ちや出入仰附られ○著聞 十六ノ三 夫を延て
くゝるそらりてきひなく呵てやうて件の夫をうちめくら
遣わるる△倍ニヒトムキニト云心ヘセンスハナキ心ノト解セルハワロシ
○棋王若廿 命はをしくこそ おんもとなくもひなう
あひしきしみまひ侍るそやとのおはすれば○平家
六ノ九 仲国既事ゆは門出ていちばやうさきもふ

んずらや出ひきんもひけし柳しあまて我入日たる
もひやもりれ
宇治拾遺一ノ廿二 尼ころもをにきひとてもりれ娘しゆるる
ひてさうを入て土みをうつぶしつ
もぢ
拾遺 貞外 三上 白露の梅咲山の谷風やをかれにまもる
のもらうみ
もとらぎし
埃嚢抄 ○太平記 ○雑撰万二
セラキ ○サラニナ 罕五ノオ いらよもみさくらぎし濃
しれる木の葉みられ川をれてトアルサヽラキモ同言歟

施す
倭カケ上 松をられいおおる事三万木の下の（ミモ）しぶ
もりおれ木の流きを倭うけみもれ（施）らうまり○同
玉おくらひてをみしの流き國玉の人にわ（穀）くみた
うをしときおあきいを河み若仙人恒河沙の衆生
みおれをまもしてを云○又虎狼魚もくそのに
まう皇さまらへて我ろこの身をまし一つ度く
栄えん云云をしい世の中みれらしきものれひ
ぬへうらん時に若響をいあきとなくしれ人○
ワカナ上ノ八十二 掌のいおおれ残りたれ色てふう
き山に入作るめわうひなきろ身みい魚狼みを

きし侍るなん

雅言集覧巻之六十九

石川雅望著

須之部上

簾

すだれ 二十三 女の物やうつゝみかきおろしてすだれ

内より押出たるに○竹川 四十三 大方のことゞも

みすもまきあげてすがきみあかきさましとのゝまちの

ある心ちそしつしり堂にもたつうひきてもて

す

すだれ

紅葉 二十六 我忘るゝくたちゐるたつの うき
こゝろあらしめて覚ゆれ

ぜ

錦 十三 もろこしの所にもいたつらに[illegible]文人にへてまう
でこんなたさらにすゝめおへ[illegible]

ず 物ヲ為ル時切

いさゝかなるざさせ(センズル)んにも物を渉りて[illegible]又
き(ランズル)うらんにはらひて立ぬ人を待もまんとて○
まうらはして立ぬる

巣

松 八五 巣のかへるをけふおもひなをすのうちあ

まゝすゝろなしあてゝる

水飯

常夏 初丁 たかれたんめりとくみさうなぎつくる
○松九 ゆひきよせて[illegible]○宇治七 水飯くひて花
きんさかりむすひて○手習 二十 人ゝあすゝめんあり
やうの物くはせ君なとたすめのせやうの物あし
うけなを

たいつき

河花 秋 [illegible]のたいつきに鈴虫のたかい咲るを
て待りけるを

すいがき 透垣

末摘 七　むかしのことをすゝりを北継宮御かた
にもの方に立寄りて侍る〇総角 二十　あかりくるに
よふかきみに侍なりけるすいがいの戸ほそあけて物のけをかき
て〇同 十九　あなかまの物なりけるに水すいがいしてあて
しみおぼえてとまりたる

水干

宇治 五十二　さしくだりける舎人など二三人ありける
水干をぬきて〇著聞 五ノ十八　しけ水干にさよ
としひきゆきて河にわたて

水練

盛衰 廿五ノ六　佐々木が郎党に常陸国住人鹿島与市

とて数の水練あ利

ずゐぶん　随分

帚木 四　随分によろしきもあつかひても物わかりたる
人はいふ〇玉葛 廿四　三条らも随分にさかえて
まかりけるかはらん〇宇治 五十ノ卅四　女家随分
のよしありかへて物はかりけるにあり給
とりまてとかくもりけるゝ人よく返しを
おこして随分にきんゆのくもりて心あて
おしたゝまたり〇白氏文集　蓬蒿随分有
栄枯〇朝野群載 九　誠抽随分之節〇保元三ノ卅
カヤウニ随分ノ勇士共モワロヒレテ進得ス

水晶

浦ゝ別ゝ こゝちよげに御前にきよき水晶の玉をつらねたる
の涙つきせぬ御有様なり ○九ノ十 月のいとあかき
に川をわたれば牛のあゆむまゝに水晶などの
われたるやうに水のちりたるこそおかしけれ
見ゆ ○土ノ十 水晶の数珠などいとをかしきものなれば
て長く短く様々にかけたるもいとをかしく見えて

随身

栄三 御随身のいふやう ○末摘ハ子 なほしくんなり
こそをかしけれ いとさうざうしくて見えし ○枕 随身
公達などのしんたきハいとをかしけれ ○弘安

礼節三 随身太上天皇ハ十四人摂政関白十人大臣大将八人納言参議六人中将四人少将二人諸衛督四人佐ハ二人云云

すゞろ色

三ノ八 久しくハすゞろ色にてつゝむちりしてもよくみゆ
やゝ注 源ハ紫のうすきかあるらくてへだてあれ
きてなれたるにほひなるらん

すゞなれ

宇治 二ノ七 女房もすゞなれしたるやうなる
誤字ニヤ一本 すゞなれたるトアリ
おなじものすゞなれてこほれたるその色を
いとうるはし

すは　サハノ心ニヤ
更級日記 守三 うちねふりたるよさり御堂の
方より すは いなりより給はるしるしの杉よと
てものをなけ出るやうにするにうちおどろきたれは

すはる
星ノ名

素腹(スハラ)
栄花七 一のみこはおはしまする女御をおきてかく
御子もおはせぬ女御の后にゐ給ひぬる事や
すからぬ事に世人なやみまして すはらの后
とそつけたてまつりたる

すはう
土佐 松の色は青く磯の波は雪のことくかひの
色はすはうにあて ○山家集下 しほそむる
ますほの小貝ひろふとていろの浜とはいふにやある
らん

すはま
古今 秋下 すはまをつくりて菊花植たりけるに
○栄花若叢にけ盤のおほきさをこうきのこゝろ
ありて山のやうなしたるそのうへにつくりてさまく
の物ともたてたり ○落窪四 うきたる海の色み
そへておもしろう大ゝ給のすはま中におかれ

すさやか
遊仙窟 三ノ十 東海鯔條（ナヨヒノスハヤリ）
すゞむ
十二 め都らしや垣根みなれしまてハ玄宗の三枝
尾咲る 梅の初花○宇治十ノ廿 志らきすゞ玄鈔
とらへつる○万 五卅 擅取（スハヱトル ミモ）さとるをさゝる声ハ稀やと
すてきとゞちよそひぬ
すゞふ
落窪 四 中納言 いとゞろたへてハ大将殿いとゞ
しく思しなげきて すゞふ折しもきさかへハ○一重
ふ十八 さかりときしも すゞ紅葉をちらへるぢしみきハ

まハ○嘆きに 此修法ハさきにしり○宮ら
修法なとのたえしむへきに事なとおきての所ハ
きて出けるて○サカキ 五 五壇のことさとりの
そしりみて続後 三ノ十七 赤命諸大寺及諸国
講師修法防淫霖
すゞえ
落 二ノ十五 口さなかしる方をつきなひて
すゞき姿
方丈記 いとしすゞしく 富貴の蹊みそるそのハ
朝夕すゞかなき姿を恥てへ恥らひつ
すべ神

すまでくるみ川のきし物をせん神のまへにとる也
てる月さへはまりを
すへきなり
宿木 廿一 今をとこしちうくせんしなりて ○ 四ノ一
せんし上出
椎二ノ十四 豆のかとの覚つかなからんてふるまなひ
出みすへ上出なんはおほくうもてなこくてをかし
うりおかへし ○ 若紫 三ノ八 あはれいかなるいはの
とをあかひう入ありか一つきそせんしか ○ 竹五
法子はさる川をそし居るもとしましくみそて
ありへすりぬく色ぬのはせんしか出なかひぬ ○

○ ウツ八 せうしなるひと川をはさてせんしか出家せり
○ 賢木 六 をかくくらか やをくらせんしか来て済ぶ
なひぬ ○ 大和 六ノ三 やをくらせんしか入て世へ
をおくりてうつ母手 ○ 三ユキ 廿一 物ゆしひみゆるん
椿さゝへか出てあんなくさかあるに ○
せんしうちよ
八ノ七 あさとの一の口本殿上人ともきくるもそ
しをやうしせんしかうちあくしてちぬ
すみまりける
若菜 卌八 一乗のてせんしかへりてきはゆるもそなり
へきへんなりと明をおひそとのなり

すゑつむ　螢ノ下之

椎四ノ中　二十三　御くしこそと云　河のへてすゑつゝ
ちひさきをなる身と云　ところせきさしくる法やさゝれ
うつくしきおほさくの云

さくり

宇四ノ二十　スムツカリノ和　さくりてたきまはぬありし
いとゞ袖の涙をいたちまみさくりしゝおほえて○
馬より　おほ鳥四十　馬よりさくりおりて○御信ヲスヘリ
家御座をさくりて乾燥とてまゐる

さくりし

古三十　六　あかくまのも霧と渡りあまねきより霜を　七前六

たゝすこしまて八さくなり○人九上　六　浮舟　ことの川
あさましう浅ましうなるへきさまにてまつへきさくなん
なりし○躬恒下　二十七　月花につけてさくなりなきつ秋扇
みいさきなくかくしきなめ○六五上　ひとりして
物思ひはさくなきは心にまゝにまかせ晴て　あかつき明し○

古恋三　祠と云　商宮なりける人のもとにとてゆき
あひてそのあしこみへゆるさくなりつゝも物おもひ
わりなるあひなみと云○アケマキ十七　いとさくなか

しゝ覚しうけい

さくなき

初上　四十九　仲忠　いとゞまさりまさてさくなきかほりて

たひてこゝろはをはかくなかりけりなひて
たんかく
第二十 ○したひさん悲やうみくるしくこゝろあるたん
あらそひけめをつらひて○同十 十二さ四十廿
もこえしゆふとたんかくすしも○多良 四年 清輔
新参を忘して下たへかくおりひすゝゆ○万四
第四 とゝをうらいに ぬるたんなきし○カケ二 巻々
や時て程へ不たく色かへ里しあめたくしらしふ
とまいみありきく不不ばとゝ絶のこたん家し
すべらき
堀太 水堂 清輔 たんしきの浦ちらの末のくるたんとはい

日ふ六水堂の地もの多ゝ絶○古今序 うた水必
たんしきのあめのしふたらゆめ流てゝ ○二三
すべらうと
瀬ゆたきやひゆうゝ新石たへうろをいふの家とし
の岩戸あくらん
たんで
九二中ノ七 形ゝゐ雲霧の絶信の二つくしして絶し
つるたて家らさいは絶たねたんへて地のゆ色かいあひ
みへぶしは思ふこゝろやかゝしの家へし○サカ 四十九
思ふとちいは万年中へんりふかさたんて我恋ゝうさる
しんてい形ふ形との名ひて○大二 さよるしやとお

ゑひてすゝみ又たび〳〵又の日をふつかをこきほと
へそ柳ともきそ臣六白面紙ね○古今序　よみて
千首ちゝし歌ふりまそ古今和歌集と云○伊
勢一　姫つ河なるつに及むひそましよみて人の
おきしこゝそうゝも○五ノ十　此歌よみてよそ侍りし
とあん思ひ侍る歌を物のあはれしる人のこゝに侍る事
やよめれし御ふみもち、大空ふ浮きなるつ雲し
きん作りんし侍る○同十二　よみていかにもとく
侍る身ふまゝこれね骨のさまなりとあん中す○桐九
よみてちゝさまさつふきつ○二ノ五　○三五
○五ノ一　○帚十四　よみてよめ内の事ふ

いとゞつみなんよみ申事そいつれし見るさまに承の
かりしこゝもち
きゝそし
カケ三　無詞云ともいふなる也○いよみそし心えんすへき
うしあしあん　云云
すゑし
嫌　三ノ十　二十六　大将入道の宮ノ御ロ　御袖いとくふてゆら
かたほ　云云　人あてあはれうよみして　云出ふ
○コテフ　廿一　御そことのまそひいはとよふきゝしう
いしよんいし玉ひそ○蓬　二十二　深きいししうのゝ
まひよんしそ○　右岷本二八　の玉ひよんし　河本二八

イ王ハスハラカシテ公雅言ニハ古本 ちんしうあかれたるすゝし ○小宰相

十一の絃妙きすへしつるうちきぬをとりて出かひぬ

○落窪一 女の衣を引きかけてみなとんすへくて入と

つゝきてはもとひとつをねきしちんしてあつき水清 ○ サカキ

廿四 御そをちんしあきてあさりのきぬ

すゝり 硯箱

夫木 二十五 家朝 浪のまへやさしく吹くらしむかいの浦の入

江のちとり立さわくなり ○万 十五ノ四 むこのうら

の入江のすゝりをうくめる君をすてゝ思ひかへし

すゝの出つゝき

夫木 九 後鳥羽 山か門のすゝのあかつきも新もしたこゝろ

あかもの ちかゝしいや

筋し

ノウキ 西 物ふとしかひあるをしのかねをそに思ふ事のたえ

ぬまかりし

筋

拾 左下イフ心ニ 大君やそれこそは吹きし筋は中君 出てきりて ○ 事ト

イフ心ヲ ニヲ あはしみなかかとらてわえなる人は 紫上 部手

あかめて 出しやゝう 出来て来るあるる筋のおもひつゝける

心のやうこそ我ふうつくしさ ○ 筋違 イフ心

帚 まれの筋をこれやふみ組しさそ ○ 筋目 素性

ト云心 ○ 玉 ちゝ人の筋も いふかしと ○ スヂヤウ 拾 母方

はしも庭んてもなく物しおもひて筋ても有るへき覚
はしおそしりはるゝを○ 心方ノミヲ さしりみて一の 扱庭
こと筋みて有るへき人の云云○ 筋目 帚 上達部
の筋みて
やんことなき筋 … の筋 すその筋
よき人の筋 … 筋ても有るへき覚ん こと筋
さしりへき筋
八ノ土し 雪の寸 くなこんへとなとやうの筋をいふ
らんりし 山里ハ雪フリツミテ道モナシケフコン人ヲアハレトハミム ○
ヲトメ八 さもしく流とひ筆りなへかたうま
とかりし中川 おくしぬへし云云 志川中まもるかきり

をとこみなはかなくして瓶子なとやうのもかなへ嘲を
筋ても有るましき人にはかなくて○ 末摘 二十九 けさう
世川もとはかりなやなきにしへきのさかれかめのおもひなり
たゝ心もちとしして○ 澪二 青柳のいとつきもなくて
蔵中くかはかなる筋そ思ひ知らすし○ マクラコト 桐五
くちなれはもそすくしてにまかせなかふ○ 嬉
二十しいつ生筋とかなにか何事をかしく思ひなんとなる
さる人はなほらん○ 筋目 帚 ありのもとをも見き
そのさしりへき筋なくぬを○ 同十 又はあしき
さきをとこて○ 玉七 又おもしろき筋さんくさうは
みや斎宮もかくしけなり○ 八ノ二

○父宮ニ御琴の箏御ともさせ給ハんとなり

このめか

箏ほそく

音楽注 御琴ハ生もさしかひての後ニ二三級計

きるを玉へ也ハ琴しる箏ならぬめでたくおかしく

なりまはりけるやうにおもえしまほ

箏ことひ

帚 二ノ八 女君ハあまたさうしをちすぢかひける

程ならも嫁しへるへき○濱松 四ノ廿 むかしの箏ならざ

ぞひとへるおもしろ成山こそ出てきこゆ物かたり

ひろくしきやうなりとぞ云○九ノ一 清少ノウヒく 三十頂

中しほどよりハけぢかうにかいなでてまさりけれとも此

聞えんとぞふし 枕二ノ九 こなたハ○同 五 心ニクキ物 たし

橋階 両義 のかたきをもやうなる箏のひゞきをおかし○康家

笠 くらき夜の衣など たゞしき ほそうなひてあまか

もねへくこゝろけるなり

箏なきし

月宮も 四十ハヲモテさしも奏でて人の此家ハ箏なれ

事なり出ねハ五月十八日ならで出がひぬ

たゞあとだに

宇治 一ノ五 いましべき二つきうの二人の琴を出して一空

あそびしをせまり給ふ

筋なき

四ノ七　かくなんと　○八ノ七男女ノ別レノ処ニアラズ　あすかあらくなりなしかた葛城の神会を節なきことをまけておそらしなし一かた云云○五ノ九帳臺試ハ十女房トモ戸銭指しあけてさらめでいとも制スル蔵人あながちにてゆるされは筋なき業とてゐてなき猶かし○本ノ帝一　事またなりゆる御の色を見まつりく盛栄人のゆくまへそたるなるをものへにはこまえしきのしかまなへときれさいすなり眼きてなり人色をこそさまうまゆれ○大鏡七　としつまりて筋なく戯れかひて侍り○ウラく八第十一　まく〱とおもかせいは筋なくて出させなかみ○同十二　さかしもなかるべき西方こそ思すき山路まてゆかんことすてのりなりれ家の人をゆくは思ん筋なくて牛車ひき出しけり

筋なし　スヂナクテハセンスベナクテノ心

小世継　御ところ会ハ謙辞ゆくしくはべる車などまう筋なしとのかみ云云社の方をうちゆかしき宮車の手のまちてやりてつくてい果ぬる大納言筋なくてや女ともの我なる云云もそこなるんいとひたきかひおもむ○宇治十三ノ十五　桂をもむなしく

川毛て筋なし○同 十ノ七 むらひみ こゝろしる
慢となりをまうるなりけれはかりしと侍りなれ
慢となる冠のおはし斗こゝそ南へまうてゝまゐる
をんて根筋なきそのいかきはなりとおもんなれあ
けるとかし○三ノ二十三 名にしおはゝおるなりにけみ法極
のさかにたゝあしみおはしてつ有 ゆきてしくおはそうし
あまた筋かしゆ紙にあらしまく人てちかうてようくけん
とそよまて

修理（スリ）

八ノ十 女の猪もはし家形をは云物かしけるなり
たかう事ありて云 ゆゑなりしとこそ覚ゆれ○

○三ノ二十八 根法ハ家の娘の事をわすれまくちかう
つくらひつゝなれは

すり

箋云 俗ニ盗人ヲスリト云フ 和名抄ニ麁ヲスリトヨメリ 竹器ニ入サル物モテキテ物トリ入レテイスレハ名ツケタルニヤ ○ 兼モリ ○ ウツホ

揩本

百錬抄四 永延元年丁亥二月十一日入唐僧奝然帰朝随身義三傳釈迦像十六羅漢繪像並揩本一切經到蓮大寺大臣公卿以下立車奉拝之

すり形し

若紫三 髪ハ扇をひろけたるやうにゆらゆらとして
顔ハいと赤くすりなして立てり

ずりやか
帚六 すりやかにふるひて人のまへのてにかゝつらひはまほ
ことおほくそ和定めたる中みをまとしきさとおほしけそ

○玉鬘 二十四 鬘玉の受領の社の方ふおほし奉らん○
浮舟 四十六 まろ御覧のきは嵩きたちりの気色そ
かけ家○名良 五十一 そらしすりやかのことまのさそ

きしししもが

すりこ
サラニ十 十一丁ウ 大井川といふすりこありけるのよの

嵩おほりかゝるかゝりをおほくして流したらん
すりに白き名ちかく流したり△すりものハ磨粉
ニテ米ヲ磨テ粉ニスル由之

すりこぎ
大ツクハ集 節用集才ノ部財宝門ニ磨木○菫集類
抄下 麝香ノ条ニめしのすりあき

すりこばち
沙石集 五ノ廿四丁ウ スリコ鉢○下学集器財門 摺粉金(スリコバチ)
○道具准后田国雑記

すり袴
拾雑秋 祭の使みな出まうる人のそでくらまう

袴 はかまは袴の事なるをはかましてはきるといへり
はかま
すり衣
伊勢 初段 春日野の若むらさきのすり衣しのぶ
のみだれ限りしられず ○古今 みちのくはしのぶ
みをと思へ紫の袖すりの衣は色にみえけり ○
後拾 人しれず袖をひとつに紫の袖すりの衣
したぎにぞきん
すりかりぎぬ
イセモ 百十四段 すりかりぎぬのたもとにかきて
つけける 云々 翁さび云々

すりしき
桐 主上 しもの御衣はたきしきに出てくるつるさき
きんじかなてはおうかりたまふくうちえ
すりもろ衣
拾 イセ 足引の山ぶひみちもみ白雲はすりもろ衣の
たちてかさねたち
すりのちたるの
かへし ○六ノ九 ○
する
若紫 八 一の衣をかしうすりみたりて
する 衣二

古秋上 月明なる夜ハ揚らん船の家みなあはれの隠ハうつらふ

ひ妙とぞ

する 墨二

ウキヤ 墨心とゞめて御しるし ○ 一ノ七 紫式部の

筆を取て候へきに ○ 二ノ三 試筆 硯の一つを乃ち

てかきそへてある

する

タギリ 二午 ひとり妙なる雨の御ことにかゞみ山かけの出かけ

うしろをかゝる

かゝる

行吉 姫詞 紫式この方へ白くちすとよ思ひをまつ

てまつりあんなるよ数事ぞくちをしうきこえさせたまひ

○同 同 さる所へまいらんなどいひかはしけるて

侍りけれ ○ 三ノ五

する 為

東橋 卅 うち添ましかば人のものうきをわきやあけむとき

らめきしかが ○ 古 巻一 ヨミ人シラス 人ま見ぬあけのひを

小ざかしおもひ参るかしの山に住て候ふなる

すみし

増えた 花園なる女御あかきへかしへ聞えなおる

いま年みる すみしくはかしぬハ思ふところお

ほしまさうあかし △ あかしの浪ノ二ヤ ○ 宇治 三ノ廿七

二宮に植てなれはまさりけるにおもひてこそ
はかなく大きに制しけり○棟 四ノ上 廿二
する事
なかりけり作りて出させたまひける伊勢
て帰り給ひにけるをあはれとおもひける 具平親王
なりけり
長明集 なるすみをさへまきかへしてかしく
うひのしも洞に出しける
なかなれは○
沙石 四ノ下 三十二 人の一物をてあそひぬを正如身（スルスミ）といふ○
つとし 百四十二段 ふるきすてゝ人の方になかゝるなりける

△注一物モタクハヘヌヲ云フ○白氏 廿七ノ十 偈吟詩 正如（如）身
後有何事△正如身ヲスルスミトヨメハ正ハ正夫ノ義
ニテ独身ナルヲイフナメリ○夫木 三十四 慈鎮 なかなか
にわれならぬ身はすみよしのまつかけになかれて
こそなけれ○白文 廿二ノ二 正如剃頭僧豈要巾冠主
すかぬ
法性寺集 六月祓詩 世上久為流例應林鐘晦日
禊除衆詠無他詠 千年頃期有定期 六月風苦地
燎幽辺夜家石湯水冷歎秋中未知何物渉菅祓
結草如輪令首蒙△茅の輪といふもの○江次第
七 六月晦日条 今夜殿上並大盤処令近人取菅祓

等（入柳営献上之）○堀百 夫九 隆源 ちとせまで人もかはらぬ
めやこのいろのこゝろはひきかへてかはらぬ○宗継
白きくてわかなのつゆにたまの緒はながき
よもぎもかうつりはてゝはつかにてるにあき
みそ人かうらをつくりてかはらぬ数かな○
夫九 仲実 八百萬神にまかせてみこしのまへにかゝるとも
ちよかきのこゝろはきしの緑○江次第 一冊六
元日宴会 春興殿南廊西面結菅貫張同幔

縋

金槐集下 道寿 しらぬふる人のかけまくも杜
ちよかけてむかしまでかゝる○新古 夏 かはらぬ庭の
むすびおきしつゆはいかなる色の○
夫二十四 西行 夏草の一葉にすかる白露も花の
うへにはたまらざりける○拾遺集 夏 よみ人しらず
軒のつまにあやめのすりの夜の月
○夫八 季経 見渡せばあやめにすかる
軒のつまのくもゐ○同七 為経 かはらぬ
むすびおきし袖やかはらぬ○夫十
大納言経実 あきにしもよの深草の萩が枝に
むすぶのちかひ○拾玉一 秋のゝ
やよひの草の葉にむすぶあさぢふ
○金葉 修理大夫 ちよのかはらぬ

むかしは菫つみしをおもし○拾玉 寺 いんのうちの
とあさぢが原にむらさきのすみれ[illegible]
婦く咲[illegible]

すがはらや伏見

古今 雑下 いざこゝにわが世はへなんすがは 大和国添下郡ニアリ
らや伏見の里のあれまくもをし ○後拾 雑上
まくらはれ[illegible]ふしみの里の[illegible]
みするにあをきつきの山○垂仁紀 十六 冬十二月癸卯
朔壬子葬於菅原伏見陵

すがる

枕 三ノ 十三 虫はなかきも蝠の様[illegible]

一似我蜂ヲイフ

すがる

雄略紀 十三ヲ 蜾蠃スカル ○万 九ノ十七 僊[illegible]のさすかは
をとめ ○万 十ノ廿三 春されはすかるなく野のほとゝきす ○万
十六ノ八 とけ[illegible]すかるなす腰のほそき僊[illegible]
○和名抄 十九ノ廿二 蠮螉 和名佐曽理 似蜂而腰細者也
蕪名苑云一名蜾蠃 云々 ほそき蜂の事なりと云
の類なり 拾玉 一ノ十 奥山[illegible]
[illegible]此哥は鹿の[illegible]
[illegible]此こゝの人の前に鹿を[illegible]
[illegible]

夫木 十二 如願 時雨る山峯の松けの風にまそてたちかさね
なのみすかる啼なり○古離別 すかるなくなく秋の
萩はらしくもえそ旅の人をとゝむれ○堀
太后宮匡房 すかるなく小萩か原のしからみや
いかなる人の言よりのこころからまさに○夫木 十 原上鹿 俊頼
秋風をたまたましかは咲初る萩の花すり
すかる鳴なり○万十 旅人も けりかれる すかる
のこゑきゝし秋に旅きしるひきそ するらん
るまそて 初のかけ散あられひきし○万九 すかる
そこの須軽をとめ○袖中抄 無名儒語 奥義抄
抄等ニ 三十 鹿ヲイヘリ 或ハワカキ鹿トモ云ヘリ云云

シカレハサツリヲモ鹿ヲモトモニスカルト申ニコソ云云

すがる

鑑中 あしのやのしつはたおひのこゝろやき我まゝや衣つす
うらみくゆれまくしらん○草庵集 浅茅生のをの
草ふし露さむしよるの床そさみ鹿そなくなり○
師氏集 白露をくさ葉にをきて秋のくさとまつ
らみなくる松虫の○

すがく

麻生 おもしろきかぎりの錦によるかはの鮎の
かよひて○拾遺 三十八 かはせのみなかみを
きて○ 堅紫 四十之 あつまをさしてひとりなは

田をこそつくらめとていかなりけるを蔭をいとゐるまめき
てあさらひかへけり○ワカナ上ノ三丁ニ心あはせらるる事
なりかきあつめてすかるきに
すかぬき
法性寺関白家歌ニアリ○千載恋四仲綱かくはかりて
人ぐくをたに契りはあまねくあやかりかたくこそかきく
成らん○夫木九夏夜隆仲おぼつかなき月のよるやとしの
夜しておもひすきぬ樒川さかはのかけに○新千載
入道前太政大臣年頃のあらそひをさとこゆるまかすかぬ
きりきて七十八経ぬ
すかるゝ

千載恋四仲綱おもはさん我あてあらはれかたも恋
いはのかはのかさりき○万十ノ五丁ニいみしくそあの寛を
まちぬ○宴録三さりけ明けぬ晴るて○松風吉いあるべき
さらにおもひてつらきたまふ婆あおひ嘗あらはれとのき
思ひける○拾枝三かりこの河をたにさまての母子川
かのすかるひとりのふだんことに○
すかるつき
ウキ卅八女かなきあらんさまかひてしかゝあそやう
朱きのつきはあつりきあり云あつらき
かよ雨るはえうきにまき五ツをうね袖口すそ
のあらまそあ中あうしくいかしくあまもく

くさまくらたひねしもおきあかしつゝ云云
○ワカ十 上ノ百二 世のつきかきのこゝちしてえへらはあひ
しかれはあそにらすへけれ
すゝく
金葉 哀上 よの露にはへみなもとすゝくさゝれ水のほと
さ波なきなき人なひきしなん○源氏 四 さゝれ水の
宮木ならんなりける糸とりて心細しと經めかむへこ
○夕くれは雲の通ひち道をかすめてすゝきるへきの糸
此二の時しき
すゞね
宇治 四ノ八 越後國にハ鈴といふ物のはなれとかいふ

法蔵をとりて寺にこもりたる其の上手人にあはする
すゞやか
狭衣 四 殿杖ありしもあひてよろかすひ人ひとへ
なり一まとこんありしすゝやかなる衣の袖をたれ
ひく心もおへさけ程ゆかしくしも御事にて
御車にて すゝやかにおはしまさんとゆゝしき
道にて御車にまゐりぬ○柏 廿二 おとろしくしき
ぬかなしことはもあやしくてすゝやかなる覚し云々は
ありとみ○狭一ノ上 五ノ上 此めのとはいとすゝやか
なるましき髪にて△注 スヽヤカ之 スガゝト同言ナル歟
○花鏡 二十四 御所云云の夢なとをすゝやかに

奉すゑてぬ

巣かくも

拾遺三 あさくもて數にもあらぬかりのこのとをひとつ方

みちのくとりかくれなんすさし

すか枕

金葉 すゝきをは玉藻をこのすか枕こちこそゆけへ今み

すゝの気しきをを

すかごと

續拾遺 袖中抄 さゝかにのくものいのすかことをなくふかしかは人ゐ

を結さりてこゝふたにすか結む ○夫 二十六 うけにひわ

ひゐのめぬかねハ ちりめもてかわふ淋しきとかのすかこそ

○ ちゝ雪 進忠兼宗 すかたのこのこゑにハ秋の碑のかたきを

進てかしさにたゝく物そなき

すゝき

夫木 二十 山の川のあしかみかきわすゝき婦しかくし

とくおもひわたかた○同 なみハかなあしおしたの

のたのおもかけひとよの婦しきたちもハあまる○同

廿一 山ゑのすゝきの森のたゝささえて岳朱ハたか

とたゝしきうかなゐる

すゝしの長穂

アテ宝 二十八 たかとう手のゆふめしきしかとききみ七

草の乃粥ゆきてきすゝしの長穂みちそなて奉ゆかへる

すゞめ
獄裏紀一 ゆゑ藤原氏はすゞめあまたあることは中〳〵にあ
らんのすゞめよりもきぬはとくおほしきやさしかるか
すゞひ
紀四 十七八日の月とみてうつくしう見ゆかかる
すゞしさへり中の君もさしあはせてあそびにおほか
しりすゞしるさ満はまさりて △孟 切つもるかへえ
○枕 三ノ下 卅三 一え月をみたる文うちすゞひて
あかきやりつきにまてあすゞしとてあそり △枕 十二ヒ
テ之 ○ きるはまひし け うちすゞひえを ゆゑすめ
てうしあらしけれて ○ 兵要 卅一 よひすゞひは

えやかすけおりとろしさはびさらふさへ若みや
うちすゞかひらる尾そふらの婦しておりとり
と斬あはすゞろ △枕とはふをたちを延でうりて ○
すゞひし 遠ヲ延タル詞
夫木 九 俊頼 山ゝ河のすゞろのうらき折の生ふ宮
おきろすゞろひしと
すゞのし 遠
花宴 六 そらしすゞろにあか事とえはひあへとき
すゞす
鬘 三ノ七 心うくすゞしまひけるに ○ 玉ノ卅九 のうきを
いちまんとて病ておりしうかりける女ゝ中すゞにかは

国立公文書館
National Archives of Japan

みを人あまたハうつしもちせんてをもとをすゝ
きハすゝろなるなり○スカサレ帚五 かきさそふはなちらん
んなるとれなみハきえなハすゝきなれなりけるらん○スカサレ
行幸 廿三 かきまよふすゝしなりや○スカサヒ東や 女をそ
すゝしてすゝさかれきまちなやわらん○スカサレ早ワラヒ五 御さ
まのおもしきにすゝされきてまつさて○スカイ 花ノエニ
きこえかなるなれや 三六○アハラマカキ 丹後守為忠家百首
仲正 たゝきこゆれあけなる籬のかくれなくねをすゝしても逢
ね心なし○帚廿九 おのこゝろなる女のゆゑすゝろなるを○
宇治 四ノ一 宮男をかまよひなして云のこゝろきなゐとして
きゝし思ひたまへハ○スカニフス 同 三ノ 三十三 なみし一のすゝ

さむ○同 同 十ノ十一 きこしふさんとてなうきこえて
しそ色ゆくわらみ
すゝしくも
きこえさへふゆへきまゐひはかなれ言ハあまり
マキ 浦心ゆくきなふたるなゆるされあるてをやる
すゝしく一十よゆうしくもなそ○帚二十七 殿上所
とをせ出かなへ云ま所からすゝしくハえまし
らひ侍るさめるをとしてヤス
すがし
桐壺 すかしてもえまゐりつきかへぬなりけり
すかしし

古事紀上ノ二十三 須賀之斯○其多夏土 よしひく
ゐ洞みむすひあみてうをすゝしくらかやきて
くりそうめつひやう○弱クラへ九 志りしとても
葉つきちり人思ひえ すゝしくうゝれおもりしとく
こゝゝちもおの○安貴 さんあんきそうあと
いふある事しかくりもちそれのすゝしくらり
しうそかく思ハ○ロウ百八詞 世をの谷おもう
みふ人葉つゝみ云 ものいふこめしのおもひハも
のきゝせかひて々よく侍らんとの葉しきゝと
すゝしく云云

簾

大和卅二 すゝ思ひ風つゝかたかけかく八思て雨くあ
し○夕 初丁 すゝゆハへゝゝいゝ印し○康夏 十九
簾うちに切しありて
すゞ河
ハ三七 いうてうくすゝ葉のかゝしもあやうきミ河
とりのちきりきそらし○後撰春ノ五 谷さむしみ
こゝうちね夢のなく夢するミ人のすゝあぬ○
初学五 引すゝ思てしハ思ひゝ夢のおとそうへおのか
袖をうち思ゝの○清輔集 千代まで千代やうさう
んきつるく川おきうらハしもる一つるの毛衣
すゞく集

兼盛 三十六 すゞむしのこゑの人のたえぬくはゞ[illegible]
ふかくなるのしらぬはなる〇後拾秋上 恵慶集 すゞむしの
ん世の人をまつやとなりぬらん秋のよもすがら
月〇順集 兵部卿 すゞむしの[illegible]の御前
へ御こゑをそのかくなきあかす下〇古今集 君のため
すゞ虫の[illegible]なく[illegible]すゞの[illegible]
万十九 西 大きさは神なし[illegible]すゞくに
おほ紙都[illegible]ぬ〇イセモ 第八段 簫笙ひてあ
まつ[illegible]やとの[illegible]まつ[illegible]のすゞ
くなるかり〇楼閣は門を[illegible]の[illegible]
ましく[illegible]のさ[illegible]しく[illegible]

ふきあへて[illegible]ひかひて
すたく
遊仙窟 懸傷寸断
す僧
拾雑下 あ[illegible]継 修行[illegible]法師のすゞくう
すゞや
[illegible]はしき[illegible]やの[illegible]の一[illegible]く
[illegible]〇[illegible]の[illegible]来てなき
[illegible]すゞや[illegible]〇行事の[illegible]
むかしのゝの[illegible]やあ[illegible]き

△スルトスル 五音通スル之

すそ 裾

夕霧 きぬの裾をおのれ引きて○いせも 初男

のきしりけるみきぬのすそをとりて

巣はくる

拾 牧笛 ヨミ人シラス 夢路にもつゝむ袖をしのふ一ゆへはこゝろ、

いかそかうすみんとすみん

すその○の葉の歌

方丈記 すそわの田井にいたりておちほをひろひ

すそ 呪咀

クラ下ノ十二 右大将の娘をあやまてすそし奉る之

天下にも大将をすそしまうして中納言のうさ

押不う教ゆる人のうちか人いは二年にあはる之○松

○二ノ六

すその流色 鷲尾

トリカヘ 一ノ十四

裾野

千載 春上 基俊 堀太 春雨の降しそりに所もの

すそのゝ本の波こそかゝる

す川

松風は世の中をさそひしかふこゝろ人の玉にあひ

たゝ清へきしこととも ○新千載や 押新し 袖をかひとす川

にすさまじきへてきんもいやきもき秋の夜なかりけり○浜松宸筆
をしはかる人なく明しても首にれる枕のとすへきかなれは
かく参りて○夕良 四十六 あつく照りまさりて涼しのさかりそ
きそておもさて作りたりける○桐 七 うちすてゝ見えけ
きしやうしきのみハすみそ○帚 卅四 この人の御
枕らくとり出し○夕四 をしけなきし身なもとを
そうへく思ひ人つることを○夕良 六十四 身をすてゝ
けくみ○和泉式部集上 なけりてもみをはかりなん
くらぬれる袖ハぬらされてやしてやし
すなはち
枕四 みへ使 頭中将殿の御ことなとの御文参らく

とりかへしよみてみるさはなる所為なりけんと
おりしへる出たるさまなと見ゆるはれは所縁とのみ
へんとそふみとりありつてはかなりすなそなり 立
帰りてさらにさまありける身をかはやうて来し
なん御らきへるとうしいふなるやし 伊
勢物語なるやしてハうきハ云云 △伊勢物語古写本
母かみ葉子とよみの事とて消みあるしたれは
○枕四 雪山ハ明里みかくて 清少里ニ居テモ 明すなかなる見
也 大事ある見とそあるとせる云云○九ノ三 明ぬ
まハ知れたる十明たち出ことしありするかうしす
やりみこえんなる夜をさて来り○落タ木ニ 明る

侍らんよ千よへた恵のうへにみたまへぬるハ玉ひとつか
ハ忘れてしはんいふ心ありしを○後中 生も後流
刹女おのゝ布のふところにみゆる事まて母の気
おきしこと生源氏のかくる柄をうちに見せ
きして○□チカケ後室ノ処来リシ時内に入れふと云ふ
さらおりし世がに何しみきれんと御申まて
て○俊上 佛をもりおひて刹那にのりて至の
上にあさひかに○莊下 二十三 ○呂宮はあまりに法
まて殊へかひを刹那をかへす○哈上上にて
雪ふりはすのにかりて降る刹さえん○キリ上
御門拜みつる刹二示云ふしあしあけてきハ事を

らさ宇○ク二上 五十六 かくて物しるまうにてなん一日
病をし刹とも思ひかへしをかとあつく侍りてなん
○クラ下 四十四 彼岡外ヨリ中なる事はしすかれ内に
入りてハ則やそきうちすそてハ ○化城喩品 七十三
如来尓時即使為説 ○若慧 をうちハンそも
いかへし刹俗報するのも至れへきゝ○ 其時トリハルカゴト ニ又早速ナリ
○発心集 六八 かきもしか思ひしるへし筆用にて
ゆきハすゆらのやうにやいかり○同 八ノ十三 彼宗
京の僧の名を刹那に侍りしかと忘れにくりと
そ○宿木 四十一 例あるやうにゆかさねしへりしよりハ
ひか則おかに余りにけりしく侍りしそ○桃七ノ八 出て

は紀友則か一年てある日を別おりしすして工部さる
かよめ人ハ△是等ハ早速ノ心ト聞エ○トリカヘハヤ
くらう別当の大殿にわかれしうゑ御ハ○椎二ノ六
別紙きき 此頃年のけふこそうしけふや別るゝ
紀則祐むかし業平朝臣かりけるに別れし○大四ノ三
流らりまへのまへ作るゝことかハ別れしを見りける
○藤氏おもしろ車にあつらへまちきまへし出さ
きさんへし別人中りてきそ○同 此方物を見出
此る別れの方にゝおもすかしにおかし○椎二ノ下 四十三ノ
子ゝし所思もとふとなあハもの音りけるこゝろ
ましひハ其しのゝめてあきつゝを○浜松二 延喜

内間臣等を流されしてあく乗る人き由仰出しヽ
まりきハ別業りて作こる所出云○宇治三ノ廿之
お寄おりさとあそびかへりし之根をおしおお
至へり○万八 時鳥あまし小なき家の宮に
此恋ともひしハおりてまれんかを○大二ノ三
只今まりてとあさんとかなりける人のつきてあきに
まりて○古 あらへ男女かくれて人の白へまうり
まり男すきあもりてすおもいみゝに思ひ
女ひとり京へ帰りける道に○躬下ノ字 詞云 さ
の日侍母あそ帰りきかへてまいりきしへる所に
此中りけの事とて別るゝを書る奇と云○

哭六云 悲しみにたへずしてなきさけびあらはすを云

つよくなきは悲みにたへかねたる○古今序 近き世にその

名きこえたる人は則僧正遍昭は哥のさまはえたれども

まことすくなしと云○能十 とくかへらんとて絵

を画して絵の如くに則あらはし雲のかたちの上手の

すさまじき様なる人有○同 十七 天上使伺 いさ天つ姫

さしおきてあらはれし也とて天くだりきたるとぞ見えて

る昭のまことはすなほなるべし

すなほ

初学 心すなほにしてみだりに世のまどひにまよはずとぞ仏

のおしへにもすなほなる心こそとくべしと云き也しと云

りや一つくいひしすなほなりしものにあらぬ物をえて思合

すなほなるもあらしやは○ツレ〳〵 すなほならず

すこしてもつとめて物はなし○同 人の心すなほ

ならねば偽なきにしもあらず○同 百九十四段

人をたすけなばすなほなるにもあらずと云也

ていふにもあらずすなほなる人あり○古今序 千早振

神代には哥のもじもさだまらずすなほにして事の

心わきがたかりけらし○ツレ〳〵二 直ノ字ノ心ニ用

タリ○神武紀十七 民心朴素（スナホナリ）○若十下 八十五 こころあ

どくはやはぶるもすなほなるにもあらぬやけさまのこころ

へだてありてすなほならぬ人の心をも物なきさまにしたるに○

秋　サマテ佐龍豊ナキサマニ

すなどり

大和　二段　讃うすみし浦にはあまやさかえんなかれんはこと

すなどりのこと津の時なき

すなふ　出納

宇治　十四　あかしの郷のあかなふはとたすもわすれ○

十三　伴大納言その出納（スナフ）の家のおさなき子と舎人（とねり）と

子とけさうひをして出納のをしきを

すなかい

菅紫　四十八　庭のあはらなる玉ちるさまはしらじやさうか

れんてなしかしもとものかなくみ宮○柏木　四十一　此は

うしこのたれにこうすまし物のかくれのすみ　遊女之部へ

○六帖　四　夷之集　波の中にすなこやもこえ暗うも

八島みすゞとききを出づる気なり　○後カケ　隠家

みたすこすなきも前栽植させあまたのありくら

しかうさて

すゞ

銀　三十六　若紫　たちまちにはゆかんとて大殿の守にかなへく

あかき人をしゆかんてものゝかさよ　○順　二十三　昔日

たかきひ一つよきかとたも花にも

あらし北○　宮三　七夕のすみかうてあすするちょうに

すゞはかそてさましたちかの川渡○銀性　四十二　師走

のつたひかりの秋かぜのおとかれて 鬼すだく都のう
あやし 簑笠をぬぎそへこよひへかへりゆかん○六二
ノ上 後 帝まりとおもひけるへき事ありける尭
人のすむ川なめやかた

すむ

清輔集 まろこめはあとつかへする山の井のいかならん
みせやまんとすらん

すむ

蔵条一ノ[illegible]ちかひとてはらさかりける所のこのあ
こきにみかよりてとしへて渡りしくおひそ
あらし○イセ 二十七段 男すまれ成尤ありける○万四ノ十

昔ハ家にてもすむ伊の家路なき我ハ忘れし命
しらはを○万七ノ十 めつらしき人をもすまん人まて
のにの岸のちかさをみんよしやかは○新七 世のへ
あんの大臣大殿のこころきおそてつかしてうくや姫み
すまみかとおもかんしれやみれおもうかへ○宇治六十
俗御集ハまた筆跡のまゝにそもとみ秘をちかてるちか
ぬ事ハかるもみのハ心すむる人十さん○古今二 貞文 白
河のあたりにむかしよりわたし瀬のよみ渡てしらみすま
んと思へハ○拾雑恋 男おもひかれてわすれてけるを
女のもとつかはしける月のかけにさそはれてすむのかけ
けのひとりとしてみをそなんすまむてきつるといひけれ

まくらもハヨミ人シラズ　西行て庭にまかりける滝の上に
すみはてむ物のうらへき ○ 玉くしに雨ふる
やまの庭にみえる古すまねにかけいにしける物から ○ 十九
谷の住の人すまて住すまいは雲の山七日の月もすまし
とおもひきや　古詞ニ　稲荷の社にこもりて女の手にて書きつけ侍りける
○後撰五 一条院の娘にしのひてすみ侍りけるに
○元 三十二詞 思ひて人のもとに侍りける女の親のもとに
まかりて ○ 廿三 詞 大輔がすみ侍りけるにすむとも
なきものをかへれと ○ 大一 弓依称もとより出来て
思ひてすみける所に侍る ○ 後撰四 出河への
娘子にすみたまひける所に云 ○ 拾 十九 さくら

まかりすみ侍りける女につかはす云 △ 拾遺

すむ　スミノ処見合スヘシ

新夏十九 此よにはすみもはつへき物のあはれ河なりけり
さらにそひて ○ 拾 三十八 物ふりてすまぬ人のす
こゝろもてすみける世をのかれなんとするらん △ 契云
俗ニクスミヨルト云コヽロ也 ○ 新夏四 秋のきよく
すむ月ね名に

住つき

名寄 廿九 世をのかれてしみつからひて すみつきに
みちをすゝめし人のつくりける ○ 明石 卅 同じ
入りてみ言の中にすみけるて

澄 すむ

椎 三 物の音すゝましけなるけしきなと ○ 末のむ 物の
音すむへき夜のさ河やかに待つらむかし 侍わけにけれ
云○ 早 十三 いとゝおもはるゝすなはち世に あら世
久へおもふすへくそおもへるに

すみにくゝなる

明石 十四 なとやうなかりし 古の気色に はかなきは すみ
なるらむ○ 椎本 四 筆のさえ 云 ゝふまへハ すまひの所
さまてもおもひしき 筆のかみつみくるは

すみつく

東屋 四 命婦ハ せの 母のなけきハ すまひつくれは 姫君

いかなることをもいひてなけかはしく かたち

すみなれ

明石 十三 すみ馴たるすみなれし池の水も思ひ出つる
えにしあるなれ

すむ 住云

古雑下 惟喬のみこ 志賀の雲のかよひ路ふかき峯かた
すみかは住給ける世をすてゝ 〇方 二ノ三 鬼の家
しるしなき 人すみたらん○桐 壺二 雲の殿ハ 云
うき雲井の物思ふ人すみたらん人をもなくて 世を
ちやうし ゆけるにたえん 流る○ 総角 四十八
おもしろき山は 物は すみかはまたはしなれて

海へし

すむ月

桐壺 月ハ入かたの空きよけりけるを見てもろとも

ずん 盃の順

紫の花廿六 しか盃のずんの事あまた大将ハ相応のなと

例のとおりはひの子とそ万代まてすきぬ

ぜん流る

並の裏ハ つきあしみち町ずんなかるるもと碑のすき

世みをかしうして飛ひかきしれ○増補一

おとろの下巻 元文二年三月二十六日竟宴といふて

書り屋みて行なとかいふらし文世のひときあり

彼延喜のむかしおほしよそへて 院の御袰ハ絵のか

こ始めきしをとりあつめて一もの絵をすゝむる

つれしも○ 摂政殿よしつ手のおとこ書せ

や扇子をけしもの葉流あしてひろさかし玉ハ おや

わかる○ つきあしぜんなかるめしのさぬこと

こうさくまなん○松世一おかさせあまさまをも

ぜん流るも

ちゝきあはる

堀坎笛 短仲 笛竹のよをけへ月やてらしれらむ宮

ともちのいすゝきなりけ

ぜんの和哥

さクラ上ノ二 二十一 このくてすんの和気行政の少将のこの紀

つく

すんの舞（順）

さクラ上ノ二 二十一 此すんの舞ハしもくるかんゝし

寸（スン）

ワカナ上 くゝしの端書て云七八寸ちうれあ

すかみへる云

すむつかり（酢）

宇治四ノ十九 大豆をいりて鉢をつる事を何と

云鉢をとうをかしき事 宮れんハ斟酌

あるこの所る時鉢をこの事つれすむつかりとて

にうえてしくちゝさすうるさくあふめ志つうゝされハすん

よそてちさしすれはぬふりういふ ○精進魚類物語 供前

すむつかり瓶にさけのゝこれかりるをとりて喰ならぬ

面くにんかきてやうてあわりしとして鉢むつかり

みそ料りにもる △此頃ハ堅豆にて二月初午の日煎

豆を醤油にて煮て是に大根をおろしこの事てする

つとにほうとて田治稲荷の社に奉る是をすむつかり

とししふくとそきて △野州ヨリ奥羽辺ニテカク調理シテ喰フ

トソ △下野人見島甚云煎豆大根糠酒ノ粕ノ三種ヲ

酢醤油ニテザツト煮タルヲモむつかりト云フ

ずんざ 從者

拾四ノ二　たえひとまきずんざ

誦
ずんじそ

セノ六

ずしして

セノ六

ずんぜて

ずうじ

四ノ六

ずし

イセモ　八十二段　これ哥をよみてずし給ひけり

しらん玉たまふ

ずし　誦

第卅六　哥ずしかへさずひきかへ○花宴四　藤原をえよ

うやうて句ずとは　ずしのゝしる○コテフ十九　なとよ

ずしなして

ずさす

ミノリ十九　さしくりかへし念仏をいさるその次て法華

経なとずさせなと

ずり　居

万二　三十六　みを文律のとまとみ　十名八の

○ワカ紫四　一の十六女どもあり　もの縁書八

さびてかいすへなかりし

随逐

宝治十二ノ三 竜樹菩薩子ニムカヒテ汝等年来随
逐せしところをおもふにさしてしるしとよふ
するなし

江談抄一 酉日圭上廿二歳仍以酉日為御衰日依
然避之○續古談一 堀川院御時ニ云人ニテ連句
のさたありけるに周臨か未句いへる御らもくるしい
ま日まちくしの衰日なりとぞうつわ有しけれ
ハ○拾芥抄下末四十四 生年衰日子午 丑未生子午
寅申生丑未 卯酉生辰戌 辰戌生卯酉 巳亥生申寅

すゐぶんなり 分相応なり

帚四 あうたん半すみかみ宜義きこえ多くわとゝ
みふさ色とゝ○玉二十四 二条しらさたる身み栄へ
てうへ有すいつうちまつらんとひとひとおまをあ
て○急し入ておわり○白氏天 蓬蒿随分有栄枯○
よ露四十八 うき前し女子のうハ有をおりひよりとひ
作りてさいぶん成りしと得と申しつき作りたるは
○宝治十卅四 出家随分のさとりとハこゝろなく
めいてとかあるとて申しとてなく盛なるらん
人のなく成心おこしてこそ随分なきんとかく功徳是
ありてよろしかるそうさうとう○砂石抄 六ノ上 十六 嗟
賤の無縁なる人ゆへ随縁卿よりこの好分無縁

の際なりけり○盛衰記四七 神人志門にて随分
のとも葉をもめぐらし向後の安堵をなさんとし
○末摘八ノ左 随分物にて知る○江次第抄 随分能歴
覧不能委覚○平家二ノ廿二 入道随分身をたてんとす
ともかひなし

随身

枕 男ハ又随身こそいとしもあるものなれ
随身なるまかりいとあはれなり○蔵ノ裏十五 柏木詞應接
なこそありとのみへいつ尋詞 はらからのきたる随身は明かる
ことくやしかりき

すのこ

和名抄 簀ハ須乃古 麻上籍竹名之○天徳歌合記
後涼殿のきたのかたよりみなみへつきてすゑたり○
末摘 十七 すのこはひんなかりけれは○江次第
一ノ卅八 掃部寮立声人坐於簀子南階以西○掃
部寮十 聴衆坐立中床子於簀子敷○延喜式卅八
○帚 廿二 御ちやうのきたのこなたにそのあしまと
をあけて○同 二ノ七 ここに人々まてのすのこにしめて志門
すゝのね
すく

皇極紀 以水送（スク）飯○同巻 飽一口ともめなるにかへいて
きかひつ○落葉三 さらへ置きこその備りてまつる

なかり○アゲマキ七 松の葉紙すきて一つともなき山かけしき

に○字鏡 糊糝伊比須久○金葉 連哥 春の田に

すき入ぬへき翁かなかはらくちかみなをいさきや

○廿九八十九 曲河湯氣色として糊しくハ湯ちくおとく

いぬもりて言ちか玉へとなくえすちちかなハはゝからる

りしてこゝしらへて氣いもて○アテミヤ十二 源大将

ハ山わけくらりしけちもかかりそへおも臨かちちて

かのゝ松の葉をすきて云○同三十一 み紙

ちかれけく糊しつゝして湯してもちきへて○同八九

糊一口くらかきりなんハもちきハなおん○同三十六 今

ニあへ糊みちきしもんもちき米の糊へしなるハ

きよ○同十七 さいくわの壺の大きに物なとに一つ新けきを

きのこゝら一壺ハせて春色なる○同 同 二の宮にも

たてまつりてそ味ちきさまひて川 ○

すく 好色

名義九 すきものハさしらんて情ふくさうりしつゝ流へ

し○古十九 ちる所にちうろ家来ぬ時のかるやく

たる構ふこえてくちなれるふねの○拾五 高家ゝ外氣好

きもろんまちん人をそらんてちけるかハ思ひつけてさる○

あくみの色けるにいとせんそゝかりこいてふめて

つけぬ日ハなし

すく 紙二ス

拾遺三　こゝんせの人をわしててに仰こそおかいて何かにに
きりしうみちもかきりつ○保憲女集　こゝろしあけめそ
こゝろのうちのはしめのこゝろもすきしあかすしを

すく　鋤

古事記下　平八　さゝらみのいくる岡を加那須岐もいかに
ちもうちて須岐婆奴流こそあ△故号其岡謂金鋤(カナスキ)岡
也

すぐ　スキノ処見合スヘシ

若紫九　このもの鮮のいとすきひかめる○
○スマ十九　さくらの散るこの枝取付五八有○紅葉賀五
こゝちのもみち葉いかに茂るて○若菜下ノ七十七

すきたるもすにこゆる色をすこつきしなん○椰　卅
蔦さその真長　云　たきかへるたつゝつき　云

すく　透

深道海集　玉にぬの簾をすくるね毛の肉平春すし
いるとく人すみなるかさ○若紫二十　なきしる袋
みえけて○京良一巻　とものへのかけかのかみすき
てしんゆ

すぐ　過

菜行紀上　あひたをつくえをすきていく秋の籬つる
○万二　二十七　なきいるらんの袖かへしきこと玉のねの
ちとのみのなしもすることもれや○　仁徳紀　十三ウ　まみ

よしめくるを嫌疑○帚 四十八 ちるきぬしおけきこをみや
くハ座んと物すひこうしきて○萬葉初 やよひ紙
おやせりおもしハ京をめさうすハ心めかしきみわれ
○同 十九 と於芯のなりもくさすきりこん○玉藕
十二 人しも妙姫思ひのゆきもとに人の心をすゑ
きゝみりて来夜西ね秋のつろゐひ○同 十四 八月
廿日ららるなりとらそすさくろふ月のたゝれすもふ
きゝみ○イセモ 二十三段 すろこひを行みともとせ紀
ぬすいハ

すぐろく
萬葉 百四十一 すぐろく打付の酒ありて○常夏 十九

すぐろくをのかすやうふ○持統紀 二年 三年十二月禁断雙
六○続紀 十九ノ十二 任意雙六云云固令禁断○弾正
式 二十二丁 凡雙六者無論高下一切禁断

分ニ過タルノスキタル

過キ太リシノ過キシ

過スグス

過スクサズ 並スクスノ処ニ出ス、

すぐ術

夫木三 むかしのとしらる井の下にてひすゝしこゝら出し

紫の蘆○同 三七 たれさしてすゞろなるやうなる下草に

なり川すそあらふつらなれの詞○袖中抄 十九 云 あしの

のしそくろのとしき角くあいは女中立ならむ詞をいふ

をゆる○顕昭云 すゞろの道とはあらぬのやけのちし

きの末の生ずのなり思ふ字を略して すゞろとぞいへ

るなり云云 基俊哥 春山の霞のたちしらさるて

摘る菜野にあはぬきをかけて△云 万葉哥をとし

すかし詠てよくも云ハ 葉の末とぞ同し云云 之 云 哉

云しらるハ歳のをかしきことをかれをいふ事なり

云おぼつかなき事なりやとて葉かたはすゞろなる事と云し

いふなり 角とかなり○万八ノ 四十 春山之開乃手為里

尓春菜採妹之白紐見九四与四門 此哥をもて基俊

ハよすをしるしへしさとりしと手為里ハ手鳥里ノ

誤字成と先達いへるハ万葉の歌をよくみざり

けるにやあらん○夫木 三十九 旅 仲君 ゆきてよくみ

見ぬすゞろなる横走りたり人のこゝろなき△

コレハ直路にてよくおぼつかなきをよくみる

あやしき事はあやしむ

すぐ〜 傍

相 三十一 伊勢のおもて世の中に知りしたかへ有つね

をえりとおもえなくゝてさそはるゝいまゝ〇スクレタル
好ヲトナ十 心さしのふかくかへしかさまさものかはのけしきお
ぐれたる人はすくなかりけるへし〇古今序 此人々をおきて又すぐ
れたる人も呉竹の世々にきこえ〇花の宴 初 たいめん
かひなき事もし給ふへきかな〇帚 五 ある方
にくく見えしき組みにおもふへきと覚ゆれとしめやかなる
くちをしかるへきは

スクレテ 外ニ出ス

すぐ 人ノ死スルニ云

帚 廿二 あはれ侍りしつゝ過しおもへるはことにめでたく 〇若
紫 一日も過ぬおもひなしさへ涙のいかなる覚えしおもひかへん

すゝむ 勧

スヽム 十二 何ともいはれぬ色もとゝまるよろこひみたくへて竟
ぬ昔の古物語聞えたまひつゝ世にめつらしき

過 春ハスグ

古今春上 よみ人しらず 梅か香を袖にうつしてとゝめて
は春はすくともかたみならまし

數回 スクハイ

サカ 廿九 此字詞 ちとせの流をあまた川せをこえすくまつりて
てあかしくらしけ給はむ

すくよか 此詞 建字心ニテ 少シツヨキ所アルヲ云歟

クラ上 七十一 男を女所の君の給ひのまゝにすくよかなる

かゝる太宮なとのへたりとも大きなる首をもくようなり
白紙をもとに相手をしてもののふのみえてゆるしける
くらはくしけなり○芳 五十二 かくて御うちをも引つ
つきてこそつかうまつりてこそかゝるすくよかなる
起句なひて云 御覧しきゝなをし○サカキ 廿四 大
方のことしも宮の御なか不和になりける事なとをも
折ふしかくさまにむかしのたるとかく御時にて見給へ
かんなそさなんりこしくつきなれとこそめ
うへのおくて○宇治 十二 十六 融の大臣の霊ノ出タル所二
帝ハかくし給ひき事を申したまはゝおもふのかなしの
人ハ大臣のおとゝのあるほとにやうにきこくよりかひ

てんやうを思ひ出る○コテフ 二十四 こゝろゆくらのあし
時侍ものハゆめんさまねしかたちの中の氏のせき
ばかりなるをもちゐるなりけりて慰みて恨むる
けしきなり○早 十八 おもくよりあるしね山のけ
しきこそあらく○蓬生 四 其まゝおもはれなむ
あさましき物せちに人にかたりて
ゆきしかはやうにてこそみへ侍らんにはかれへき
こゝろけしき也なり
すくよかなり
玉鬘 一つなりのあくようけしきになりはてん
てなかきめんに叶てし○白文 十二ノ九 勁而健之○

夕霧 卅六 たゆくしくしとすゞろはしぬ心ちしけれ

○若十 下八 せき人のあくしうるなれしき大將

ミ世のよの人のうしろくしるたのなきことえ

○柏 廿二 なにと野ともなしけなくハ衆あひなる

きふハかるなりとひわいなうたくかなみて

やさしさ思ひはかりつる○同 三十八 こゝろ又ハいやまいや

うみなをあきらか成物を見せて我しりひし貴ハいとすへて

くらうなおりしく△秋 健ハ物ツヨキ心之○コテ

フ十 我れんなときくとかなかけ常の人ト

なりひて後○幕 卅一 たくらなんのきなし

とハらん成とせ○夕霧 紫の紙なくよるな

ものきなしはかはかしう人聞ゆるとても○夕霧 紫の紙

なくよるかなやて○紅葉 二十 物なれ世こして物なれく

葵しおもひ見そいとりるハしくすくなう歳とも

なりて○夕霧 こゝろうらやましくすくよかな

さらねんなうしひみ○若紫 増抄 こゝろ物そ此物

うらみつるらひはりてきこえんさもむらすく

よかみかひて我かいはきさまかしめへハ若きなるから

うらゑつうらえんよくてかゝえれかはれ○つき

女君 あやしう此やすしなるものこそなかいかし

てなくよかなるをなれは此ゝ世なかへかる紙

なくもて

二ノ十三 中みなくさめて出立て「中みなくさめよ所り
さらさんとて「なくさめて制せし大嘗の所出
くさめて大絵を中み出ちて
なくさめて
狭四ノ上廿一古本 前院の清手といひもなくさめ
て侍らん
なくさめて
桐 初丁 なく紛て時めきみな有なり○东十六
うこち心もなくさめて物しゐかく○帚八なく紛
て底なきうらのえへらひ朱つ秘おほよハさしう
さうらくあてなくて一つさきのをそ○桐廿四

清くちなくさめみへるゆへ出てなくおハしまし
なくあし
賢木二ノ十七 人ハなくさめてさるへき物一つをそこ宗
給へり○末摘二ノ七 思ひやりなく所り清心のま所
らんたへたまひて物も○古秋上 聿一てらむ宗
ともまた紛てきかのみならぬ紛なく紛りまる
○万十ノ二十三 ては以二小耳にあふみなし なく所りて
人の中みなは我為なくさめ○槿十四 車のあたり紛の
なくさめなく所りに
なくさむ
葵ケ三ノ二 見紛秋あかつハ年中なくさむころを○宇治

十六 太刀をはき目をこえむかしたかのしるしあらはにくき
て窓をあけてうち明し ○ 寄世 引うこのゝうるて
すゑ開きしもあくたすをゆるやうかきて牧をわすれんかハす
○ロウ上ノ十九 雪ノ段之 大将人 御よ あをかなかすなれて
かへるみ御の大ちもきり花のすゑの間て 深中納言の
うちまかはして同 ゆさ花ともあみたて侍りやうてゝ
え入たりけれ
たくみ
若菜上 引はてうちやきみかひつまてゝ生ゐなひなる
てら明ゆきてさ所しるゝて明る内方あくゝゝと我
ありとある ○カケ一 あやしきあるを御まへハおくれけり

うすゝいうこゝしふか御かくに成ありにふあろむ足をかへし
ゐるゝすくみゐまかくこしし出もん入せうあり
あやうるゝ
帚 二三ウ あらんあをちしかまりそてさるかしてよとら
の女かしみ明か心ちきてうきすくめつる○梅か枝にも
一のうゝさみの心にあしくこゝるみさくうみうきれ入る
すくめる
帚 七 あくめうゝしと思ひしうしくごうくみあらひ気
て明らひ明きし △宣長云 次ニイヘル ナヨヒノウラニテキスクナル
ニスヽメルトアル本ハ誤ニ書ヲ逼ダル心ナリトアル注モ ワロシ
雅望按スルニ此説ならしすなり

吹よくか

新六 谷の月 信実 木からしの吹まくあくる谷の松に

月さえて空もすみぬるこのあ

救ふ（スク）

鈴 十六 日蓮ヵ仏かちかき文覧のとみて忽あまねく

ひろく例となりて ○アカシ五 比丘身ひとつ何をかすくひ

すくはんとて

巣くふ

六 拾 物名 鶯の巣くへる枝を（すつくる拾）

すくふ 水ヲ之

宇治 三ノ十六 藤六カコヲカケル所ニ 鍋にすゑのをすくひ

まり程にいふ「むかしよりあらゆる仏のちかひありて お

ゆる物をすくはんとぞしるしたると云 △コレモ見比ニテ

マクマ心ニヨセテカ ○竹十ノウ かなひ給ふ有まじき事のなき魂

をすて給ふ命をすくひやハあるね ○竹十 やしまの

うちへの上にの世さまに落かへり給へ あさまし

うちてうらみなる眼目八ふたつ目にて み

かんかくす光をすくひ給まくからうしても生出

かかくかみ

すくふ

宇治 十二ノ廿三 此中物用にすてる事もありひくに従

ありける物の種はちを越て切かゝるところの程に

こしらへたりうきはあらそひてよ娘やうなして出雲○
日本紀九 陽とりてすつゝすてゝひ入給ふ折なりけり
ゑみてもやりかにくるえ入やうにきれハ○神代紀 二十四
以之救之

すくえう 宿曜
ニヨツクに七 あくえうはミ人にかなと后になり
ほかなるひて生れぬかの中の事なりハ太政大
臣にて何をきかハむかしをと勤十あらし○かく
蒙益土 あはしハ人のつくしむへき事あてあるまく
えらかてみても何そくのあしひて何色慎○桐
二十三 あくえうの一りし道の人にかゝるへきま

同し中ハ○孟津 廿八宿 九曜の
行度をもて人の運命をさうさなれ

すくせ
後撰 恋三 紀内親王 津の国の浪にはなしとをしことこそ
あくてやかくゆのなかころの○奥儀抄 あかな
ハ枯る藁かとをあかめてなりしる
のみなかあかハくなりつくとをかりつ○続後撰 恋 相
あくてあるくもしかのかゝり浦ひけるかうしかく
ものあへよをさん○月清集 恋のよて思ハさる
らむ類をめつあくてもなく火のなそこ浦

すくせ 宿世

棲霞 三ノ上 あはれなりしの霞殿なくなりても足もとも
いみじきをしてなくなりしかども又は〇ヲトメ 二十五
めでたくこそ物のあはれの吉位なくなりにけり
やくたち給ひける〇伴一同 稀なりしかなしさのみけれ
きこえけり年頃へおもはるゝ一事ていたり
さしけるなくなりにけりのたまひてぞ泣かれけり
くすり〇伊勢歌集 二十六 いにしへのかよひしをとこの紙
すくせあれど雲井（大 心しなかつる井）ならぬをなども見せやらで〇同 同
雲居のよそにかはらぬはかなしさ世ひつゝ人はなくなりにけりは
うけし物たちて〇大二 行末のなくもなりける人
も君のあはれの身とも思ひ給ふ〇同 行末を

あくまで忘れつ昔より契りし事をおほけなくや
きこゆ〇無量寿経下二 宿世見諸佛〇帚 十三
宿世ねなくなりて〇帚 二十七 世の中を
いふもの言ふ事は一つならず女のあるまじき
うしろめたかん宿世ありける大方此事にも
〇スクセナキ 同 五ノ十 返シノ詞セんよりスル災ニ雷ナリヤメバ神ニカニ
上達部ナト来ル 大方此てにはしくさまざまにありて〇カケ
ロウ下 あくまでやかでいさかひにたゆたふに〇若紫
かく急ぎ物しけん思ひなく人のみすくせそうし〇若
葉 スクセニテニ 世の中をあくすゝましくさぐりて
〇スクセノヒク方 大かたのひく方何事にも〇スクセツタナキ 玉

打過す
花ノ宴 二 世ハなほし打すくしてかゝるすさひをこそ
あはれひやしなん
打すくす 世ヲスクスヽ之
紅葉 廿六 世君の御ありさまのいとゝかしこくて打すくみ給
ときハわかみかど御心ときめきを ○ 桐 十 かくなりゆくハ
をんなひとりの御ありさま一ときハにとりかくしつゝうちひらきて
めやすきかたにさしまさりのひとつなるを ○ 同 十一
若宮の御さまをいとゆかしく思ひ中ハなほすくし
たまふを心くるしう思さるゝを ○ 葵 七 さしもなきさまへ
かゝる心のおもむきにハすくしつゝこそ例のこと

にはハおほかたね御心にあまりけり △スクルヿ之 ○アカシ
二十 ぐみゆかしすくしてハおきかへり ○薄雲 十四
ゆゑかくのこと深きを打すくしきこえんと打わさなる ○ 椎本
十三 帚木 にハ打すくしやしゆくへハゆくへにさすらへ
しめひて △サノミアマシタマヒリドヽ之 ○紅葉 廿四 さきこと
聞えとてなほあさましき心どもさへすくさ
なハとて笑をさかへハ ○ 同 二十二 ゆゝしきおもひ
とちきえつゝてその才をひきおもしろく
しはへる ○ 同 二年 清筆 給ひさまかへり
好色ものゝうへハえすゝきさまかなはん △
好色打 ステヌヿ之

過す

宿木 廿八 スグス 文なとは綿のかゝりて過ぐしてあらんとて物させ

てこそ○梅かえ 廿一 へいつも見なれて物なとしたまひてあり

わすれし折ふし○帚木 三 ハと聞しめしたらん事を一ツ

二ツのふしは過しぬへくなん○帚木 三 スクス こそと見る

ん折あるを物からんをきしきこと見捨てなんすくしては

らん中 二 こそ○関 スク 東 けふ物んこゝろあるものあ

うしなひはてゝ世をすくして○ハシ姫 廿七 今あらは

かくて世のなかをたくらきすくしてきたる○東屋 廿六

尾花なとかゝる物しらぬ猶は御身のこゝろにはすくし

玉ハでたまのすゑ秋とともへ玉ひて○和泉式部物語

下 怨みかはしたまふに このほとに 物をひきたまふや七夕つめ年秋

前して音の河原をおとなひ人しは とゝあまりしき

ハ此人と物などもしけ ハさなからうしてよろこひを物か

しかりて○乙女 八 さゝら八物笑ひなるすくしはてんとく

ト川を越えすなほるをなしたるなりつゝ過して雛

手柄をとらせ給ひ世にふりたまはゝ○桐 四 あまた歳ハ太后

御物をすくしてやりてたまひしを給ひて○須磨

さして世にハ二つのかたかたのわかくいはれなく過くし文

を例の所方あハおもてうちね所なめりこのし○須磨

二十四 とをせみへるハなくなくなをしてすくしつけなる

さ衛門て○須磨 十七 かたちかりのすさひかゝで

是なへき事をさらにさしてさもなきとてなん也なさ
也けり
おなしさま
桐四 衣いとかうふ成ぬるは宮とくさけ也
葵 さもんとはなやき給ふ
おなし心
若菜 十五 世の中のはかなきこと めやすく侍れおなしく
て侍らさんとその御ありさまなれ〇同 九十二 かくて
おなしことなる筆つかひ御手なれもはかなかりけり
なり
すゝしかるへしん

かゝるは
本過す
紅葉 十七 葵のうへ 四十三 ちかうなりぬるのうちあはれ
ますほは本すくしきかうしきさかりなるけはひなり
てみえたる
すくす
桐 三十 源十二 葵 十六 女君はすこしおとなひ
たる程のはてにおはしますはみなわかうなまめきた
まへる世のなかは〇権 ちかうなりにけりすくる
しるしへる御経のありさまは 今さへおもし△ 鬘 のうけ
ひとりなり〇ヲトメハ 世源は掩ひたるひかりをも生

しくなくしつつ忘れぬる限りなるもえの出て
あこかす
スマ 四十 えわんしけるをみすらく覚えまへし〇
乙女 廿二 武部卿の宮みもんとして五十の御賀ひ
侍るを清盛のてうるにのすてん覚しこそいくる
みねをとりけるこうし紀事とともそ
覚しまく △其ハ、二檜葉カタシトナリ
すゞしくて
俊中 うはかれぬ歌ハあくしくしくの宮地の
其ハに 大和物語〇古事記中ノ五十五 さくめるに
アフミ
路江之 須久須久路にかはるもや〇横 四ノ中廿

やうやうの出入りける方へあくしく程ゆるさいけれ
けしきみなれつるをかしきかへる御その夢みなれ
こうるあいろうかしき〇竹一 生かりやりかはる程を
あくしくて大きみ成まなか〇六四 あくしくとも
しつつやうしてなくかはりうなゆりのなれんと紀けて
この時しなく〇
すくしくしう
梅枝 四 臨時祭ノ調楽ノ次ニ 松原ハ立ちこしおりつきしみ
いかなるすあんへみかあかんあくしくしうさしあけ
うして出ぬるやあかれ笑へるを見え〇ウキ五〇清うぬ
うの大きやう御み見え又あくしくしきつとて寄み

よりふかくはじまりける○帚 四十三 すさまじく
しける心ばへをしるしをかしうなひたりける○梗 二十二上
二十 帽へいはさ二 十六 よりいひさまおとすさまじき
くまじき有さまなるをいふべきこゝろにてあらぬ
ほどうし
諺 風流タハレヌ之 ○アゲマキ 十七 すなはち八弁の也かりてよびし
めでたくてはかなき事もしのびまがひてさたしく
しうかへ至て出かなひて △考 此二コヽハ艶ナラスモテナス
ナリ○搔 五十六 春宮の御心よりもさらに
すこしかんあめるとすさまじくのふひてしかも○
名誉 十九 声ハ御心得てかなふべき御業なり

くしき律師にて○蛍 十 蛍の光はおぼえて
むかし○夜明けきなへる錦も○紅葉 九 さゆへき事
あるは御をやはらかんとそ嫉しくあらんすさまじく
て出かなひぬ○コテフ 二十四 赤き紙のうちはかはいかう
あはすゝき夜あいとめてまうかへかへ至○同 十 中
将はあさましくて思ひよし○好色ノコヲ○
初音 十八 中将殿をあさましく夜ありやまし人あはれ
しそんをかん思ひ至てし○竹川 四十三 かのことを
方あそ奏へきてこゝかて傅らぬてもあらんはまそ
くしくも中玉ひて
すやつかしう

玉十 忘ともよしの川をたえすもひとしなきを西は何り

すゞや
てんや 鴫

山家集 ちりまちたる花のさかりに実ありて秋
この色をこそふかめん

すゞめ

夕良 初 そのたち流れ すゞめあそ ○ 末ツム 九 衰ちも
る住居のすゞめなしすゞや すゝ[illegible]て 初[illegible]ひ
つる事を云 ○ 椎本 いにしへなかりし浦子の すゞめ
あそ ○ 夕良 九 あそひたち おどろひたいし すゞめ
流れし △スヽ井ト云にゝ何[illegible]いはるゝ何ニテ字作流し

いふ同しスヽ井ト云ハ音便なしるいへる成へしイニ
ミヘニイハユルスヽ井ニハアラススヽ井ハスヽノ延タルニテ
コヽニハ叶ズ

すゞめ
後カケ上 すゞめの加ふる所なれは揣[illegible]る通い
ぬれ 候なきさまひつるてを ○ 同中 なてゝふ人の
なすゞめあそ 世ハ無ん ○ アケマキ 廿二 [illegible]の流し
て所なれさゝあそのうきなりし 山形しの恋そのこ形
ん方ならぬまる ○ 同 二十五 かくろへなふへき物の
くまへりなきひまさあなさは ○ 蓬 塵ハ積
もとすなつる事流きこゆるなしき流さまる

みてあらし篇しのみ○岩崇二つころもみ代はは
すまふなれなん○アケマキ 宇九 打とけてもすまふなれ人
ならぬのこすまふなれ入色事なく
すまひ 拒之
クラ下 四 あ川きせの中みちすまふ心地して○帚
二十八 まうくをしさすまふの業すまふへあしころおぼき
て
すまふ
大鏡 六 アラソフコヽロ之 此君舞をせさせ奉らんとて習はせ給ふ
にもとてもあやみなく御舞すまひなへ侍る○椎姫 三十九 かく
それのかしゆへあへりすまへまへすまひかねてやみ

かひなきた○イセモ 四十段 此女をおへやらんとす云
女もいやしけれはすまふ力なし○同 百一段 なきよ
ある人のいはくさりまさにすまひけれども
てもすまひかねたりけんと云
すまふ
初工 四十八 大将の如くに百姓使ひさまたげかひつ
めたりいはんとをはすまひし○遊仙窟二 不敢
推辭 スマヒイナハ ○同 云 不自禁 スマハ ○紅葉 卅八 むかしもすまふ
をたうらひしろふかしとみ中将の帯をひきとて
ぬかをかへすに○標 六 まなひたてまつりて太政大臣
す事かかな

すまし　人ナリ

四ノ十　雪山ノ処、さぶらふのおさめかうしろめたきにおほやけ人すましをさめなどしてたえずいましめにやる　同○禁秘抄上ノ中に釜殿（カナヘドノ）運湯須麻志女
女官二人取傳フ

雅言集覧巻之七十

須之部下

石川雅望著

すまし の事

実方北方ニヨ　久二上　この秋山里にてのしかふ人にかへすをかひて清すましの事ありとききし人○
久二上　故とよおかしましし時に女歌のたまはく
の清すましのようありて清口いまかひしかとも
今は女たちもろもろとてあそびするはさくなりしあかん
らひてとものしないす

すゝし

後中二　只御手をとりはなちて神仏にこそ申さめし
めぐしうすみなん○アケマキ　十九　御ぐしなどもまだしく
つくりはなてぬなまめかしきに○荻　七月七日に来
ぬ荻浅川に御ふみしてすかし大なるたらしめき
てこきうみなる出たる小人にて○ワカナ下ノ七十六
女君をいふ御身もしたまひてといふやうにても
かゝる絲し○荻久志一女川竹にて御足すまし
○すヤ廿五折ましき御心あり　の程といふおりしも
さねひきいふとて　御いすまき
たすけ　清
ヲトメ五十之家の名も　たまへし　座り名の声すきる

へきし岩をくだきてたまへ
すけ　同ニ云フ
たく　二十七　一つきたけしよしかて来しきたるを
や○古語に小野たか古かこころざしの助にまうすわけ
る時に本との文めす○荻積　西　大将は故中将と
同し者のすけをもいまのすけにといふ
すけ
和名　造作具　楷柱　和名須介　支屋敲也○盛衰　廿三ノ十九
すけ　今テハ世ニイフツハリニ
平家と書て平やしらむ家のかうひ倒もさん
すけは助とよひて柱の代に大盛米をもてさし
へ出すてとらし平家の大将軍にかしめへる権

右大将落ちたる右大将宗盛の験にまさしきかなかくん
まいらせんとて「ひとしやにる宗盛にかなさるく
らん様ともなのむ助を落しそ
出家
書當 にしくさきのおさしふとよし移ん
くごろみつらしひ侍りけるハ○回年之ねとらしさ
けそしめひつへかわきこめしうらら添○続二ノ
下廿九 御さけの前にも参らせかひぬへき御心
まりけ
さげける
秋 舟ノ櫓ニ付ル縄ヲ云之 ○ 十二ノ一 ともやそゝかけての

ひみさけゝるその まさけさま 鏡おハ何ぞかハ御ら
むぶるや落入まるらんを ○ 一ノ二 けれとも 皆おも
の緒さけきたま
さげ
修上 天女おりかすりしてうちかりぬり板さる
をつまさけさせてのおりぬ
さけ
六五ノ下 琴の音を弾ける人の音かれハ空とそい
ろ出てをくもすくべき ○ 古 十七ノ六 先難法師 秋風松六
こやこそまてひとさこのとへおとつゝてしハちこその さすけ
て風に ひきける ○ 要八 松の音を琴(要十三)にしらせ好る

山風ハ嵐のはげしきやあらきてふくらん○重四 山嵐が
よりくる月はすこしはあらけて風のいたくふきて木の
葉は○古今 あらしふくえいらむ沾ハみねあらけ人はよ
の中にふくへくあらしの山の形

あらけなく　人ツキワロキヲ云フ

新六 一夜半 行家 みちのくやあらかりけるものの人あけの
なきたえたえして人あらしるまきあ○桐九 さすかに
しもあらそて形し物こそあきなりそはこなかひし
くるまのあ○ニ工キ 二十九 東男ハあらさんこれもあきなりはし
あ○ニ工キ 二十九
あきあらしあらしこの御物のつけて男たちの女たちは
あき形しはなしうはひてこのへあらしくたなよ

あはれなき人ハ○カケ 下ノ東ハ四 一の人ある山のとけ
あらそ親たちはるあらなきあけをるかまくあけ
物思ひもして御すがたみ男ひとりよせまよかしあけ
あやしの人あけなしとしいほ家○床夏 二十五 この
形ありつのあき雲形ありけてなん物はなかにいはは廃
のりちあはうるまてみかんやうのかみ○乙女十二 よれ
ひたちこの母そさんのおとうとはこなたひとし里はあけな
りて身中内しくなんあかなそ
あげまき　一二三十二
ちこけにあまる口つき　新古今　ゆよらあけまきある思き
思ひやうろうこのひとつのひのさきうらみあらはしめて

○葵 口打あけて △老人の寓ノスケタル体

すごろく

平家一ノ三十五 賀茂川の水。すごろくのさい。山法師。是ぞわが心にかなはぬものと白川院も仰せ事にてありとかや

双六

万葉十六ノ十七 一二（ヒトフタ）の目のみにはあらず五（イツ）六（ムツ）三（ミツ）四（ヨツ）さへありけり双六のさえ ○ワカナ下ノ廿一 すぐろくうつ時の詞にもあかしのあまきみ〳〵とぞいひける

吸

土佐 たゞ押しあゆの口をのみぞすふ人々の口を押しあゆもしおもふやうあらんや

すゞし

拾玉二 おとたきの流るゝ水のさほ川の川風にみな秋きぬる よそにさへ[illegible] ○同三 すゞしきの流れや そこに[illegible]

すゞり

大和物語

すごし 凄

をとこ [illegible]

[illegible] ○夕良三十三 [illegible]

すごけ[illegible] ○三ノ十八 [illegible]

○赤染集 二 秋風はすゝしくふくよるのまのうら
ころ月をハさえしもと思ふ○新古 西行 物思へはかくの
そゝのつゆまに落る涙のあとは声のあはれきく夕暮
○サラニナ 九月二日のよるてしてき四日の入ぬるその比より
すゝしく覺涼しかりけれ

すゞし

九ノ十一 ○六ノ二 ○第二 ちりぬへきしす
ことしハうきん○桐壺 女きみハすゞしきく
かへる所しまゐ○たち四 そとより下枝御前へ流れん
玉ゆらの好しみえしや
すゞしづ

たち八 あしつゆうかすまを見せつゝるる○夕顔 十二
あはれのこゝろを思ひしほ

すゞし 篝火

後撰 三 人のよとみすゝふつくるみともみてよみを
名てそはひもそるをすゞしあき思いつくさ
すゞしくなむハすゝうけ物りて又のあしひみつらけし
ゆる丁あしうのおもしりさのんハつらくかゝさとすゞし
みあきやしく夢そ取しをゆ○口力 業二十五 山もいみすゞし鳴
みあれゆる所の人あらしり○ミノリ 十 二の毛めし
吹あるう百名くさまみ○たち卅四 うるる人ゆうえんみや
すゞくそうけるあり入もの○末公 二十四 あともの

すだく人生のおしむ声ともなくさわぐ時はあし
くるしむ時さきにいたりするよのさまなり

すゞや
齋宮式 篠科食薦二枚○和名抄ニ厨膳具食
単 須古毛

すごもる
貫之集 鶴のおもふらんこそはしけれ濱なる千とせ
すこもるつゝみおもはく

ずて
スマ 十五 涓川ふかきわたりきよしなかれの中
たぐひなきさまて○拂 字八 遂ふんをて無かりけれ

流をまふそへその秋の時分しやまる

せごす スクス ノ所ヘ

すゞぶる
愚管抄 三ノ廿七 嵯峨ト淳和トハせうとなる その趣おハ
しけるとて中々何へて何ゐ

すゞしけ
松ノ花カサ 歌せそれを思ひしぬ絶ハすゞ宋所しかハ公孝の
羅とや朱らんとふん○第 十ノ十二 玉鈴すゞ和ぬ
ひてふる宮の沢をこえてふかくとも玉鈴△列
卅八巻 ク ノ 心 之 ○万 十七 すゞよりきこえてみなし
山ふかくこゆるおの声をきゝつゝ

捨人
巻下ノ十八 世をそむけるこのかみにて 捨人の袖のしたをかも
めかりたまへしを
捨書
手習 二十二 手習云 とかく紙にかきて ひとりごとにすさひ
よそ中にかきつけゝり
すて衣
宗いまた世へしたかはぬ人にて衣とりかへての衣とも
あつかへりし
すさ
浮舟 二十 うきかたの花さのころつくしぬしてあらん

ちりまかへる ○ 四ノ一 あそひのかき物 みきもあらぬ人のす
さつるひよきすへき ○ 大和四ノアニカリノ股ニテ一ふりをたええ
あそふかもんきのみをもちいましかは むかしも
すさか 秀才
文ツ元 人のつかさをもてるものに長き四人
菓子云 すさかは宴の中にありて云 ○ サカ萌
学生 まうとを 法四人 すさいかうかへる
すさひ
ヨ廿三ノトコロヘ出ス
すさくみん

古今秋上 すゝく程の音に聞へしあはれによみて
東なる声ゝうらの花すゝき招きて
おはしけるなんなり
すゝきは
カケ 一本すゝきのさかりなるはまてすまはせ
しけみなりなかなんとかあるにこそ○橘松丸さかりかり
野色ほよそねかなたらんとさ幸しけなる
春したるこそ○独 三年 中しなめさかりいろしんとそ
とさすゝしけれ花すゝきゆれなる紫の女
の玉のかとおなき○同二廿三ちひさき玉かな
やはすゝきも尾をかけぬ花さすゝくさて

しつらみへくさかりしかのみにみ○同二ノ下ノ十四
かくれ人の心くらしは穂すゝきすゝきかなかりしを○
同五 春のすゝきすゝき穂をかひ之へり土は其の
月もところからるを露とてはしる一気さむかた
すゝきとてて○宇治十二ノ廿六 風吹雨降 さゝ乃葉
ころもけちらに○盛衰十二ノ十八 さかりの内の作の料み
御湯なりれはをきしかしとなりしかまれこのはしさすゝ
く見しなすゝみ○枕六ノ廿四 時雨比ニ往テ云ヨマデカヘリタルトコロニ さしもと
宇治にはさすゝくはんを作りてなりし十月さもさすゝしーの
かけの事かはなくの紙はきしうた云云○蔵人ホニ
をかりさらさすゝきそへもて見けるかひみきこそ

使とてはしらうるをいふ人のわかちなり○紫日記
巻三　ぐしくまでさらよふとまゆくうちの節に仁
かうちの年さまじきかな○同巻七　心よそのみおの
つくらとりしみなかねなしきわたらん人ならん折をさ
すさまじきまにかきひいて○枕一帖目をたてまつらさてを
よこめかふべうもあらずねをたてながら夜のすさまじうは
しらんやすさまじきにはすさまじきなるを○枕　すさま
じき物　ひるほゆる犬　春のあじろ　三四月の紅
梅のきぬ　児の亡くなりたるうぶや　火おこさぬ
火桶すびつ　牛死にたる牛飼　博士のうちつゞき女子
よしうませたる○方たがへにいきたるにあるじ

きぬすまして節分はいとすさまし○人の国よりおこせ
たるふみの物なき云云○人のもとにわざときよげに
かきてやりつる文のかへり事いまはもてきぬ
らんかしあやしうおそきとまつほどにありつる文
たてぶみをもむすびたるをもいときたなげにとりなし
ふくだめて上にひきたりつる墨
さへきえておはしまさゞりけりもしは御物忌とて取
いれずといひてもてかへりたるいとわびしくす
さまし○又かならずくべき人のもとに車
をやりてまつに云云○さてはおりしすさまし云云
○除目につかさえぬ人の家云云○すべてうちよ

こゝろと思ふことを人のこゝろにやつるゝなりといへりき
なきさかりにはいかゝきこえむかしにて折おりゐきなと
あるまじき人々もきゝはいらつかはしけり○又さもあるまじう
時め紀にも所々にかよひつゝあやしき人のおのかいへもし
といひまはしてむかしのうたひたてゝいと感しつるき
こゝよりしておほしきこゆる○物のあはれの扉にいたしもと
思ひそらんなとよりてまいる人にたちもきこしつるを
さらにかく感して思ひたまへらるゝにふみをも書てつかはする
○きよかやうに思ひなさるのことわりなりけるにとの使にまいる
くはしきよしをきゝね○たゝひとつきこえ華玉外つらうあるを
てあはれにてのみあはれにて拙くあさしくすゝめすへし

思ひくはしける事にいはしめしるは與あるまじく思ひけり○
心はさもあるへき失ひとゝめきゝしてきこゆる
みなるすゝめらいは珠にすきさまし筆なくて四五年
まそうらみやのさかきはきちかな○おもしろく感し給
の餘さとよりきこえはむかしにおとゝにたよりあるき
なへきに○人のおやとちのひとつ族しへりける云
しいはすの晦日のよ雨○一日さかりのの精ふえの
けふかしとやいふらん○八月のきこゆ一のことも
○スサマシクノ義 △不興ノヤウテ面白クナイ○不興○何ノ
興モナク○興サメテ面白クナイ○何ノ興モナクタノ
シマス○橋一八ノ宮北方ニオクレテひとりとゝまりて

いとゞすさまじくもあるべきころかな○幻 なるみにもよ
きこえける人なくて菴のいたうあさましうすさまじくなりゆ
こなたにぞ○二ノ 架の菴よりすさまじくすさまじくなり
ぞかしこの物語にして見ならべくたぐひなきしみはけ
いとたゞみなみの雪散おぼしきこゆる人の部ありなん
みえてはいみじうひなびにたるをみ給ふにいとゞしくなりまさりてあはれ
なくいんげなるを○二ノ一 きこえましきものゝ○書本
けるを○妻のありさまよ○男のなくなりにけるぞ
や○出かけ給ひし火桶○かくて火にかなふ
こゝろみたまひしあはれとこそましてあはれふかくなりにき
まし○たなばたは女子うかねてる○

○半みくつろぎし鍋○根ざし○なる二十内
後の世ひとつをまたまもるべく○桐十八 ゆゑ
あさゆふにゆかしきものときけいかゞ○手習 廿二 あさゆ
をそへたるたねおくふかけなるけなる思ひの本のさま
にあいはずあさきまじらひ思へるなかへかはんとする
を○なる 卒 藤のもとへはものうきにいよいよふかくなるは
すさまじく覚えしつけうるさきは△宣長云不與ニ覚
ユル之○末ツム 九 物思はしくけしいなきさ○てあき
ましあかりくしぬ○同十 君はいふかうしうおもは
ねたのうらなさけなきぬきさまじく思ひなり
あはれしうらけ○無名抄 三 火をこそ恥は心の

何紀して人下出むぬ緒出で申しの本や○古序小注

田川うきの大君をこゝろの知くへ流のをしたりもち附

ふ玉の司たいとおろ推こうけりとて書うけるのしへう

ゆゑとを すゝきすゝの方出のたうれめなりける女の

かいう書とうらゝめるなりこゝろもあるて大きみの何ら

出すなる○蓬ら隣りしきりんや紙こゝちのくなれ

うゝふこゝのふくゝるめるみふるてよくのめ風もうく

るすりとかは出さすしきあるを出あて歩うめ給ふ

をあしくいひきくひらけ給ふ○ワカ十百八隣さしのいら人ふ

出ぬいは出さすしく○宇治二 けうしてこゝもてお

川ろさのいひうおしのこゝろあるたひともふ出さま

しくれうてひとり立ぬうり立こゝれうゆそて何ぬ○

五十一 もてれしすきぬ風しもうぬやうりにきよう

ひゆかいおもとはむとさすてさまくみさくし復うり○

椎本二 ええ集うぬよしのこうしこすやなりむへり宮

孫すさすしとはしへりるみ○ おりうね緒とい宮

の本 月の光う清く出さすき夜 天子獣ふ段 又秋の月

きくゝすさすすしき明るのみ 弄玉の段 照らうの才

さすきいは古云のふみあくひ出稀ふへいう紀

出ぬうふ 始姑 故 クスサミニ出

出さのちぬうこゝと

和泉式部集下 旋頭歌 出さのちぬこゝりとかはのすとや

為紀朝臣かよしくなりかはりくさきとこそのうら風の秋
あきの夕暮
○ロウ下二　時雨や猶きえあまるゆきの一叢西乃
雲のきえみはるかに縁をそへらん時へかよふ
さそしめ　スツル心
紅廿四春宮伺　無数心のこゝやにてむくきし時そへ承りけり
むへ秋をたちまちへりとも見きしより忘れんしるみ
ひとこそ知りしらすらしる
あさきみちて
撰集抄上　むかしの極安ノ段　權般の中納言顕基ハ君
にめてりて一とせの流に数ならん任すして候り

おもひはれて事は修せんあさましき事もよりてむつかし
煩ひてまかりしと云○業苑根合廿五　内の心ハあまり
しられ尋よひうちおはりしすこし人をあさましき事あり
いはん
すきめぬ　不愛
元真三　足柄の山のあらしの玉たかきりふかん人なしき
めさりけり○同二　川社二　○後撰下　谷のちかみ
はかなく業にぬ夢やなく夢ハ人のすきめぬ○
同土ノ第三　物云ける女のいつくしかりけり色にて
つかはしける　是をこそ人をすさめぬ事とて
ありをなく思のなりけり姿を○後拾　月をとめて

とふ人もなきあやめ草あやしく一節のすゑなるさまなり
○古今 大あらきの森の下草老ぬれば駒もすさめず
かる人もなし ○加茂保憲女集 なにごとにつけても
かみ新出なりて憩ひぬる節のすさめぬはかなき事
○意宮 とも意解りや法ならぬ此はずの新節
末はそめたまはゞ老ちてねへし ○元真 一節ゆへて
ちるあぬ深山あやめの斯もふみあはれは移や
うらすし ○拾遺 知家とも節をすさめぬ
あやめ草うきねのこころをしらぬ ○修撰
無名抄 序 ひとり此事をかくしてなからむ
み年月を知ても年末も老なれば

世の人も又あやめもふ事なし ○同 枕草子 七ノ六
あやしき花もなに一つを寄のうらみなきにあやしきもの
あはさりき ○花宮 七 頭中将のすさめぬ四の君
構ことなるはらしくて咲しかな ○正家 ときては清墨
みなれぬ身ともて ○谷川士清云荒ノ字ヲヨメリ スサル二
意カヨヘリ源氏ニむへ秋をはすさめぬをりもしき
とりなしがふ云アバレテノ意未サムルノ義ナルハ
ミ風吹スサム雨降スサムハ吹モ降モ荒ミ衰ヘテ止ン
トスルヲイヘリ蘭降ヲスソリトヨムニモ意カヨヘリ○
新古今 秋下 西行 松にはふまさきのかづら散りにけり外山の
秋は風すさぶらん ○野洲云 風すさまじくふく

かはりなくて [illegible]

すさむ

宣長云 すさむは ものに ふけりて 心を なぐさむる 業を いふ 業なり

俗に なぐさみ業と いふ 意なり ○ 萬葉 十七

秋の野の 錦に 出して すさむ なりけりと 見る

ちる花を すさめて みる 人も 花の 心を 惜しみける ○ 續 人の物

すさひ 出て 心の ほかに すさむる に なりける ○ 金葉

(古今 十七) うらひ 出ける 人の すさひ出 ○ 同 四ノ九 あるあ

つらきは 立 めくる 宮心の すさひ あひまり ○ 拾遺

あはれしと 人の 心の すさひ出て 今の あはれ を あ

すさふ 花ありける のちの 心も 明日 ○ 玉 ふる

ひとさまて ○ 帚 五 おもひ出たる まにまに 人の 物 ね

みれを 人の 事に あらむ ○ 源 ウツ 十一 千 手 ある

すみ ぬべき すさみ こゝろ ○ 堂 宮 さそ 總 角

諸 なる の すさひ あてあり しるまし ○ 椎 二

下 笹 宮 詠 もの の のしの ひや みの ほる み

かはる ひとつ 曲 を 出し 夢 吹 合 き 筆 よ

きる へ 見 たる 云 笛 を 吹 つる の ゆへ さま

へ 同 同 し 節 を 聞し ひし かに 猶 の 外 に ある

つまる に 中 耳 ひし さき なかし ゆ 手 つ さ

ひ さき みひて たゝし へ 居 を 同 しふ ひと 大 納言

の 春 して 聞 を さし や ちき 加 へ 出 て ○ すさ ある

深山よりその すゝきにほ麻のさころを見かへりに行こゝろ○
夕霧 六 如何しても すゝきひきとるか○ 未以ム丸ノオ 木
さひしかるし ○ 八ノ十一 年すゝきひ ○ 三ノ十三 きこえし折
へハ三云 折くの行ふきの一つすさひかと覚きても行云
あさひも てらるをうけかひたんよりたかくはかり思ひ
つけられて ○ 年 九 たてきしときいたのあさましひあて
○ 六 五十一 三 ありしきはかのさまひたまうらんたて
おもしきありくてれしかり ○ 大 六 たゆつきす
かれつみてきと吹けむ人のうへ御事はあかすもあはれなり
すさひて吹きぬ ○ 万 五ノ十七 朝霧の吹たちたれぬ
る月草の△ スヘム之 ○ 新古今 四 摂政太政大臣 良經

かねらちかるよひもこゑのすむ吹かへてたゝ人庵の松
の勢△コレハ吹ヤメヨ之 ○同 夏 式子内親王 家百首 作
万葉もすゝ月のころにはわきつらくね秋の夜
○ 雅平 ゆるもおもらて 参あらきに山里の峰すき
秋くもの空○蓄紫 罕一 一のくへまよこしの紫を 御あら
秋の年たてきらこすさひめかへて○ 鍛葉 六 物もある
すゝきおさひ事を 出もあそてかく ○ 逢 六
好る物 待あるすの上さひ事ありてこそ つまし
たゝ すさむしうらすさひあれも思ひ消くさ
たかすきしほも○ 宗祇説 宮ちきく 松本たるかん○
いつまて風 好 荒き何かわり 春の野付山のそこそ

みこつあまりて風吹ともも妻ハきこみなり　○かくれも
すさそ　玉葛　○片思ハすさやとはやむ人の心
へり　○大あらきの　玉葛　○あきおりねきの
すひ川の仏として人をうらみなはきさまの方
や　○いつまでも不用心なり　○すさむハ用ひぬなり
○又筆のすさみ　○口のすさみハ口すさみなり
○女をもてあそぶハ物すひするなり

洲崎

浮　雲二　山の方ハ霞隔てなきさすさき紀州へ
なのめなきすさきの所にすまぬかな

好スキ

井佳私　六七　百首をよみ民部卿入道に見せ奉る
井佳をもとの山の谷にて　玉葛　山法師の千りあやなし
人に詞をつかへてつかれる人ハ此日ある入て井桜
て人のる来もあり對面して尋何ともあるなれ
とすさめなるハ谷の山法師のやりことかの事
西の方て集りて　玉葛　すさきのかはやさしかり
き　○土ノ三

好スキ
○好色

ウス雲　二十五　此所しへのすきしハ思ひやりなく絶しぬの
あやすきの仏張はけりし思ひかんとやしさすゞ

好通り　スイ

横笛 十 かしはの御すきには人ゆるしゆへこそあらん
あはれなる○明石 二十 世の中のすきものにてなまめかしう
くちをしきなとすきものともは覚えしことゝも
○明石 二十 くちおしうなしよのつねのすきまことは すきさ
のさ侍やうに覚えまして○同 二十四 思ひの外に思ひ念る
んとは御心このみはかなきすきまことしきによりになん
たらされ すきかましうすきことの見なれにしかりける
すきかはし
帚木 三 すきかましきあたなる人なり○藤袴 四 人の御名
を朝かほのすきかましきにはかにも

好

好色

夕霧 五十 物聞えすきありきけん人を○紅葉
二十 すきものなるこそ思ひ定めてあはれなるなれ
なるにこそすくせにやかたき御わさに 物なれて
○ 土ノ三 若菜 たえましき 藤の大臣の道長なと 好み
侍るに此いろこそ人わかれ好みる同しや 雪にも見えむ
こゝち待けるに人わかれ こそ 人をは思ひはかるゝさして
かくてはなきを好ひける程みちなきこゝろにて △
とも好きこのみ人々 若葉にも好みける ○ク二 中ノ二 △
二十二 若なのすきたる人の思ひはかなくあさましくすき
てこゝろはいへるもの成好みけるよそうしなひゆる
しるしかなそのきしものゝ人きこえめてありしかな

たしかにこしを

すきしける様

菅家二十　北の國にわかれとまる節のうちにわたりける
を古きしつる様にかけて言葉の様につまれる△
郭仲公　遠へまる袋結文细にむすきたる袋結△
河海に引しける万葉の寄いう册を改

過(スギ)て　超る心之

玉篇　辛　中ろにて七月に過ゆり妙をよし○楙　十九
清心にまひしつるに言　北にすきぬてつきし紀所おりまし
さぬ威へし○叢雲　西　女とうける阿不たんの程
をうこえり御んて通りてし笑ほ平しのうちに

出たる

過　前後の文ニヨリテ死スルコ
ミニヲ　○椎か本十　たきこあひあひらんかめし
へさ海の出ひひやうつりしみ○叢雲二十二　将都詞　すきし
おもしすしかし瑕きさんゆのこゑしる北労をまいり
重こちめぶおとろの渉へふ○椎かた　喜る通りたり
ひみし阿おもて宗きみ

すきし長檐

著聞　十九ノ十三　遠長檐に丹青をほどこしけして

たきし結

夫木　二十三　たきし笠みおちきこ二十年しそ庭りたる

同○根合 二十一 右はうめのすき歌に○ウツホ スキスノ穴
二 膳断 二三ユ ○ 為家君 四十五 宮木きし歌あけてあはれ
とこそかはれ○物上下ノ三十九 ありつるかへのすき歌
○著聞 上ノ八 この頃のすき歌
すきものゝ心
帚 二十四 何かしの院にてあそびみてすきたるなかあ
らん女なとは何かとさだめけん
すきずきしき 好色ノ心之
カゲロウ 四十四 とき〳〵にてすきたるけはひのするなるは常し
ろけさうなり
すきずきし 好色ヲ

蓬 三 何の故をひそかにしてよろしくすき〳〵しくあるかは
世のそしりおはしまへき事なとあれとも云々
すきかて
夕顔 十二 ふんさかの院にてのこうしまてきたるをとこのすさ
あつらひなるまへんなき女○古夏 秘蔵をしたすきか
てあふく
すき数
枕 一ノ十ノ西 九ノ所ヲ見ルヘシ ○帚 廿五 ひとりしたるす
き歌○玉 二十二 いつきのひとんめく、やのきこゝめあ
へり 蓬の すきけ ○夕顔 一 おりしくみひかは涼き
のあはしかんての まく○夕顔 八 まへにすきき女ども

のたき作るか〇 狭衣 二ノ下 五十八 僧ノ行フ堂ノサマヲ すゞ
しけなるもなくて風とまるべきさまもみえずおほ
めでたき氣色は御覧じて あはれにもてなしたまへる法
服ともなとしるしなやうなるは苔のひとつる
白きしるそのこりかしら 三云〇 榮花 廿六 王き木丁
のたきかけのかゝる心くるしげなるに
すきゝる
帚木 二七 その彼すゝめなんとしきをすきゝ
るつるおやか添〇 三ヲ 二十八 すきゞ女房なとおほく
すゞる人のつとひあて
すきゞて

万六 三十七 船舟の音やすぎ秋来人あはすきさそめくらん
かやの名をやる
すぎむら
後拾遺 杉むらとみえて立てなみてあやしき人の
いかゞかゝなる山本
杉たてる門
古雑下 我庵は三輪の山本恋しくはとふらひきませ
杉たてる門〇 後拾遺 六 と宿とて杉をしるしき
宿にうつしてもしるしもなきたつねくる人影あるを〇
新拾遺 二 讃徳公 杉たてる宿をそしるしに尋ねつゝ
我三輪の山もとを尋ねるにしるし

杉のしるしかな

和泉式部か 古今 世にある人のもとへつかはしける

さいはひありける人のもとに聖のすまのさは

たりしし ○

すき車 遠

狭 三ノ下ノ九 なへき車ハやつしやすき通りてつくるにな

うめてくもりしてまつりなんへきよし 云云 以上かれかは

しも出けるにんなき車にさまようしくとんたゆ

たしかにありけるなへきまきらはしく 云云

杉や室戸

松のかくれさこてこ細谷の杉やり戸をかしくよきおを

けふはゆきなん

修行（スギヤウ）

狭 三ノ廿 詞六 僧ノ伯母詞 比丘尼の装束にかへて侍らんも

杉ハ遠きしるしもやかてえつかはさるゝまじうなむ

・ハ 和泉のわかけ修行道なとにおそいかでか年を

さしてなんへきことにはあり

すぎやうじや（ザ）

イセモ 九段 物心細くすゝろなるめをみることゝ思

ふに修行者（ザ）逢たり ○玉 帝一 みやこへゆきしるしや

うきさらひなそきこゆる

杉生（スギフ）

けさこそまハ萬をすきみに朱みにわか風ハいふらけ吹と
こしもと
誦経（ズキヤウ）
横笛にそれみて誦経なとさせきさりせ七々か云
此心の内にかすらく何ゆしかひて金百両をおくん為ちて
出させ給ひける○名息 卅一下に見ゆとみの巻にハ十経
ぬとをこれを誦経と云○經集四 廊下經ぬと云
みせさせたまふ事
すき者
ウツ八 ひとへ折りけへる木丁のすきまにくらけれ
ミ○拾遺四 ヨミ人シラス 手縫のすきまの風もさむかり

ま身ハあらうのかりそめなる○東ヤ三 守ノ丁ヲすき
へて時かと遣りありき給ひ○亜合七 一のくすきさす
あらそ二所さうかうひあへる○蒼八 まわかとの
まこかもるかまつれのすき者ともらさしぬ都ゟ
まもして[illegible]うつ某り目みとしかなきあり
すきずく　数奇
勢云数奇ハ漢书李廣傳ニ出タリコヽハ別ノ義有
故ニ音訓大ニタカヘリ雅望云白氏文集ニ文人数奇
諸人薄命トカケルモ李廣傳ニイワユル命隻不耦合
世トアルカコトク命運ノヨロシカラヌコヲイヘリ俗ニブシア
ハセト云ヘルカ数奇ノ文字ニカナヘリ好ノ意トハ大ニ

相違セリ○帚 初心はよくこそうつろひなるをきこえて末の
松山と待人て○常夏に さらにかたみ人のす
きごころはひとりのみつきたりし○後男の
前できてすきごころをのこしくくるといふ○カケロフ日
記 昔すきてをかしき人のたはふれにおもはるるこの歌なかに
つきそて所へなしつ

すきもの
帚 十七 善きほどのすきものにありし女をとらへてかたて
ことおもひしらぬ仲らひ

すきありき
大 三 女尼ニナリシヲ平仲クヤミニ云ヒニ をとこにすきありき

をしかりし御をとこひしきものを御かたみにと思へるのちに

すき心
帚 卅一 あやなくうちあるすきごころはあだなるものなるをあな
をこそ云○同 卅四 身にしむ斗おもへるすきごころ
よくよくおもひあり

すき 鉏
仲 二十七 中将殿前栽つくろはせ給ふに御すき人
の嫁子をすきてもてあそぶ

すき物
拾九 定めなくなる雨の爪のつゆをさへたえず
かんたい木のすきものと云ふ○ すき物を草のあやうし

よし川とハ山のおくと云所の神なるとよめりやハ○古 桃燈
枕の書説その後の事ありてまたやさしき紙との事なる人の
いふなりけり○イセ 五十八段 あるしのやさしき紙の事なれき
や○玄鳥 廿七 若きさその物の香出つるをさなかり
○宇治 十三ノ二 なつかしきこともしみてもてなしたれ
ことあなたへ人をかくし給ひさき紙ともしひてうつせ川
○幕六 夜のつゆのかゝる兵部卿の君の御紙かく
みえけるらんとて氷る紫の衣きしまの所に紙とも
ひなとまきたるを○白紙掟之 上あさ思ゆる板
この紙もし朝臣なる如才紀元の字相当なる事なん
字板なんとなすなむ人の来ていふ板上とかしこ ○言葉

廿二 さくらの花ちりしきたるをしきし紙とよめり

誦經

新古今哀傷 **小式部**内侍みまかりて後常にもちたる
侍りけるをたつねさせ給ひて誦經にせさせ給ふとてかき付侍る
しきし 次に 五十一
稲荷山房上あまりてしきしみたらしの人のあまりね
きつくる所○ 稲荷山にあみし人をしきしみ思ひ
けるしもてなしける所○ワカナ下 首 若ひの式部
又男あそてなんなかりてけるしきしいとまき
しきあて却ハしきるを○東二 はしかなきて
そしきしみなる人のきけハ○ワカナ上 首二 紅

梅かやあらんとはきこえ紀すきしてみなあさましのさ
なれしつかはしらしと萬代のかみ△細 次ヽに同し
キ之○被二ノ十四 女に皇太后宮の御かたに[illegible]
えたり宇治をさしてゆへある所にて故郷の枯野の
色しらぬ[illegible]より紙のこしらはしくすさまし
なつかし○天武紀 次此ニ須岐○萬葉 手次（タスキ）
○右傳 八ノ五十一
さきしく

橋姫 五 山深く川[illegible]へてる[illegible]さきしく
きこなれはてゝ[illegible]そあさまけなさ[illegible]
みなもとひてや○和泉式部物語 御みなさんとも思

いかにまさておもはれんとしと思ひてさきし
しや○たま 初丁 さしもあるとおもはぬなれはさ
うちの心けのさきしとさへいふこのかたしかな
みな御ゆ情ありて
さきしきしき

好色 モノゴノミ △朗云 俗ニスイキヤウラニキトイフニアタレ
リ○榊 三十五 さきしきしきほのかなるやうな
みな[illegible]をかしきをさそるつらなみ○桐一ノ二十五 村上ノ宮経
殿ノ女御ニ古今ヲヨマセテフトコロニ入て殿みやもそれはなくさなう
覚えしさかきてはさきをとあるらしきそせあ
ひてはさみさみ向ひてあらんかたしくるさきなひ

いつくしききはいにしへもかはらぬ事なりけり○槙 二十八ケ
黒み ふるゆきのつもれるゆかしさのみおもしろきそすさまじ
しき よしやけさんみへけり○たち 二十七 秋のくれしこそ
思ひそ侍りけるをさへきしくしき事しきもかはらし
ともかくしかそうきひきて侍りし秋はれんと中○柳枝
廿 ますおやうあはれさきしくしきと廿ありけるをまへさ
ありめぐりんの上あそ見こそはいてとまりの心さりて
と思ひ侍人ありしてありん○たち 九 ありけるあそかね
へき人の心きをさそくしき人のおもさひあて○
廿四 えんみあんなるさきのしきのそこそ
何さきわへるを

平家一ノ八 折花けのおもひを桜町の中納言とそ申ける
こころはさくらをして何さきのへる人あて常ハ吉野山
をこひしく町みさくらをうゑおきられへ
さきもしくしき
七ノ七 タテ以モテキテ置ニ哭 さきここハ名もこのしてきてあつ
さきしくしき上達部信綱ありしは種ちはあまたをも
あやの色あやに心をおかぬめきゆめしもれなかで
○八ノ七 七月七日ニ三月三年ノコヲ源 中将覚ヘ居夕澤ヲ下ヲ 月頃に流しける
とかくえしかれぬそれさかたうは思ひすてけさるを
そうあれさひにんへん○ 十二ノ七
さきし生へる

十二ノ六

あさましき

末ツム上 さもしらしあさましうひたきなふ
みつにありしかとも○ワカ紫四十四 一ツあさましう
まはれをかしきもわん出んとあさましかりしこのお
へし ○ワカナ上ノ百二 猫をやをきよなてこれは
きこゆれはとかくをかしくていらへつけあちこち
はくて二つもしく思ひよらてなかに あさましく
しき ○アカシ四十一 人のやうにはにまさひめん
くゆるさきはさなひすてゝみとゆくそて あさまし
しきや けれ書をもはし出さもありを ゆくを

河けしあけつる○若紫十七 ありけるの旬える天のそて
なまいに花をえなくしは花を数さん あさましくしや
あはれなしこゝにすみそこゆへゆふ○アカシ二十四 あはれ
むかしん同し雲をあはれ思ひて同し おもひ
はかなんとつれかなりとあさましくしやうへう
あさましくしく
花下ノ九 枕をはれ数あそこなたを思ひはへんへ させ
まほしくそれとて心ちあさはそかしなれ
あさましくしき 婦事心
画 辛 源画ノ字ヲ かつあさましく数やうはなのうちの中へ
や あさましと云

なまきしくしき　好色

玉葛廿六　女といふものゝ心ふかきをかまへてさかしらんやう〳〵

うちなみのおもはしきしきしきいはつかなくしきならん○若紫

廿三　何かなまめかしく思ひ給へんことゝ心へうちなまきし

しなさかしきをつくろひならん○後　恋一　ちかとなきし

しきいはさかしきをつくろひならん○同　恋一　ちかとす

きしくしくは優にもきわいは

なかるす

若紫廿三　なかるきの御門のかしこさを見なかやふ

ときみなへる事ともは○すなるきのこゝよ常なし

なかるこうちのく山ふところの花ざくら

なみ情

総角　中の君を姉君に　打なかひてなさけなかりけりすき

りかの心は中なからて○椎本　竹河　いとかう筆すさ

たる哥しきかて○アゲ廿八　すゞろなるさしきの

○同　書は筆のおきて見えて○トリカヘ

二ノ四　御髪はなつ中納言のなまにたがたすみ

ならる哥しきをひてわなくるなのなき筋ある○早蕨

廿八　藤ろひのなや中なはいらんずるなりなく

色なきなて○賢木十二　こはなかるさいへてなすなく

なく〳〵なる心をひのなの様をつくろふ事を

なみ美明也

トリカヘ一ノ廿吉野ノ入道ノ宮ノ下ノ　なる神の音にきゝしか
らうらうしき思ひあらはれたるわたりにて
る方の心みすてゝけふとゝまらん
しけて
かみ
皇極紀五　丙辰夜半雷一鳴於西北角己未雷五
鳴於西北角云云辛丑雷三鳴於東北角○蟬三
秋ハ菊のなるかみのおとろかすなきけしきなり○
同五　暮ノ夾　なるみの音にも驚かされておもひをかへて
すみ　炭
椎廿一　なさけのむつかしき夜の何のその
おもしろくて
ちとせを
タクラ中巻　なつかしう炭とりてすみたる
すゞしろく
イセモ八ノ段　あさまの嶽にたてる煙を見てさて○松風初
あさぢふのおもはれ玉はりきしなるらんかなしき
ところおもしてゝ○ウキ舟三　あなうしとおもふ
きすみなして
住満（スミミツ）
玉葛三上　筆もおひ諸みちこころみちたる人まいけむ
そくへしましくさかりて

あさちふは
新古 雑中 いかにせむのきはすみなれしふるさとのあれまくをしき
けりのかけたえて云々 ○西行 八千年のかけのむしろをしく
かけてすむらしあふこ 紫の庵哉
すみうかれ
続後拾二 雑中 園城寺のふもとにすまれける頃云々 為
大僧正隆明 ○ 千載二ニ三 ◎続古 雑下 光のうちに
山を住うきとて住中の清水をむすびて 俊成
あさくら
拾 雑下 経房 山ふかくなりにけるかな人はみな
みとくにて眺めつるかな ○ 夫橋 四 うちつれてくるすゝ

ころもあらはてすみてらしゝおもへるこゝろしけ
明しとや柳かりへつゝ ○詞花 釈 隆縁 なさけあるに柳のかけすゝ
みをやるくしとて木の葉のしくれおもしくは時雨に添
△女ノ通フヲサシテ云 ○帚 三 右衛門督の明けゆくいはり
こゝろつきしけるあさこゝろは比きしみちやくれはてのゆく
してたゝきしうへしきしあさくらへの人まつり △女ノモトヘ通フヲ
スムト云リ ○万四 天の雲に納めしゝ坂の家路をなか
きわいかにしし命さよはかは ○万七 あさつゆしき
人をなきにあやにこゝの岸のたかみをまんよし
やわらも ○イ物 業平ノ有常カ女ニスミシ㕝モアリ ○夕
良八 はつ明る人のあるらかあらんとは ○蓬生 三

狐のすみか ○若菜 卅一 家路のあとをたつねて○
桐 十七 なき人のおもかげたつ手出るきえたる
しのぶさへあはれなり ○九ノ六
○堀秋 大進避暑 夜くれは ふきたつ 風のすゝしく
さて 清水のさゝなみもすゝしくなるへし ○銅野群
載 十五 追儺 児南方土左北方佐渡ヨリハ乎知の
所手奈年 多知疫鬼之住 加止 定賜比
墨ぞめの袈裟
千載 恋 ある上人のきゝし経をよみける墨染の袈
裟を忘れて云
墨ぞめ

古今 長哥 墨ぞめの ゆふべになれば ○柏木 二十九 女三
ノ宮 源詞 ゆきて あはれなる墨ぞめのすかた ゆゝしける
て 同しくらき心の中にも
墨がきし
帚木 十七 若の上手 かきなれたる墨かきにこえて
たゝ見えて つきつきしくみゆるけしきなるもあらめ
ところへ ○蛍 廿一 ゆかしへのすゝりの上
手ときや
すゞりにし
玉八 よりもあるまゝもあそひのこともありつまよしかるま
すみつきもかきにたとへつきつきしく ○若菜 上八 契り

紀かミのすゝりの中ハちりもなく清らなり

ことなる○玉かつらにひきいれしものとなり云云

かしこの玉へ場にすゝりもなくつくへきものな

きなき

墨つき 附

椎カ本 二十二 墨き紙に書のたゝ一すちなるなく

書はをひきは清くうつくしく筆に任せて物かく

ことそはかなしかひ川○幻 二十二 うちおきつるの中ニ蔵する

つきなり○椎卅 白紙にちかく書いたしてこそ一てうを

筆ハひきつくろひたりて墨つき心あるまてのまゝ

みゆ○葵十 みをとりぬまてに物かくさまにて見えけり

たし墨つきのこまかなるはへあれこそ○ワカナ

五十 一の御かへりことも墨つきのめとめさむるなと

て居たる中へ至

たゝさためなくね

椎 卅三 書てあまくね紙燭の裏になる如く

以て △孟津 脈者ノ具黒ヌリナレハサナラヌヲ 薫ノ

前ハ取出シタルニ○夕良 七 此うちのこのみにかへて

ゑてもまたなかうへきのなへかり

衆生

鈴虫 初 経ハ六道の衆生のためにかたらへまゝ

ひそ

墨縄

大泊瀬ムル其ノツキ廿三丁ヲ あたらしき為名への
陀倶滋柯核志須弥儺皤 しがなけば誰か柯訣
武豫婀柁羅須滋儺皤 ○拾恋五 ともかくも猶は
思ハ乱ひくくすうつ墨縄の出る一節よ

すみの山

ワカナ上ノ七十九 あさくなる山を含の手はたしまてくら
あさくやう 速
神代紀上ノ二十七 急 ○宇治十二ノ十八 命終ノ時はあし
仏を念しはさて浄土にあさくやうに生れて
今あり ○同 九ノ四 大やまみの使者ありあさくやう

干のありけりて
あさやく
拾 恋ハ 思ひ乱る思ひこそたゞは大かたものはいつし
うしのみあさくやうわつ△按 速ノ字之○新撰字
鏡 悆悍惶遽也於地加志古弥須弥也久

末スエ

若紫 廿八 一つきハ川やしらまてある忍のふみやう
みさくりへまつりけるほどにゆくうつくしくまし思
ひしやしは○末ツム 三 故常陸のみこの末ニ生まれる
て いまにしうつく紀かひし御娘 ○末に 初 末のとみ
×吹つくしくそ ○桐 廿九 うち六ハ草あさくあさくさる

源氏つきかへり〇同

末(スエ)つ紀

島五十八 髪ハ必河への扇をひろけつる世のかたに

ちりくるき末添きにけり

末(スエ) 歌ノ下句

イセモ 年北阪 三ちくろ人のけしきハ物色ぬえかしと

色をしらすきて末をなへ聞ハ金盃のさしつかれに

す川のをとくしてうの末を書付く云

すゑ

紅葉 十六 折かきこえはさらなるにあまりに〇桐

廿九 藏人の靈むかへて少しまかふ〇拾遺 秋

御屏風かきたる人云 兼盛 家集にも

あきらの花を折てきみ袖くらへ靈をすゑてありけれ

かは〇紅葉 十二 まさしく人にならてかしきかりくさき

かひしまり〇末摘 四 打とけてかたらるらんと

あらん末ありてこしろめしらうしけるしと思

へハとも〇スマ 廿九 内使さらんむつけしうて二三日を

なさきありてうしこ物種形く末あまて時し

かなり〇若紫 四 うしかれ世の野かなりも僧都

をよかさ中河ハなきなき玉ハしを〇澄舟十 かく

形る人をかハさしてなき絵ふらむ〇著聞 云く

なくてきうるなきなる極書かえて一年ぬ人の代とまき

毛

すゑて

イセ 五段 かの通路に夜ことに人をすゑてまもら
せけれは ○イセ 九段 その河のほとりにおもひや
を 句のこゝろは おもひすゑて ○月ノ下二十 広はしすゑて
すゑし思ひのこゝろは そこ ○桐 二十三 一つかたに思
ひ澄すらん人をすゑて すまたやとおもひ所に
しけ遠しする ○末ツム五 さいつかの人のふるまひ
かくいとこころもなく かきたえたる 人なん

末つむたる

古 だれ人とも思へはくるしき われの末摘

たれのをりをもつかんとをらん ○末ツム 二十三 口おほひの後
めでたくもあらぬ末つむたるはいとおかしひやかなき
とし出て

末葉

千載 秋下 寂蓮 虫の音は浅茅かもとにうつもれて
秋は末葉の色そかはれる

すゑ居

古 ちりをたにすゑしとそ思ふ咲しより
いもとわかぬる とこなつの花

末つかた

ミノリ 陵王の舞のきふになるほとの末つかた

の末もなかばかすみて○横笛 琴ノ本 今は末法なる
をゆきくらひきしめてあはれしこのふるさとの音から
○櫓ビメ 壬生 清やうひの末つかたにめしよせて

末つむはな

拾 恋一ノ六 百十ノ卌四 よそにのみ見つゝをこひん ちやハ拾
紅の末摘む花の色に出でずとも △紅花ハ末より
つみとるはいへるなり○式子内親王集 ふる袖のかたみには
川ぞしに末つむ花はいろにみえなん

末 木ニ云

ワカナ 三ノ四十六 鶯のなくやみちかき梅の末々
うちなびきせるを

すゑつくる

増基遠江道の記 立よりし山をてこそ思へつきしゆくるを
たかしのみねなしの山のたかねつくるまでの思ひたえまや
やくしけすくきし

末つひに

古恋四 梓弓ひきのゝつゝら末つひにわが思ふ人にことの
しげけん○万 二十 みなかみの神のやしろは末の
つひにたよりあらんもせん末つひにたえんとは○万十二 玉かつら
たえぬものから末つひに逢はんとぞ思ふ風をもあらん

末なきせうに 不避之

名寄 入道左大臣 三ニ の袖の風しをるそでをやすらしかへる

末なきやうに人の思ひなすもちてよるに思ひなやむ
へきみなてあらぬ

末の子
廿七 浮舟 宇治の宮の末の子にて はかりのかしこき
はかなかるを

末の山
元真集 三十一 末の山すゑ川人をのこさむすめてこそ我をは恋ふるに思
むなしくなりし 〇信明集 卅一 末の山昔よりすゑ川君をまちて深
かくれとも深くしるしをとめ

末の松
ウキ舟 浪越ることはりもあらし末の松まつらんとのみ
思ひなるかな

すゑさら
延喜式 十二ノ廿 大膳司 云云 陶盤（スヱサラ）

末
後撰ノ心
若菜 上ノ九十一 この御先祖の御ことは云云その御なきひに
うく末は名残あるまじく人にはなからしを 〇

末の世
サカキ 十 さま末々に侍て末の世にこれ御きこえあらむ
手のとみつきしき盛に覚えて 〇ノワキ 十九 かとの
さかりんの末のころにまかりてさらんくらむひ侍く

末の露

遍昭集 新古今 末の露もとの雫や世の中のおくれ
さきたつためしなるらん
すゑ〴〵 子孫ノコヲ
拾四 かの哥 秋をへて人の千年の事云るはすゑ
〳〵われの末〻あることもおもふまて賤みけるよし
あはれ身をおもひしくも覚え出つるかな ○末〻云
卅六 うつらぬ人の末はいかならん ○ 五ノ十一
○ワカ十上ノ卅五 孫タチノ 一つ源末〻のうよそしみ
なみんな末〻はしるたれを思ひしれてお
を傳りけるに ○拾廿一 おほかたの君が年をまつる
末〻のなきものはおやのこゝろをつくしゆへにおへるかみ

さひ川
二ノ一 さほさすま桶 大井さね大桶さひ川 ちかつ印 ○方
丈記 槙の方にさひつきまれたりくもりするなと
す ○ 拾ノ二 秋の浦のさひ川のすゑしく流るる
人〻云云 ○ 宇治一ノ卅九 さひさひ川のみなそこれなる
おとしつるらん ○ 四ノ四
さそり
發心集 六 秋ならは信なく行なうりしつらは生死のまと
ひりして ○ 六帖六 よりのこはかへりてのちそかな
かさまりたる身のおもひなさきを思ひしまはく ○ 雲葉集
さそりこともしてみたるかなとなるときはうらみの紀

ありへうしやまれける○搓姫七かくれたりね
うちきたるきみなつるはなれてたちわたる集色
こゝろなる○拾物名とりのおはねるひなうる
うらそ谷ねうひのくゆゝはたかう集せわ○カケ
口ウ日程年ノ上七云　さ流るみしやけるたてもりけむ
なかりはうひの声へきいとくるきて物をおもふ
らん○六帖二としをへてうへわかいのまた
またこゝのきみかしあんはとひつきぬ毎し
○和名抄　十八羽族部　呂氏春秋今雞卯多毈
音段　和名須毛里　野王毈者卵不孵カヘラ也○大和なきん
のすもりみつゝみせなかりんちまたかたはよりへるきふの

かはしきし○為家卿七　たえせすみなかそらしとは
こかねのかいは法顕もよくこそたえてせなかはいは○同十三
濱名の橋たてしぬ雨のふるをとのかへりつねあ
うらはんも二川よりなかん○うひのうちみ入のあ
こあかるこかねのかいは君か宿みそうへさけらん
云　無爾　かいりてあそうなみたちもりみなりたし
むするうひのこ法覧もよしきて貴色はあそうさへく
あしけなる法頭けうひの川しかのかふ○山家集
上　鶯はすねをたちそりみなわらしては谷のふるすは
いかにてかりらん○粗政集下　またふかきこのたちも
まあみとしゆる身なりたいうへわ物は思ひさゝすかし

すゝくもりこ

新古今 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

すゝ 煤之

古事記上四 凝烟ノ訓ニ云 洲須

すゝたふ

煤ビテアレビテ 約メテイヘリ ○万 十六ノ二十二 [illegible]

あしひくやいつ 酢四手鏡 [illegible]

[illegible] ○拾 恋四 [illegible]

やはすゝ [illegible]

すゞ 小竹ノ類ヲ云フ 篠ノ小キヲモイヘリ

○万 二ノ十一 [illegible]

○新古 秋 雅経 [illegible]

[illegible] ○著聞 十八

すゞ 夫木 雑一 [illegible]

雨雲 [illegible] すゞの秋風 ○六百番歌合 顕昭 よの

山すゞの [illegible]

すゞよいふは △顕昭陳状 [illegible] ○壬生

すゞを [illegible]

二品中 吉野山秋風 [illegible]

きこしらぬらん○月清集上　逢人になきさくらひ
わか山姫しのゆふぐれすりかゝる　峯路通路

す　誦

続詞花集　恋上　一院山本のおほきおほいまうちきみ
御仏前に物おほかりけれは僧ともの念仏して読誦せさせ
まゐらせたる人のうちにて見え侍りけれは

ず

スヽ　卅四　くもゐきしの山かけ○ワカ紫五　夜るの
拾くみひきかへつゝ花の中に○同年　こん
かりしおすゝのまゐるさまざまにへつる○ミノリ十八
阿弥陀仏とひきかへてよるの数珠すぎさらし

てあらそひの玉はからて心かはりたる○数珠経略云
其数珠体種々不同　校量乃楼子稲一遍得福千倍
菩提子或手持得福無量○頼政集下　思ひ出
わかみをも猶ゆきかへりのつゆ手にかゝるにいはまし
ゝかき○栄花二十八　玉のうてな　法しのつえをつきて立出
すゝみきてたちかくるゝはつきあへぬの御人の
ふへにともゐて物その子にかゝれときこゆるにし
うつくしけなり

数珠のをさかけ

栄花十八　ある法師の深のひとしの新院の家におまいりけ
て　数珠のをしすりおとしかけるをおとしへいかに還

ろくとて ○組スカル念珠のサウソク之
せしがら
大和 世中ハ夢をむすふの夕くれハせうろ
み物のはかなしきぬなそ ○行ドリ うるしきかくもの
ことそまみつかすか川すてせうろなる志なそそ
いさりいつる人よ悟よう流そ ○遊仙不覚漫 ○漢書
辛△スヽロトヨメリ ○ワカ紫 すゞろなる人ハかうハ
ありけんや△心ニ思ふ事なくうちもろなそといふ ○
清正集 たゝしへうちせうろありきみありくハここそ
このあとて人に思ひなきわか ○中務集 せうひ
とをいつまつろみ覚えて人にもそくるね猶なく

こゝろ部
すゞろぎて
平 二十二 人をハせつりみや荒をん此ふしこいりく
せうろきて ○梅世と 一つく東ハせうろなる中ゝ
みれしいきをしてむの色ふかしかくもいらぬを
うそみしわうなる人の伊勢ゝ所なる事ゝきをとそ
とりまとうつきいかふハいらう一つうらん ○梅
因程ハ五節のわしさそせうろみたハれとそこる
人もわしう覚伊色 ○同 十四 梅なわれハせく
ろみさる言きさんわありきうすなめつうハにしう
わうし ○イセモ こゝちのくみにせうろみ行いふ

をにけり○浮舟 卌 こゝよりはうき舟へなりさ
まかせてすこしなるまじきかのまつはなりなん罷ふかきま
けり△契云 隆書ニ 幸ノ字ヲヨメリカラキメヲミル心カ○
蓬 七 あらはれてなをふかきをしらぬとてはなるる
車のとりを打つけたるまま○若紫 四十四 左初一葉
ひかりかんとさしてのみなたちたるかなしてなく
しりたてひかりへることとゝ人やとききん○大二
ゐつきの郎なけりし大納言殿の兼盛家へつか
ける物をとのかたてなきほとみかえよりのかひ
とき給ふは○ト男ヘハヤ さしあしの紅葉のかくしよ楊かり
て名なきさわさみつゝくて心なしりよりてなみ

△宣長云 アルマシキコニ何故トナクオホヘズカナシキ也○若紫
かなしくさみかりてたちたるみちなし○遊仙
窟 氣便欲絶不覚轉眼眼時復偷著十娘○朗云
スゾロハ何ノワケモナクムサトシタルコメツサウナルコヲ
まろひ
東屋 二十六 儀式宮の祢り出たるひたちをたち営へてさ
すかみなとかへなきまたしさ明りたちたる
ひとより○後 アテ宮ニイヒヨル処ニ 父おとゝ所ゆくえか
みとゝもゆるさもあふましく思ひてあてたるを
ゆへあかんをすくるなりん かたは○クラマデサニ一の衣
内方みな常ありへさしたんと思ふをさしてのしか

こと悲しかはんなるなる事なりけるうらうらて覚えき
んやなしくてなん○クラ下ノ廿一 ものへて詣ところき
めしめしなくる事に紀にあはれき事なり
女物の出て出つるさまなりなきもなんすなる
行ける酒のこゝは御府つかさのなるなきことなりなりとる△
真淵云ス、ロハ心ニ覚エズアルコナルヲ轉ソコヽハ何ノ吟サ
ハヒモナク哥ヲコフナリ ○大四 芦のあさひみとら
そよしと覚ひ悲ともなくなる物にて物も鳴く玉
いんなくあるへんの覚ひなる色は
ものるいしく
椎 年はうしてなくしきなきいひなかくいうん玉はぬ

人なれなるをよしとよくなるいしく所ともいあしくけるく
○若十下ノ二 なる物にしきなりしくなけるとは
あるらりの荒の気をもてみてやみくさましすく思ひて
年つわかに○大鏡三 宮のここうちいさりとをす
こゝしきころにしてに覚えしいとき言えんかし
ものるいしく
栄花 月の宴 こうち打つひまへならさ本すきはとまて
すなるきしく覚えるへし○同 蒋由との
よの中をはなれもなくるいしく覚えさるもし
○同 浦くの別 さまくの物よりひるとて給らん
すへてきなれて覚かつ○かくてありなるをなく覚

あくかれて所なくさまよひありくなり〇遊仙窟 何處漫行去来
〇浮舟 十六 よるよるあくかるゝにおきあかしつゝ
あくかれありく人
若紫 四十九 あくかれおはしてかならすみえんと思ふを
あくかるゝ人ハかならすあるましきことやん〇同 八 三云
あくかるなるへき所のもの怪なりけりしておはすれ
しめくくりありく事なきものにしてなにかしなとよりまゐりけれハ
すゝみ
初音 十 すゝしくて若やかなる上達部なとも思ひあくかるゝ
とをもあまたみつゝけるすくなくうち
あくかれ

若紫 四十七 父宮の君ね出なへるなりさしてあくかれ
あくかれきてこゝにすみゆくならん〇ク二 中ノ十七
若菜下ハかくおもひしれぬ御心のみたれて一筋ならぬ
ある賣珠打出しなへハ〇ク二 上ノ卅八 所といふ
きてその修りせしを忘れかたみ玉へさうはいふあくかる
み魂の所しく世に住るかき心地のきこゆるハ
あくかる紀
清 十九 たゝ聲のあくかるゝきよにあくかれハこゝろかけ
みな人のおもひ亂れ〇中三 十五 露しとふ所をく
あくかるみおもひなくて人の心あくかるゝきぬ袖ふくさらは
〇大一 妻あらそひに心あまたのあはれはあくかるゝ身の御

のかはしきやはそ　○イセモ 九段　こゝはいかんとせは
芝はわれなりかなきみ夢かたそはなまりその
ころなりしもすらん成けるてゝ思ふみすき
やうさもひとり　○同 十八段　是そるになりそ
すみはかくして人をみ夢よせもなみ
もそろてき
柏木 九　御いもこみせのひもせてもくろてそさ
へはなもまかしけしかなそ
すゞろてき
竹川 廿三　くらぬましけはる向井みなしかりもくろ
てきを思ひはなんとなやしきみを

すゞろなるもの
浮舟 完八　人もしれみはしもやしきにあつきしなる
いもしなるいものたし里出きしらんみはさき
みかきさかりふのきりゐをそすまでもしまれ
もろかよきき
後朋　もし夢のすゞろあつきみあしハこ此のわか
人み思ひなきを見え
もの名は
枕さうしなきなる物　すゞろはしあくちこ　○宇治
利仁ノ段 一ノ廿八　鼻ゑるなるそいらく　さきはありそそ
宮のあふらぬまいるるはもろすなをみこもね

はなひるといふ也○和名 洟 波須奈々 鼻液也○七ノ十二
すゞりのはこ
右京大夫集 廿九 すゞりのはこありしをつかはすとて
わすれじなといひしを十年あまりしかど
すゞりのはこ
宇治 十ノ廿右 つねよりもことに思ひてすゞりのはこ
ひきよせてすみをするなど云
硯
ス、虫 五 云〻と其硯にすゞしくゝわしくて物かきつけたる
扇にかきつけたるへり
硯のふた 蓋

廿ノ三十 さきざきのためにて紀さだしげが硯のふたの
うへにのせてさしいでたり○九ノ十二○詞花
春 太皇太后宮白河皇女 硯のふたの花をを
のせてさしいでけるに花のしき紙にかきつけ侍りける
拾遺○かけろふ 十三 ひとつびとつ御硯破
ひきにみなみてこころもとなき菊の花しをりて
ちて植ひきわたしたれば
硯のふた
栄 四十六 御硯のふたことに几帳の内にさし入れて物は
しなかりけり
すゞりの

宇治拾一　草粥をすゝりて舌うちしてあはれ也かたらゆ
みなりてとはいひたりけれは
すゝむ　進
絵かき　才覚にかなへの芸ゆるすましき人の
○桐壺 廿二　おし頒にはまけおひて一つとくさき
のまつりの人々あそひくらしつゝ待はへらん○湯本まま
まかりて○ゆかしき方はまつさへある御心ならは○
夕霧　宇治十ちゝうちまゐりきこえよしあらは
なさそむあそひゆすりしきる様は○アケマキ　四十八
かくめうけ給はるまつらむかたへのわとりうこみ
ゆかむやまかを○帚　卅八　勧すゝめてこまる人まさの

よるへしはしなく川ゆかぬ○明石 二十六 人なきを
気わろくさる方にてまきりはへらん○帚 十二
あしきまつしみ物まへ七うて居にゆかぬへし

薦

すゝむる
駒クラ八九　あをもしの嚴浄かいつけすめて○鈴虫　十五
ゆるそよりいひゆきん人のまうしめすゆゑ侍りて
○薄雲 二十　くらきの方とまつてかなるらう
こゝそゆかめしきゆへしけ志かふてあしと云

勧

スヽム
竹川 十三　盃をのみまゐりまゐるは○椎姫 卅四 粉すゝめ
すゝめしおこなへて人をまつめて○千載 冬

円信法師 人々あまたして百首のうたよみ侍り
ける時
すゞむ
後拾夏 好忠 夏衣たつた川原の柳かけすゝみにきつゝ
きつゝならすころかな○新葉夏初丁 いさゝあつ
き日かけの釣殿あいてすゝしかりけり○慕使十五
あつきさへわすれてすゝしかりけり 佐方
殿かてきぬいすゝみかへりん○三代実録十二ノ廿六
遭天暑熱上岸風涼○仁徳紀二十三 天皇与皇后
居高堂而避暑
すゞむ

藤裏葉 わた殿の下よりいつる水のすゝしき所
すゝしく川をもとめたまひ○同 十七 すゝむる方とも
思ひしけとしるし所にひきよせてあつかはしけなる○
椎本 ひとしおすゝしきすゝむる御かたにて
人のけはひしるきをすゝみつゝある○同 二十七 大
との方すゝみえんかはしかるべし△我おもふよさま
をもとんとすゝむる 同巻なかをすゝめむかふる
本かゝり 語に事のなり給ふなるすゝむる
いひもてすゝみきゝすゝむるもとんうとさひ
なりきすゝむるをすゝめける

進 シツカラ スヽムナリ

進
抜四ノ上ノ九 ふひて浮世みあくまなし何も覚す
らむ神さ康心の継を掲らてかしてみつゝ紀
方あそたてゝかひける
すゝ出て 差出ルことなり
抜三ノ上ノ十五 今姫のこと 嵯峨女院心女院ニ名ノムニ 今
ちつと わしくの走しきこそこそ今 わとくの見ゆへつく
こらなれ あらんをたてゝを出てをしてたゝや明と
のなはたて○同 同三ノ十二 今姫ノアリサマ たまわすつく
たまもて 何てことを出て婦事しきあなあしくはたてゝ
おへるとさけなは宮こてあそそれなけも○蔵ノ宮
上さそてそさ掲し玉ひていこそしはなし鳴りこうたの無

ふかわしらう入をとけかし かなふ○同十 少将の君
すゝ出し侍るをしつきの趣ハ耳とゝめかなひけりや
○柏木 十五 ふくなんなと こゝかゝを△心のたゝもなき
たてこ
抜三ノ中ノ五 一のすんみたてわしてゝ掲られんてゝを
をふみ ましなむきさ川なそのを○三ノ中ノ二 堀川
一品の宮の御紙を言ふなるたて中さりらんふあ
もとりかりてか かくわなさはとなり○アケマキ三 か母
らのうくみたてゝしたてゝをかへる浮木憐みて
たてめでり
夫木三十二 たあらしめて雀なれるをのまうハるてひ

忘れしの弓もしけるかな○源仲正 少年の春をおしむ
ひくらうきころゝけさよりそてふるあつさ弓かな○庭訓
鶯 雀小弓

鈴の奏

紫山抄 行幸衆裏書云 若少納言遅参者少将相代テ奉
仕鈴奏其儀闈司奏了テ退帰之後入自左衛門經
長楽前橋進就版位揖而奏云御共尓持仁 信春
粮鈴賜止良牟申ス云云 還御時撤御輿後不待闈司
奏進自長楽門前橋頭奏云御共持奉礼留鈴進止牟
申云云○江談抄一称鈴奏○夫木 三十六 為家 鈴すゝむ
こゝのへの庭ハ柳そみえてけるあかねさしてそ火みん人は

ぞしるなり△こゝハ鈴ノ奏なるへし○續後紀 十九ノ二十八 承和
五年正月七月天皇将御豊楽院於紫宸殿南階
欲駕御宗嗣下上以少納言祗候鈴奏趍立大庭○
中右記 寛治二年十脱九日丁卯初有行幸院大炊
殿云云 未時寄鳳輦鈴奏警蹕如常○山家集 下
さかきの庭におりしすへしみるかなこゝのへのちかひのかそ
をきゝてなかめける君かこゝのへの鈴の
そらハかみなる光をやかくれまことえん○吉記 承安
二四二十三日午時小雨降其路深泥落馬人已多入
御宇治之後無鈴奏○建武年中行事 五 九月十一日
例幣行幸有云云 闈司 鈴の奏なし

すゝき
集冬 こゝろの浦みちしほさしかれ衣のなきにたちそむ
すゝき程こえつゝらめん○紀九ノ二 今頭滌海水（スヽウシホニ）○拾恋
二よみ人しらす これは川こゝろ経ひとしての葉おもなき秋
すゝきらん湯川をあらし○權二番 此ひとつてとなけ
此世のあこかれをさそき○行事（キヨメ）土よも河乃
をみすよれよれ深くいりつゝ雨さもかれ人
しすゝひかいさりんとこ出ひなかりつゝ△愛ホ浩
濯心十川○勝姫三十二 かゝるもろきさ水て人の秋
おもろく句ひを来ひて尤やしおもへすなき葉ハ
のおきしの尊みもてくるへをさゝきさそて好そあやまり

蔵や○新古今 秋歌 東門院 あこかれなきうちみのもの結
ひあおそ人のちわそ忘つきほし小○寂方 中川み
おもしくみきりの根ありきてをあらい出て こそ あるへしわ
かしも○秦二番 萬家 あの恋しく影ハ櫻み露そをして
人をてもおねおもくの山そしら○家大夫三十六 梅りの
をおもひる洞みまへをてつゝみあへきいきつれ
すむしも○江次第
すゝき
夕二下ノ士七 夜のうさひしゝの恋しけるきそて一ツ二ツ
たてゝ三云 すゝけゝるなき好そ火桶の恋しけへる
み火をいゝみおこしくる○散木 雪消ねふりの雪

根ハよしこそ水ニ立まかりなにすけさのなかり○未廿四

廿三 志ら紀衣のかひしらぬたちけるに○同廿八

猴にやりすこにやたしくかく大きなる女のきぬハ

雪にあひてたちけるひ

たてけたる障子

宇治卅三 妻戸にあたりてたてしくしてたてけ

通りつうたいふのかまたてかけてつゝ間ニ立

たてけたる障子を引あけたるに○聖ふたく

けたるにしてハあしとおすしゝかし○枕四 乞食ノ尼

故 女の法師のたてきたるかみハうすきの筒すうや

のやうに細く短きを常をわたと立すたうねゆる衣と

えいかんうらんかおもしやうれにたてけたるを見て猴

のさまにていふ所のもの○丹後守為書百首 雪消ゆる

山ふところのたくくるハ焼たゝうちたてかうつ集々わ

すけ　髪ノ語

四ノ八

○夫木十八 衣笠 あなたのかはの煙のたちくもの空人のたちぞ

やきのなかのたちけしにそしけるる○同十八 家隆 さひし

さのゆるへねかの紫やのたちなりあかまつさいかの花は

たてきかんそ

すげ舟

夫木 卅三 ともの絵に 蔵方卿居 一すたいの波にあふみにたちかし

雪のすたにゆくの声流るゝとのあさみ〇千五百番歌合 顕昭
あさふ緑をよさむるあまのやさえつくるもすゞめの上にゐて
きゝたり鳴なり〇仁徳紀十三丁才 那珥波譬苔須儒赴
泥苔羅府許辞那豆游曽能赴尼苔羅府枯明游
赴泥苔礼〇和訓栞ニ顕昭ノ哥をおきてあやまれり
引出たり〇体ノ語スヽム傍ニ出ス

勧
スヽメ

雀
すゞめ
曽丹集 浅芽生はすゞめかくれに成にけりなかなたへ木のしたは
こぐらくなりなり〇カゲロフ日記下ノ十九 三月に成ぬ木芽すゞめ
雀がくれに成て〇新六帖 まなかしはらへのそらす
まきさゝ成ぬ雀がくれも成にけり

すゞき
夫木 長房 あさ日かげはしはしのいとすゝきまで
をみなへしの露やおもむくらん〇夫木 長明 山ほと經つゝ
すゝきの花すゝきかるかゆふまみ人まねくらし

すゞし 夜ノ十リ
ウツ八 あさしきるひとゝ方あさなて

さゞし 涼 十リ
夕すゞみ 夫九 玉葉 後京極 一声ふくるき外面の松の夕涼
一本のすゞしき秋風を〇夫九 後京極 山をさゝる

松かぜの朝ぼらけは人めかてすゞしかりけり○
拾二四 六のこゝろ秋またきの空もすゞしきかな千載
侍りし○名寄 初 すゞしからん ゆふぐれにすゞし
けるかな○新葉 十三 すゞしき秋の流を
○イセ七 平兼盛 夜ふけて衛士しく風吹くを
すゞしき笠
猿源 二十三 清心の内は何ごともすゞしくて初秋かぜ
見侍るは○柳原 九 四月のあしたかはねを出立
けふきをのこあかきはすゞしき笠ありておもむき
あひぬべきを立なり○[illegible] 四つ九 字九 [illegible]ひと冬そらわ
はすゞしき道のしらえ人あへて何とも侍られ○イ 八雲

すゞしきすゞみ
夫木 九 仲綱 月やどる岩井のみづを手にむすびすゞしく
さまよふ玉をおもふかな○同 為家 石の上にながるる
滝のうしろにすゞしさよまさる玉やみえけんぬら○
朗詠 納涼 匡衡 燕昭王招涼之玉當沙月号自得
タリ 事見王子拾遺記
ずゞ
類政集 下 人しれず思ひけるを女のもとよりすゞしくて
ひとへ書つけてはすゞしきを 初秋のことわりも
まちしまちすゞしの露こそかはりに かねは世しかは

圖書局文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan